

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第367集

熊 谷 市

宮 町 遺 跡

さいたま地方・家庭裁判所熊谷支部庁舎新営工事
埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 1 0

最 高 裁 判 所

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

本県は、高次の都市機能と交通利便性を備えるとともに豊かな自然に恵まれた地域です。熊谷市は県北部にあって、自然との調和をとりながら中核都市として発展してきましたが、周辺3町との合併によってますますその都市機能を充実させています。歴史的には、源平合戦で勇名をはせた熊谷次郎直実緑りの地としても知られています。市内には多くの文化財がありますが、熊谷寺は中世に活躍した熊谷氏の館跡に比定されています。また、弥生時代から平安時代を中心とする大規模な遺跡である北高遺跡など多くの遺跡が所在します。

このたび、さいたま地方・家庭裁判所熊谷支部庁舎が、老朽化などにより建て替え工事が行われることになりました。当地は熊谷氏館跡に隣接し、古代から中世を主体とする遺跡の存在が確認されたことにより、その取扱いについて埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。発掘調査は最高裁判所の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、奈良時代と平安時代及び中近世の遺構と遺物が多数見つかりました。特に、平安時代では四面庇付の掘立柱建物跡が発見され、緑釉陶器、灰釉陶器などの他の地域で生産された高級食器類も数多く出土しました。このことから、本遺跡は古代の役所や寺院のような性格をもった遺跡であることがわかりました。

本書はこれらの成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護、普及・啓発の資料として、また、学術研究の資料として広く活用いただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力を頂きました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、最高裁判所、熊谷市教育委員会並びに地元関係者の方々に深く感謝申し上げます。

平成22年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 刈 部 博

宮町遺跡の紹介

宮町遺跡^{みやちやう}は、埼玉県北部の熊谷市宮町に所在します。遺跡は、荒川新扇状地に形成された自然堤防上に立地しています。

宮町遺跡の発掘調査は、熊谷市街地での本格的な発掘調査として初めてのもので、奈良・平安時代と中・近世の人々の生活の跡が見つかりました。

奈良・平安時代は、^{たてあなに住居跡と、ほったてばしらたてもの跡と}竪穴住居跡と掘立柱建物跡などが見つかりました。特に掘立柱建物跡は、四面に^{ひさし}庇を持つ立派な建物で、火災に遭っていることがわかりました。当時の人たちが焼け跡を整理する際に掘った穴からは、^{ひよくゆうとうき}緑釉陶器や^{かいゆうとうき}灰釉陶器という高級な食器類が出土しました。また、出土した食器の中には「上家」と筆で書かれたものがあり、この建物跡が集落の中でも中心的な施設であったことをうかがわれます。

中世では、溝跡を調査しました。溝の中からは、中国から輸入された青磁の破片が出土しました。隣接する熊谷氏館跡に関連するものと考えられます。

例言

1. 本書は、埼玉県熊谷市宮町に所在する宮町遺跡第1次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
埼玉県熊谷市宮町1-68番地
平成21年4月15日付け 教生文第2-2号
3. 発掘調査は、さいたま地方・家庭裁判所熊谷支部庁舎新営工事事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、最高裁判所の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 発掘調査・整理報告書作成業務は1-3の組織により実施した。
第1次調査は、平成21年4月8日から平成21年8月31日まで、木戸春夫・黒坂祐二・大和田瞳が担当し実施した。
整理報告書作成業務は、平成21年10月3日から平成22年1月29日まで実施し、平成22年3月31日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第367集として印刷・刊行した。
5. 発掘調査における基準点測量は、東松山測量設計株式会社に委託した。
6. 発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は木戸が行った。福田 聖の協力を得た。
7. 出土品の整理・図版作成は主に木戸が行った。
8. 本書の執筆は、1-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が行い、その他は木戸が行った。
9. 本書の編集は木戸が行った。
10. 本書に掲載した資料は、平成22年4月以降埼玉県教育委員会が管理・保管する。
11. 発掘調査、本書の作成にあたり、下記の機関・方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。(敬称略)
熊谷市教育委員会
新井 端 吉野 健 蔵持俊輔 知久裕昭
石川俊英 中村倉司 楠沼幹夫 井上尚明
関 義則

凡例

1. 遺跡全体におけるX・Yの値は、世界測地系、国土標準平面直角座標第Ⅳ系（原点北緯36°00'00"、東経139°50'00"）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は全て座標北を示す。
C6グリッド北西杭の座標
X=16390m Y=-40290m
北緯36°08'48" 東経139°23'08"
2. 調査区で使用したグリッドは、座標値X=16410m、Y=-40340mを基準（A1グリッド）とし、10×10mのグリッドに設定した。
3. グリッドの名称は、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に算用数字（1・2・3…）を付し、アルファベットと算用数字を組み合わせた。
4. 本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は以下のとおりである。
SB…掘立柱建物跡 SA…柵列跡
SK…土塼 SJ…竪穴住居跡
SD…溝跡 SE…井戸跡 P…ピット・柱穴
5. 遺構番号は、整理・報告書作成の過程で振り替えたものについて新旧対象表を掲載した。
6. 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。例外的なものについては、個別に示した。
遺構図

全体図…1/200

掘立柱建物跡…1/60 土塼…1/60

竪穴住居跡…1/60 井戸跡…1/60

柵列…1/60 溝跡…1/80

遺物実測図

土器実測図…1/4 土鍾…1/3

石製品…1/3、1/4、1/6 鉄製品…1/3

7. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を表す。

8. 遺物観察表の略号は、以下のとおりである。

胎土

A雲母 B片岩 C角閃石 D長石 E石英

F軽石 G砂粒子 H赤色粒子 I白色粒子

J針状物質 K黑色粒子 Lその他

焼成

I良好 II普通 III不良

9. 遺物実測図のアミカケは灰釉陶器が20%、緑釉陶器が35%である。須恵器坏類については、ロクロ成形されたものは、すべて「須恵器」と表示し、いわゆる「土師質須恵器」等の名称は用いなかったが、酸化炭焼成されたものについてはその旨を備考欄に表示した。
10. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行1/25,000、都市計画地図1/2,500、を使用して、編集した。

目次

序
例言
凡例
目次

I 発掘調査の概要	1	(2) 井戸跡	15
1. 発掘調査に至る経過	1	2. 奈良・平安時代の遺構と遺物	16
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(1) 竪穴住居跡	16
3. 発掘調査・報告書作成の組織	2	(2) 掘立柱建物跡	45
II 遺跡の立地と環境	3	(3) 欄列跡	57
1. 地理的環境	3	(4) 土壇	59
2. 歴史的環境	5	(5) 溝跡	75
III 遺跡の概要	8	(6) グリッド出土遺物	77
IV 遺構と遺物	11	V 調査のまとめ	78
1. 中・近世の遺構と遺物	11	写真図版	
(1) 溝跡	11		

插图目次

第1図	埼玉県の地形	3	第36図	第17号住居跡出土遺物(1)	34
第2図	熊谷市周辺の地形分類図	4	第37図	第17号住居跡(2)	35
第3図	周辺の遺跡	6	第38図	第17号住居跡出土遺物(2)	35
第4図	基本土層	8	第39図	第17号住居跡出土遺物(3)	36
第5図	遺跡周辺の地形	9	第40図	第17号住居跡出土遺物(4)	37
第6図	全圖	10	第41図	第17号住居跡出土遺物(5)	38
第7図	中世の溝跡	12	第42図	第18号住居跡	41
第8図	第1・5号溝跡出土遺物	13	第43図	第18号住居跡出土遺物	42
第9図	第1・2号井戸跡	14	第44図	第21号住居跡・出土遺物	43
第10図	井戸跡出土遺物	15	第45図	第22号住居跡・出土遺物	43
第11図	第1・8号住居跡	17	第46図	第23号住居跡	44
第12図	第1号住居跡出土遺物	17	第47図	第23号住居跡出土遺物	45
第13図	第8号住居跡出土遺物	18	第48図	第24号住居跡	46
第14図	第2号住居跡・出土遺物	19	第49図	第24号住居跡出土遺物	46
第15図	第3・6号住居跡	19	第50図	第25号住居跡	47
第16図	第3号住居跡出土遺物	20	第51図	第25号住居跡出土遺物	47
第17図	第6号住居跡出土遺物	20	第52図	第1号掘立柱建物跡	48
第18図	第4号住居跡・出土遺物	20	第53図	第2・8号掘立柱建物跡(1)	49
第19図	第5号住居跡	21	第54図	第2・8号掘立柱建物跡(2)	50
第20図	第5号住居跡出土遺物	22	第55図	第2・8号掘立柱建物跡(3)	51
第21図	第7号住居跡	23	第56図	第2号掘立柱建物跡出土遺物(1)	52
第22図	第7号住居跡出土遺物	24	第57図	第2号掘立柱建物跡出土遺物(2)	53
第23図	第9号住居跡・出土遺物	24	第58図	第3・4号掘立柱建物跡(1)	55
第24図	第10・11号住居跡	25	第59図	第3号掘立柱建物跡出土遺物	55
第25図	第10号住居跡出土遺物	26	第60図	第10号溝跡出土遺物	55
第26図	第11号住居跡出土遺物	27	第61図	第3・4号掘立柱建物跡(2)	56
第27図	第12・15号住居跡	29	第62図	第6号掘立柱建物跡	57
第28図	第12号住居跡出土遺物	29	第63図	第7号掘立柱建物跡	57
第29図	第13・19・20号住居跡	30	第64図	第1・2号柵列跡	58
第30図	第13号住居跡出土遺物	31	第65図	土壇(1)	60
第31図	第20号住居跡出土遺物	31	第66図	土壇(2)	61
第32図	第19号住居跡出土遺物	31	第67図	土壇(3)	62
第33図	第14号住居跡	32	第68図	土壇(4)	63
第34図	第14号住居跡出土遺物	33	第69図	土壇出土遺物(1)	64
第35図	第17号住居跡(1)	34	第70図	土壇出土遺物(2)	65

第71図	土城出土遺物 (3)	66	第76図	土城出土遺物 (8)	71
第72図	土城出土遺物 (4)	67	第77図	溝跡 (1)	75
第73図	土城出土遺物 (5)	68	第78図	溝跡 (2)	76
第74図	土城出土遺物 (6)	69	第79図	グリッド出土遺物	77
第75図	土城出土遺物 (7)	70			

表 目 次

第1表	周辺の遺跡	7	第22表	第17号住居跡出土遺物観察表 (1)	39
第2表	第1号溝跡出土遺物観察表	13	第23表	第17号住居跡出土遺物観察表 (2)	40
第3表	第5号溝跡出土遺物観察表	13	第24表	第18号住居跡出土遺物観察表	42
第4表	第1号井戸跡出土遺物観察表	15	第25表	第21号住居跡出土遺物観察表	43
第5表	第2号井戸跡出土遺物観察表	15	第26表	第22号住居跡出土遺物観察表	44
第6表	第1号住居跡出土遺物観察表	17	第27表	第23号住居跡出土遺物観察表	45
第7表	第8号住居跡出土遺物観察表	18	第28表	第24号住居跡出土遺物観察表	46
第8表	第2号住居跡出土遺物観察表	19	第29表	第25号住居跡出土遺物観察表	47
第9表	第3号住居跡出土遺物観察表	20	第30表	第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (1)	53
第10表	第6号住居跡出土遺物観察表	20	第31表	第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (2)	54
第11表	第4号住居跡出土遺物観察表	20	第32表	第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表	55
第12表	第5号住居跡出土遺物観察表	22	第33表	第10号溝跡出土遺物観察表	55
第13表	第7号住居跡出土遺物観察表	24	第34表	土城計測表	63
第14表	第9号住居跡出土遺物観察表	24	第35表	土城出土遺物観察表 (1)	71
第15表	第10号住居跡出土遺物観察表	26	第36表	土城出土遺物観察表 (2)	72
第16表	第11号住居跡出土遺物観察表	28	第37表	土城出土遺物観察表 (3)	73
第17表	第12号住居跡出土遺物観察表	30	第38表	土城出土遺物観察表 (4)	74
第18表	第13号住居跡出土遺物観察表	31	第39表	土城出土遺物観察表 (5)	75
第19表	第19号住居跡出土遺物観察表	31	第40表	グリッド出土遺物観察表	77
第20表	第20号住居跡出土遺物観察表	31	第41表	遺構新旧対照表	77
第21表	第14号住居跡出土遺物観察表	33			

写 真 図 版 目 次

図版1	1 調査区全景 (西から)	図版2	1 第7号住居跡
	2 第2号住居跡		2 第1・8号住居跡
	3 第3・6号住居跡		3 第9号住居跡
	4 第4号住居跡		4 第10・11号住居跡
	5 第5号住居跡		5 第12・15号住居跡

	6	第17号住居跡	3	第5号住居跡 (第20図1)	
	7	第17号住居跡出土遺物	4	第5号住居跡 (第20図2)	
	8	第17号住居跡カマド	5	第5号住居跡 (第20図3)	
図版3	1	第13・14・18・19・20・21号住居跡	6	第5号住居跡 (第20図4)	
	2	第13号住居跡カマド	7	第5号住居跡 (第20図5)	
	3	第14号住居跡カマド	8	第5号住居跡 (第20図6)	
	4	第18号住居跡	9	第7号住居跡 (第22図1)	
	5	第18号住居跡遺物出土状況	図版8	1	第7号住居跡 (第22図2)
	6	第21号住居跡	2	第7号住居跡 (第22図3)	
	7	第23号住居跡	3	第7号住居跡 (第22図5)	
	8	第24・25号住居跡	4	第8号住居跡 (第13図1)	
図版4	1	第1号掘立柱建物跡 (北から)	5	第8号住居跡 (第13図2)	
	2	第2号掘立柱建物跡 (南から)	6	第8号住居跡 (第13図3)	
	3	第3号掘立柱建物跡 (東から)	7	第8号住居跡 (第13図4)	
	4	第1号土壌	8	第9号住居跡 (第23図2)	
	5	第2・3・4号土壌	図版9	1	第10号住居跡 (第25図1)
	6	第6号土壌	2	第10号住居跡 (第25図2)	
	7	第7号土壌	3	第10号住居跡 (第25図3)	
	8	第9号土壌土層断面	4	第10号住居跡 (第25図4)	
図版5	1	第9号土壌 (南から)	5	第10号住居跡 (第25図5)	
	2	第9号土壌 (西から)	6	第10号住居跡 (第25図6)	
	3	第9号土壌遺物出土状況	7	第10号住居跡 (第25図7)	
	4	第9号土壌遺物出土状況 (部分)	8	第10号住居跡 (第25図8)	
	5	第13号土壌	9	第10号住居跡 (第25図9)	
	6	第13・14・16号土壌	10	第10号住居跡 (第25図10)	
	7	第13号土壌土層断面	図版10	1	第10号住居跡 (第25図11)
	8	第14号土壌土層断面	2	第10号住居跡 (第25図12)	
図版6	1	第15号土壌	3	第11号住居跡 (第26図1)	
	2	第21号土壌	4	第11号住居跡 (第26図4)	
	3	第21号土壌遺物出土状況	5	第11号住居跡 (第26図6)	
	4	第27号土壌	6	第11号住居跡 (第26図11)	
	5	中世溝跡	7	第11号住居跡 (第26図12)	
	6	第3・5・8号溝跡	8	第11号住居跡 (第26図13)	
	7	第1号溝跡礫出土状況	9	第11号住居跡 (第26図14)	
	8	第1号溝跡礫付出土状況	10	第11号住居跡 (第26図15)	
図版7	1	第4号住居跡 (第18図1)	図版11	1	第11号住居跡 (第26図16)
	2	第4号住居跡 (第18図2)	2	第11号住居跡 (第26図17)	

	3	第11号住居跡 (第26図18)		10	第17号住居跡 (第40図35)
	4	第11号住居跡 (第26図19)	図版15	1	第17号住居跡 (第40図36)
	5	第11号住居跡 (第26図20)		2	第17号住居跡 (第40図37)
	6	第11号住居跡 (第26図21)		3	第17号住居跡 (第40図38)
	7	第14号住居跡 (第34図1)		4	第17号住居跡 (第40図39)
	8	第14号住居跡 (第34図2)		5	第17号住居跡 (第40図40)
	9	第14号住居跡 (第34図3)		6	第17号住居跡 (第40図41)
	10	第17号住居跡 (第36図1)		7	第17号住居跡 (第40図42)
図版12	1	第17号住居跡 (第36図2)		8	第17号住居跡 (第40図43)
	2	第17号住居跡 (第36図3)		9	第17号住居跡 (第40図44)
	3	第17号住居跡 (第36図4)		10	第17号住居跡 (第40図45)
	4	第17号住居跡 (第38図5)	図版16	1	第17号住居跡 (第40図46)
	5	第17号住居跡 (第38図6)		2	第17号住居跡 (第40図47)
	6	第17号住居跡 (第38図7)		3	第17号住居跡 (第40図52)
	7	第17号住居跡 (第38図8)		4	第17号住居跡 (第40図53)
	8	第17号住居跡 (第39図9)		5	第17号住居跡 (第40図54)
	9	第17号住居跡 (第39図10)		6	第17号住居跡 (第40図55)
	10	第17号住居跡 (第39図11)		7	第17号住居跡 (第40図56)
図版13	1	第17号住居跡 (第39図12)		8	第17号住居跡 (第40図57)
	2	第17号住居跡 (第39図13)		9	第17号住居跡 (第40図58)
	3	第17号住居跡 (第39図14)		10	第17号住居跡 (第40図59)
	4	第17号住居跡 (第39図15)	図版17	1	第17号住居跡 (第41図60)
	5	第17号住居跡 (第39図16)		2	第17号住居跡 (第41図61)
	6	第17号住居跡 (第39図17)		3	第17号住居跡 (第41図62)
	7	第17号住居跡 (第39図20)		4	第17号住居跡 (第41図64)
	8	第17号住居跡 (第39図21)		5	第17号住居跡 (第41図65)
	9	第17号住居跡 (第39図22)		6	第17号住居跡 (第41図67)
	10	第17号住居跡 (第39図24)		7	第17号住居跡 (第41図68)
図版14	1	第17号住居跡 (第39図25)	図版18	1	第18号住居跡 (第43図1)
	2	第17号住居跡 (第39図26)		2	第18号住居跡 (第43図6)
	3	第17号住居跡 (第39図27)		3	第18号住居跡 (第43図7)
	4	第17号住居跡 (第39図28)		4	第18号住居跡 (第43図8)
	5	第17号住居跡 (第39図29)		5	第18号住居跡 (第43図9)
	6	第17号住居跡 (第39図30)		6	第18号住居跡 (第43図10)
	7	第17号住居跡 (第39図31)		7	第19号住居跡 (第32図5)
	8	第17号住居跡 (第39図32)	図版19	1	第19号住居跡 (第32図6)
	9	第17号住居跡 (第40図34)		2	第22号住居跡 (第45図1)

	3	第19号住居跡 (第32図7)		7	第9号土塙 (第70図57)
	4	第24号住居跡 (第49図1)		8	第9号土塙 (第70図58)
	5	第24号住居跡 (第49図2)		9	第9号土塙 (第70図59)
	6	第2号掘立柱建物跡 (第56図4)		10	第9号土塙 (第70図60)
	7	第2号掘立柱建物跡 (第56図32)	図版24	1	第9号土塙 (第70図61)
図版20	1	第2号掘立柱建物跡 (第56図8)		2	第9号土塙 (第70図62)
	2	第2号掘立柱建物跡 (第56図35)		3	第9号土塙 (第71図63)
	3	第3号掘立柱建物跡 (第59図1)		4	第9号土塙 (第71図64)
	4	第2号土塙 (第69図1)		5	第9号土塙 (第71図65)
	5	第2号土塙 (第69図2)		6	第9号土塙 (第71図66)
	6	第2号土塙 (第69図4)		7	第9号土塙 (第71図67)
図版21	1	第3・4号土塙 (第69図8)		8	第9号土塙 (第71図68)
	2	第4号土塙 (第69図9)		9	第9号土塙 (第71図69)
	3	第4号土塙 (第69図10)		10	第9号土塙 (第71図70)
	4	第6号土塙 (第69図19)	図版25	1	第9号土塙 (第71図71)
	5	第6号土塙 (第69図20)		2	第9号土塙 (第71図72)
	6	第7号土塙 (第69図21)		3	第9号土塙 (第71図73)
	7	第7号土塙 (第69図22)		4	第9号土塙 (第71図74)
	8	第7号土塙 (第69図23)		5	第9号土塙 (第71図75)
	9	第7号土塙 (第69図34)		6	第9号土塙 (第71図76)
	10	第9号土塙 (第70図39)		7	第9号土塙 (第71図77)
図版22	1	第9号土塙 (第70図40)		8	第9号土塙 (第71図78)
	2	第9号土塙 (第70図41)		9	第9号土塙 (第71図79)
	3	第9号土塙 (第70図42)	図版26	1	第9号土塙 (第71図80)
	4	第9号土塙 (第70図43)		2	第9号土塙 (第71図81)
	5	第9号土塙 (第70図44)		3	第9号土塙 (第71図82)
	6	第9号土塙 (第70図45)		4	第9号土塙 (第71図83)
	7	第9号土塙 (第70図46)		5	第9号土塙 (第71図84)
	8	第9号土塙 (第70図47)		6	第9号土塙 (第71図86)
	9	第9号土塙 (第70図48)		7	第9号土塙 (第72図87)
	10	第9号土塙 (第70図49)	図版27	1	第9号土塙 (第72図88)
図版23	1	第9号土塙 (第70図50)		2	第9号土塙 (第72図89)
	2	第9号土塙 (第70図51)		3	第9号土塙 (第72図90)
	3	第9号土塙 (第70図52)		4	第9号土塙 (第72図91)
	4	第9号土塙 (第70図54)		5	第9号土塙 (第72図93)
	5	第9号土塙 (第70図55)		6	第9号土塙 (第72図94)
	6	第9号土塙 (第70図56)		7	第9号土塙 (第72図95)

	8	第9号土壌 (第72図96)		4	第14号土壌 (第74図148)
	9	第9号土壌 (第72図97)		5	第14号土壌 (第74図149)
	10	第9号土壌 (第72図98)		6	第14号土壌 (第74図150)
	11	第9号土壌 (第72図99)		7	第14号土壌 (第74図151)
	12	第9号土壌 (第72図101)		8	第13・14・16号土壌 (第74図154)
図版28	1	第9号土壌 (第72図105)		9	第13・14・16号土壌 (第74図155)
	2	第9号土壌 (第72図106)		10	第15号土壌 (第74図157)
	3	第9号土壌 (第72図107)	図版32	1	第20号土壌 (第74図159)
	4	第9号土壌 (第72図108)		2	第21号土壌 (第75図163)
	5	第9号土壌 (第72図109)		3	第21号土壌 (第75図164)
	6	第9号土壌 (第72図110)		4	第21号土壌 (第75図165)
	7	第9号土壌 (第72図111)		5	第21号土壌 (第75図166)
	8	第9号土壌 (第73図112)		6	第21号土壌 (第75図167)
	9	第9号土壌 (第73図113)		7	第21号土壌 (第75図168)
	10	第9号土壌 (第73図114)		8	第21号土壌 (第75図170)
図版29	1	第9号土壌 (第73図115)	図版33	1	第21号土壌 (第75図171)
	2	第9号土壌 (第73図116)		2	第21号土壌 (第75図175)
	3	第9号土壌 (第73図117)		3	第21号土壌 (第75図176)
	4	第9号土壌 (第73図118)		4	第21号土壌 (第75図177)
	5	第9号土壌 (第73図119)		5	第21号土壌 (第75図179)
	6	第13号土壌 (第73図127)		6	第21号土壌 (第75図180)
	7	第13号土壌 (第73図128)		7	第21号土壌 (第75図191)
	8	第9号土壌 (第73図120)		8	第21号土壌 (第75図192)
	9	第9号土壌 (第73図121)		9	第21号土壌 (第75図193)
図版30	1	第13号土壌 (第73図129)		10	第22号土壌 (第76図197)
	2	第13号土壌 (第73図130)	図版34	1	第22号土壌 (第76図198)
	3	第13号土壌 (第73図131)		2	第26号土壌 (第76図202)
	4	第13号土壌 (第73図132)		3	第26号土壌 (第76図206)
	5	第13号土壌 (第73図133)		4	第27号土壌 (第76図207)
	6	第13号土壌 (第73図134)		5	第27号土壌 (第76図208)
	7	第13号土壌 (第74図135)		6	第27号土壌 (第76図209)
	8	第13号土壌 (第74図136)		7	第27号土壌 (第76図210)
	9	第13号土壌 (第74図141)		8	グリッド (第79図5)
	10	第13号土壌 (第74図142)		9	第2号井戸跡 (第10図8)
図版31	1	第13号土壌 (第74図143)	図版35	緑釉陶器 1	第40図50・51 第56図3・6
	2	第14号土壌 (第74図145)		緑釉陶器 2	第56図7
	3	第14号土壌 (第74図147)			

- 第57图61·62·65~68图
- 图版36 緑釉陶器3 (第57图69~71图
第69图5·第74图153
第75图188·189·212
- 图版37 緑釉陶器4 (第57图63内面)
緑釉陶器5 (第57图63外面)
緑釉陶器6 (第57图64)
- 图版37 灰釉陶器1 第40图48·49
第49图3
第56图1·2·5·27
- 灰釉陶器2 第56图37·38
灰釉陶器3 第56图33·34·39~42
- 图版38 灰釉陶器4 第56图31
灰釉陶器5 第56图43
第57图54~57·59·60
- 灰釉陶器6 第8图1
第57图76·78~80
第69图28~33
- 图版39 灰釉陶器7 第8图2·5
灰釉陶器8 第10图7
灰釉陶器9 第72图102~104
第74图139·140·156·160
- 图版40 灰釉陶器10 第69图27·第74图152
灰釉陶器11 (第72图100内面)
灰釉陶器12 (第72图100外面)
- 图版41 灰釉陶器13 第75图182~187
第79图3·4
灰釉陶器14 (第75图181·第76图211)
灰釉陶器15 (第79图6)
- 图版42 硯 第12图1·第43图2
第75图190
青磁·石磁·瓦 SD1·第8图3
第79图9
黑色土器 第57图74·75
第69图6·第79图7
- 图版43 紡錘車 第74图161
第26图28
漆付着土器片 (第69图15)
土錘 第10图9·第12图2
第20图8~10·第26图27
第34图6·7·第41图71
第44图3·第47图2~6
第56图9~24
第57图45~52·72
第69图7·16·17
第73图123~126
第75图194·第79图8
- 图版44 砥石 第20图14·第34图8
第43图11·第74图144
金属製品 第10图10·第20图11~13
第32图8·第44图4
第56图25·26
第57图53·73·77
第69图18·35~38
第75图195·196

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

最高裁判所では、さいたま地家裁熊谷支部庁舎の老朽化のため改築を実施することとなった。埼玉県教育庁市町村支援部生涯学習文化財課では、国が実施する公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

当該建設事業に先立ち、さいたま地方裁判所長から平成20年11月6日付けで、文化財の所在及び取扱いについて、熊谷市教育委員会教育長あてに照会があった。

これに対し熊谷市教育委員会では、平成20年11月28日に遺跡所在確認のための試掘調査を実施し、その結果、埋蔵文化財の所在が明らかになった。

埼玉県教育庁市町村支援部生涯学習文化財課では、熊谷市教育委員会の試掘調査結果を受け、さらに埋蔵文化財保護のための調整を進めたが、当該埋蔵文化財の詳細な内容が不明であったため、さいたま地方裁判所長から平成21年1月27日付けで、埼玉県教育委員会教育長あてに再度文化財の所在及び取扱いについての照会が行われた。

生涯学習文化財課では、平成21年1月24日に遺跡の内容把握のための確認調査を実施した結果、埋蔵文化財の詳細が明確になり、平成21年2月13日付け教生文第276号で次の内容の回答を行った。

1 埋蔵文化財の所在

名称(No.)	種別	時代	所在地
宮町遺跡 (No.59-112)	集落跡	奈良・平安・鎌倉	熊谷市宮町 1-68

2 法手続

工事予定地内には、上記の埋蔵文化財包蔵地が所在しますので、工事着工に先立ち、文化財保護法第94条の規定による発掘通知を提出してください。

3 取扱いについて

別紙赤塗りの「発掘調査が必要な区域」については、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

青塗りの「工事立会が必要な区域」については工事の際に職員が立ち会うこととしたいので、事前に当該担当職員と連絡をとるようにお願いします。

緑塗りの「工事に着手して差し支えない区域」については工事に着手して差し支えありませんが、工事中に新たに埋蔵文化財を発見した場合は、直ちに工事を中止して、取扱いについて埼玉県教育庁市町村支援部生涯学習文化財課と協議してください。

最高裁判所と生涯学習文化財課・熊谷市教育委員会は、その取扱いについて協議を重ねたが、現状保存が困難であることから記録保存の措置を講ずることになった。その後、発掘調査実施機関である財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、最高裁判所・生涯学習文化財課の三者で調査計画等について協議した。

文化財保護法第94条第1項の規定による埋蔵文化財発掘通知が最高裁判所事務総局総務局長から提出され、同条第2項の規定により、記録保存のための発掘調査を実施するよう埼玉県教育委員会教育長から通知した。その後、同法第92条第1項の規定による発掘調査届が財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され、発掘調査が実施された。

発掘通知及び発掘調査届に対する県教育委員会教育長からの勧告及び指示通知は次のとおりである。

発掘通知に対する勧告：

平成21年3月24日付け教文第4-1167号

発掘調査届に対する指示通知：

平成21年4月15日付け教生文第2-2号

(埼玉県教育庁市町村支援部生涯学習文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

宮町遺跡の発掘調査は、平成21年4月8日から平成21年7月31日まで実施した。調査面積は当初740㎡の予定であったが、建物の設計変更により765㎡となった。調査にあたっては、最高裁判所との打ち合わせ、近隣住民への説明会、オリエンテーションなどを行い、実質的な調査を始めたのは4月27日からであった。調査区は駐車場であったため、アスファルトとその下に敷設された碎石の除去から始め、順次無遺物層の除去を行い、深さ1.3～1.5mで遺構確認を行った。遺構確認作業においてサブトレンチを掘削したところ、その掘削面では遺構が捉えきれないことが判明し、再度掘削を行った。その結果、地表下1.7mで遺構を確認した。遺構確認の結果、当初の予想を上回る遺構が検出されたため、調査期間を1か月延長し7月31日までとした。遺構精査の後、遺構図面の

作成、写真撮影を行い、7月27日に高所作業車で全景写真撮影を実施した。

遺構調査終了後、事務所撤去、事務手続きを行って調査を終了した。

(2) 整理・報告書作成

整理・報告書作成事業は、平成21年10月3日から平成22年1月29日まで実施した。開始当初は出土遺物の水洗・註記を行い、続いて接合・復原作業を行った。並行して全体図・遺構図面の修正をして第二原図を作成し、スキャナーで取り込んでデジタルトレースを行った。遺物は復原が終了したのから実測作業を始め、順次トレース・採拓を行った。12月中旬からは遺物図版の版組を開始し1月初めに遺物写真撮影を行った。その後図版の割り付け、原稿執筆を行い、1月末に印刷会社を決定した。入校、校正を経て平成22年3月に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成21年度（発掘調査）

理 事 長	刈 部 博	調 査 部	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調 査 部 長	小 野 美代子
総務部		調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志	調 査 第 一 課 長	金 子 直 行
総 務 課 長	田 中 雅 人	主 査	木 戸 春 夫
		主 査	黒 坂 禎 二
		主 査	大 和 田 暲

平成21年度（報告書作成）

理 事 長	刈 部 博	調 査 部	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調 査 部 長	小 野 美代子
総務部		調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志	整 理 第 一 課 長	宮 井 英 一
総 務 課 長	田 中 雅 人	主 査	木 戸 春 夫

II 遺跡の立地と環境

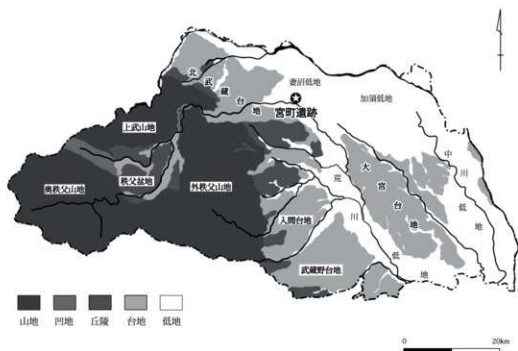
1. 地理的環境

宮町遺跡は、JR熊谷駅の北西約0.7kmに所在する。熊谷市は東京から50～70kmに位置し、東京への通勤圏内にあるとともに、県北部地域の中核都市として発展している。鉄道はJR高崎線と秩父線が通り、道路も国道17号線、125号線、407号線などが交差して南北と東西方向をつなぐ交通の要衝でもある。そのため、古くから開発が進み、遺跡周辺は、商店や住宅が密集し現在では旧地形を観察するのは困難になっている。

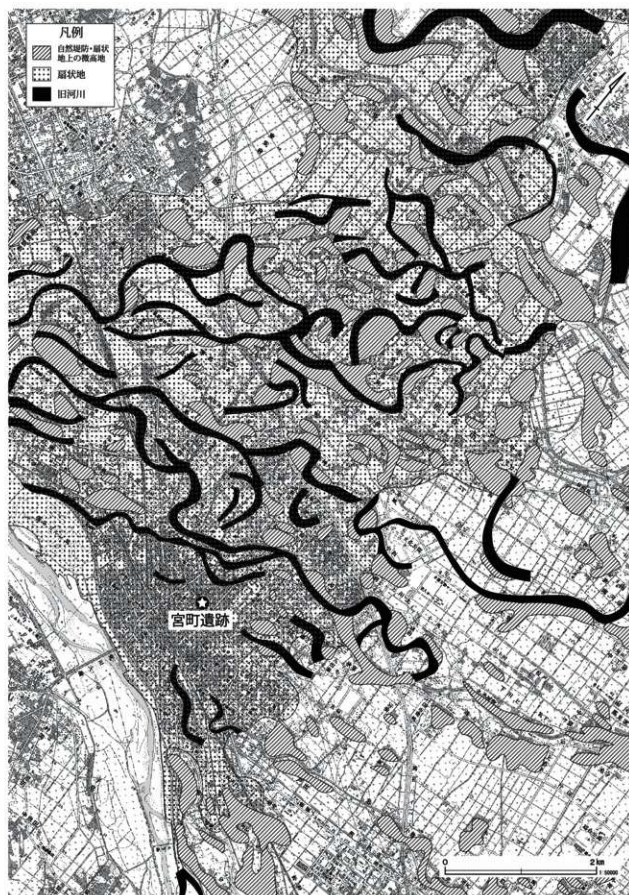
埼玉県の地形の特徴を大きく捉えると、西側が山地部で東側が平野部となっている（第1図）。平野部には低地が発達しているが、妻沼低地、加須低地、荒川低地、中川低地に分類される。

宮町遺跡の所在する熊谷市は、妻沼低地に含ま

れる。熊谷市周辺を少し細かく見ると、荒川が秩父山地から東に向かって流れだし、熊谷市街地付近で南東に流路を変えている。荒川が、秩父山地から流れ出る部分は低地に向かって土砂を押し出し、扇状地（荒川新扇状地）を形成している。この扇状地は明戸付近を扇頂とし、扇端は東別府付近から上之付近まで広がっている。扇状地上には中小の河川によって自然堤防や後背湿地がいくつも形成され、現在より起伏に富んでいたと考えられる。熊谷市の中心市街地は、自然堤防上に形成されているが、宮町遺跡周辺は早くから開発が進み、微地形は不明な部分が多い。しかし、小河川やそれによって形成された自然堤防が埋没していると思われる。



第1図 埼玉県の地形



第2図 熊谷市周辺の地形分類図

2. 歴史的環境

宮町遺跡は、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡である。熊谷市街地部分は、自然堤防上に立地しているが、早くから開発が進み市街地化したために、遺跡の所在は殆ど明確となっていない。一方、市街地周辺は、近年の開発によって多くの遺跡が調査されその内容が明らかになってきている。なかでも弥生時代から平安時代、中・近世に亘る北島遺跡は堀内有数の規模を有し、古代にはこの地域の中核的な存在であったことが知られる。ほかに木簡が出土した小敷田遺跡などがあり、この地域が早くから開発されていたことを物語る。

ここでは、宮町遺跡の営まれた時期である、奈良・平安時代と中世の遺跡について概観する。

この地域の集落は、低地という地形的制約のなかで自然堤防上の微高地に占地しているが、北島遺跡に見るように弥生時代以降稲作に取り組んできた。条里制が施行されるようになると、この地域にも条里が形成され、きかんに農業経営が行なわれたと考えられる。小敷田遺跡では、7世紀末から8世紀初頭ごろの稲の貸し付けを記した「出拳」木簡が出土している。熊谷市周辺には、低地部を中心に多くの条里地割が残っており、それらは大里条里、中条条里、池守条里、池上条里、妻沼条里、別府条里などと呼ばれている。なかでも、大里条里は、九条家本「延喜式」の裏文書「武蔵国大里郡平付」からその具体相を窺うことができる。大里条里は、南は和田吉野川から、北は忍川付近の範囲と推定されている。

この時期の代表的な遺跡である北島遺跡は、荒川扇状地の扇端部に位置し、奈良・平安時代の住居跡を300軒以上検出し、掘立柱建物跡、道路状遺構、河川跡などを調査した。9世紀前半には二重の溝で区画された内部に大型の掘立柱建物が構築され、位置を変えながら11世紀まで継続していた。緑釉陶器、灰釉陶器、黒書土器などを含む大

量の遺物が出土した。遺跡の継続性、遺構や遺物の内容から、古代におけるこの地域の中核的な位置を占めていた遺跡である。北島遺跡は星川の左岸に位置しているが、対岸には諏訪木遺跡がある。諏訪木遺跡では、平安時代の住居跡2軒をはじめ、溝に区画された中に掘立柱建物を中心とする集落が営まれ、緑釉陶器や灰釉陶器が出土した。また、河川跡からは古墳時代から平安時代に亘る祭祀跡が検出された。池上遺跡でも平安時代の掘立柱建物跡が調査されている。前中西遺跡では、住居跡とともに奈良・平安時代の掘立柱建物跡が10棟以上調査された。この地域では本遺跡を含めて、北島遺跡、諏訪木遺跡のように緑釉陶器、灰釉陶器を多量に出土する遺跡が多い。

平安時代末から中世は武蔵武士が活躍する時代である。周辺には中条氏館跡、成田氏館跡、熊谷氏館跡、箱田氏館跡、久下氏館跡など多くの館跡等があるが、この時代の遺跡の調査例は少なく具体的な状況は明らかでない。

調査された例として中条氏館跡がある。中条氏館跡は、中条家永の居館で常光院とその周辺とされる。常光院には土塁と堀が残っており、発掘調査では室町時代の遺物が出土したが、家永の時代ものはわかっていない。本遺跡に隣接する熊谷氏館跡は、現在の熊谷寺である。熊谷氏は桓武平氏北条氏一族で、二代直実が石橋山の戦い以後頼朝に仕え、一ノ谷の戦いでは平敦盛を討ち戦功をあげたのはつとに知られている。熊谷寺は直実が生まれ没した地とされるが、当時の遺構などについての詳細は不明である。熊谷寺の南東約200mには直実の父直貞が建てたといわれる千形神社がある。千形神社からさらに約200m東には高城神社がある。創建年代は不明であるが、延喜式神名帳にある「大里郡一座高城神社」に比定するのが通説である。



第3図 周辺の遺跡

Ⅲ 遺跡の概要

宮町遺跡は、JR熊谷駅の北西約0.7kmに所在する。遺跡の範囲は南北約220m、東西約180mで、標高は28mである。発掘調査はさいたま地方・家庭裁判所熊谷支部庁舎新営工事に伴うもので、平成21年4月8日から7月31日まで実施した。

遺跡は、熊谷市街地が囲関する荒川新扇状地の自然堤防上に立地する。熊谷市街地は早くから開発が進み、市街地における遺跡の分布状況は明確には把握できなくなっている。市街地で遺跡として登録されているのは、鎌倉時代に活躍した熊谷次郎直実で知られる熊谷氏館跡で、本遺跡の範囲と西側で一部重複している。その館跡とされる熊谷寺（ゆうこくじ）は、今回の調査地点から南西に約200mの至近距離にある。また、南東方向に目を転じると、同じく約200mの距離に式内社である高城神社の柱が見える。このように本遺跡付近には、古代から中世の中核的な遺跡があることから、それらに関連する集落跡などが存在することは十分に想定される。

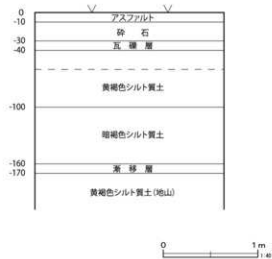
調査地点は、さいたま地方・家庭裁判所熊谷支部敷地内の駐車場部分であった。駐車場の舗装に伴うアスファルト、碎石などが地表下30cmまで敷かれており、その下に旧裁判所建物などに伴うと思われる瓦礫が10cmほど確認された。また、旧裁判所建物の基礎が部分的に残っていた。調査区の別の部分では、この層に焼土や炭化物が薄く認められる部分があり、第二次世界大戦における空襲による痕跡の可能性も考えられる。その下は黄褐色シルト質土が約60cm堆積していた。この層の上部は黄色味が薄く褐色がやや濃くなるが、層の移行は漸移的であった。上部には近世から近代にかけての陶磁器片などが少量見られ、下部には中世と思われる土器細片がわずかに含まれていた。下部の黄色味の強い部分は、とすると地山と誤認するほどである。この黄褐色土の下は、古代の層

である暗褐色シルト質土が厚く堆積している。層厚は約60cmで、場所によってはさらに厚い。全体に黄褐色土が混入し、中位以下は灰色味が強くなる。分層は可能であるが、場所によって堆積状況が一様でない。

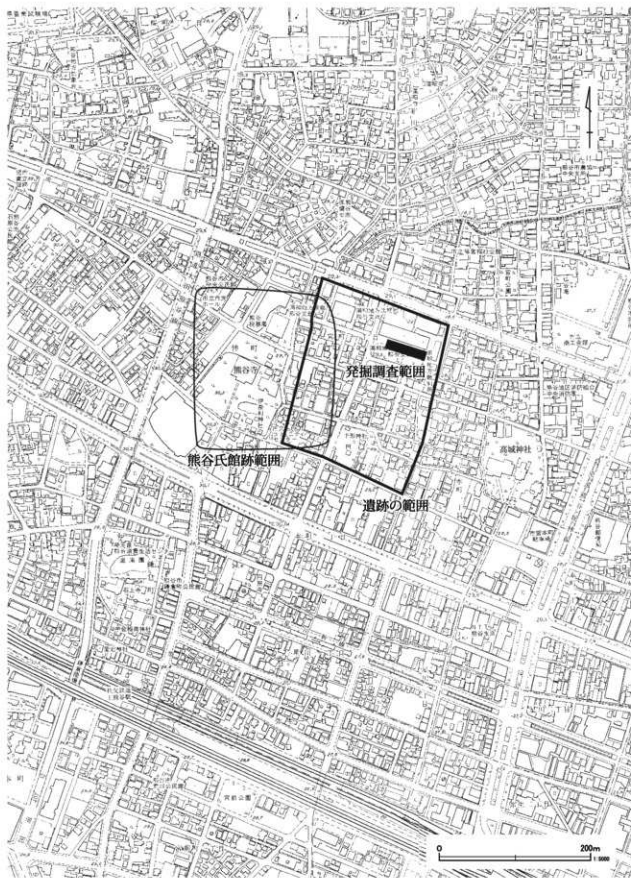
発掘調査の結果、奈良・平安時代から中・近世の遺構・遺物が検出された。

奈良・平安時代では、竪穴住居跡24軒、掘立柱建物跡7棟、土城2基、溝跡4条を調査した。住居跡の分布状況は、奈良時代は、調査区内でまんべんなく分布しており、近接しながらも重複するものは少ない。これに対し、平安時代ではB3グリッドとC6グリッドに集中し重複している。

掘立柱建物跡は、東西向いは南北に軸を合わせている。第2号掘立柱建物は4間×2間の身舎に四面庇を持つ建物と考えられ、柱穴覆土の状況などから焼失したと推定される。それを裏付ける状況として、認められる遺物を多量に出土した土壌がある。遺物は、完存率の高い坏類を主として、一括廃棄された状況であった。緑釉陶器や灰釉陶器、墨書土器が出土し、四面庇建物のあるこの地点が官衙や寺院のような性格を持つ施設の重要な部分であることを窺わせる。



第4図 基本土層



第5図 遺跡周辺の地形

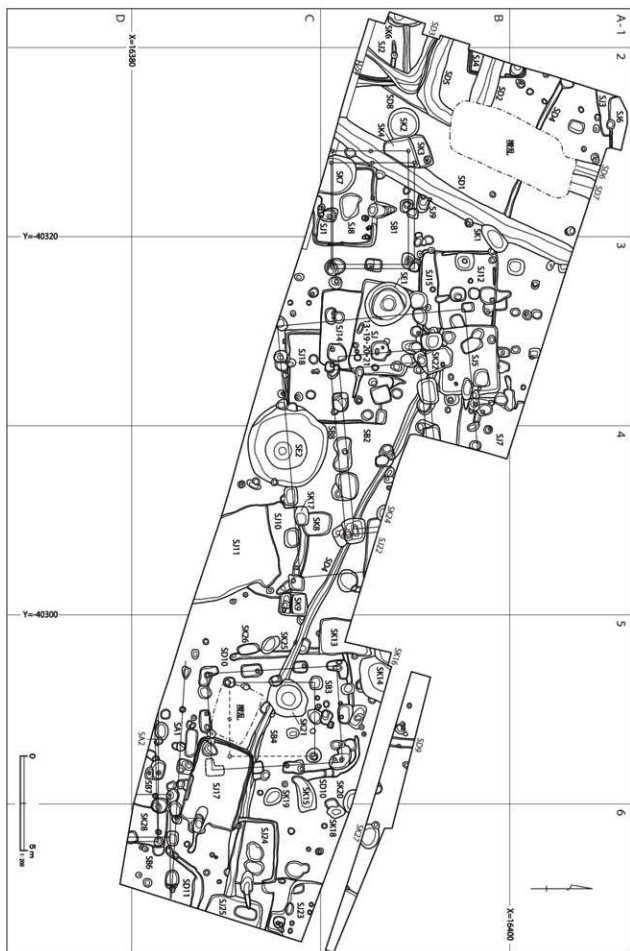


图 9 全场平面图

Ⅳ 遺構と遺物

1. 中・近世の遺構と遺物

(1) 溝跡

中世の溝跡は、調査区の西側に集中していた。断面形態は、箱葉研または葉研になるもので、覆土は上層から中層まで砂質の黄褐色土が堆積し、下層に暗褐色土や灰褐色土が堆積していた。堆積土下部には下層の遺構からの遺物が流れ込んでおり、溝跡出土の遺物の大半は古代の遺物である。第1号溝跡の東側には、中世の遺構が検出されなかったことから、第1号溝跡が東限となり、これ

第1号溝跡（第7・8図）

A2・3グリッドからB2・3グリッドにかけて検出した。第9号住居跡、第1号・3号・4号土壌、第4号溝跡と重複し、最も新しい。北側と南側は調査区外に延びる。検出した長さは14.12m、検出面での幅は1.09～1.44mで、底面の幅は0.38～0.62m、深さは調査区南端で79cm、北端では67cmである。底面は南側に向かってごくわずかに下がっている。溝方向はN-30°-Eである。断面は箱葉研型を呈し、覆土は自然堆積で、上層に砂質やシルト質の黄褐色土が厚く堆積していた。2層下面から拳大の円礫が溝方向に列状に検出された。これらの礫に混じて、牛または馬と思われる獣骨が出土した。獣骨も列状に散布しており1箇所にもまとめて廃棄したものではないと感じられた。獣骨は遺存状態があまりよくなかったために、取り上げる際に殆どが崩れてしまった。下顎骨はかろうじて検出時の原形をほぼ保つことができた（図版6-8）。

遺物は、最も多かったのは古代に属するものであるが、灰釉陶器などが混じていた。中世の遺物は平瓦と青磁の小破片が各1点出土した。青磁は盤などの比較的大型の容器のものである。小破片のため図示できなかった（図版42）。平瓦は厚

より西側に中世の遺構が広がるものと考えられる。今回の調査で検出した中世の遺構は溝跡だけであり、遺物も殆ど出土しなかったため、これらの溝跡がどのような性格を示すものか判断できないが、考えられる可能性としては、本遺跡の南西部に隣接する熊谷氏館跡との関係である。第1号溝跡から出土した一片の青磁の小破片がその資料的価値を持つ。

さ18cmで凹面に粗い布目痕が残り、凸面は粗い網目である。

年代を具体的に絞り込める遺物がないため、大きく13世紀頃としておきたい。

第2号溝跡（第7図）

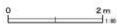
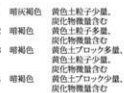
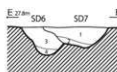
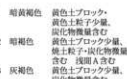
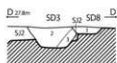
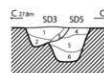
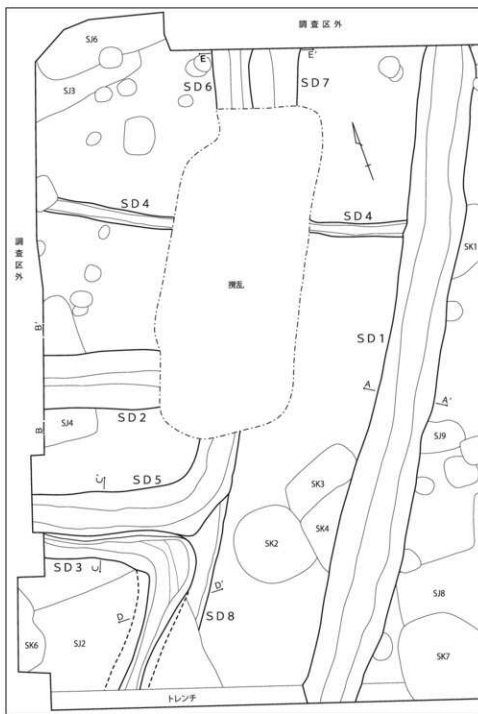
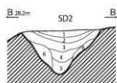
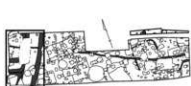
B2グリッドで検出した。第4号竪穴住居跡と重複し、これより新しい。西側は調査区外に延び、東側は攪乱によって壊されている。攪乱の東側には延びていないことから、この部分で方向を変え第5号溝跡とともに、第6号或いは第7号溝跡に続くと考えられる。検出した長さは2.47m、検出面での幅は1.13～1.24mで、底面の幅は0.16～0.32m、深さは調査区断面の観察では92cm以上である。溝の方位はN-72°-Wである。断面は葉研型を呈し、覆土は第1号溝跡と同様である。

遺物は、出土しなかった。

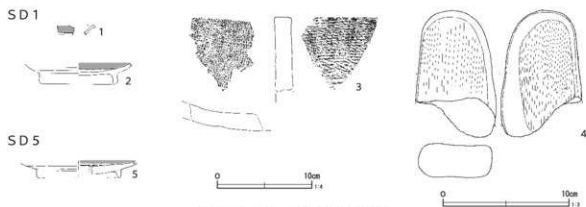
時期は溝の形状及び覆土の共通性から第1号溝跡と同時期と考えたい。

第3号溝跡（第7図）

B1・2グリッドで検出した。第5号・8号溝跡、第2号竪穴住居跡と重複し、第8号溝跡より古く第5号溝跡、第2号竪穴住居跡より新しい。第1号溝跡と平行に北東方向に延び、やや鋭角に西に方向を変える。南側と西側は調査区外に延び



第7図 中世の溝跡



第8図 第1・5号溝跡出土遺物

第2表 第1号溝跡出土遺物観察表 (第8図)

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SD1	灰釉陶器	埴	—	—	—	—	IK	I	灰白	SD1-5 撥投 破片
2	SD1	灰釉陶器	高台付埴	55	—	7.4	—	IK	I	灰白	SD1-2 撥投
3	SD1	土製品	平瓦	—	長さ17.91	幅17.91	厚さ1.7	—	—	—	SD1-1
4	SD1	石製品	砥石	—	長さ(20.0)	幅12.7	厚さ5.3	重さ1808.2g	—	—	SD1-6

第3表 第5号溝跡出土遺物観察表 (第8図)

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
5	SD5	灰釉陶器	高台付埴	35	—	(8.8)	—	K	I	灰白	SD5-1 撥投

る。検出した長さは北東方向に3.17m、西方向に2.83mである。幅は検出面で0.46~0.73m、底面は0.25~0.53mである。残存する深さは32~39cmである。埋没状況は自然堆積である。

遺物は、出土しなかった。

時期は覆土の状況が第1号・2号溝跡と類似することからこれらの溝跡と大きな時期差はないと考えておきたい。

第5号溝跡 (第7・8図)

B1・2グリッドで検出した。第3号・8号溝跡と重複し、両溝跡より古い。第3号溝跡と対照的に、西から東に伸びてほぼ直角に北に曲がる。西側は調査区外に伸び、北側は掘乱によって壊されている。掘乱の北側に第6号・7号溝跡があり、いずれかに続くものと思われる。検出した長さは東西方向に3.42m、南北方向に1.76m、底面の幅は0.45mである。確認面からの深さは67~68cmである。掘り込み面については、調査区西側が掘乱されていたため確認できなかった。埋没状況は自然堆積と考えられる。断面形態は箱葉研型を呈す

る。

遺物は、覆土下位から灰釉陶器(5)が出土したが、遺構の時期に伴う遺物は出土しなかった。

時期は第1号溝跡と同じく比較的大きな時間幅の中で捉えておきたい。

第6号溝跡 (第7図)

A2グリッドで検出した。第7号溝跡と重複し、これより古い。第1号溝跡とほぼ並行する南北方向の溝で、北側は調査区外に伸び、南側は掘乱によって壊されている。検出したのは長さ1.26mで、検出面での幅は0.75m、底面の幅は0.24mである。深さは50~55cmである。断面形は箱葉研型である。遺物は出土しなかった。

時期は第1号溝跡と同じく比較的大きな時間幅の中で捉えておきたい。

第7号溝跡 (第7図)

A2グリッドで検出した。第6号溝跡と重複し、これより新しい。第6号溝跡と同方向に伸びる南北方向の溝で、北側は調査区外に伸び、南側は掘乱によって壊されている。検出したのは長さ1.26

mで、検出面での幅は1.03m、底面の幅は0.49mである。深さは37～50cmである。断面形は箱葉研型である。

遺物は出土しなかった。

時期は第1号溝跡と同じく比較的大きな時間幅の中で捉えておきたい。また、本溝跡は第6号溝跡とともに、南側で検出された第2号・5号溝跡が続くものと思われるが、中央部にある擾乱のためその対応関係が不明である。

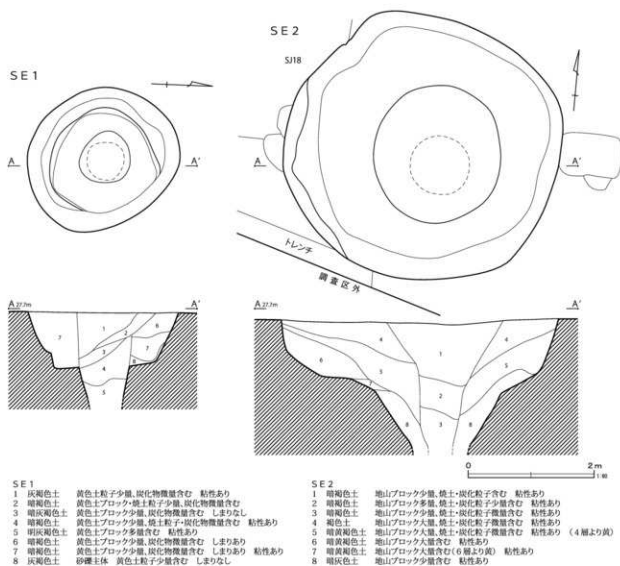
第8号溝跡（第7図）

B2グリッドで検出した。第3号・5号溝跡、

第2号竪穴住居跡と重複し、最も新しい。遺構確認時には、第3号・5号溝跡と重複して明瞭には認識できなかったが、土質断面の観察によって確認した。南側は調査区外に延び、北側は第5号溝跡と重複してプランが不明瞭であった。検出した長さは2.59m、幅は0.38～0.72mで、残存する深さは12～14cmと浅かった。

遺物は出土しなかった。

時期は不明であるが、中世というきわめて大きな範囲の中で捉えておきたい。



第9図 第1・2号井戸跡

遺物は、少量の出土で古代の土器を混入するが、染付磁器の細片数片と瓦が出土した。

時期は19世紀以降と考えられる。

第2号井戸跡（第9図）

B3・4、C3・4グリッドで検出した。第18号竪穴住居跡、第2号掘立柱建物跡と重複し、いずれよりも新しい。平面形態は円形で、掘り方の直径は4.37mである。深さは2.02mまで掘り下げたが、湧水したため危険と判断し、底面までの調査は断念した。確認面から0.94mまでは掘り方が広いが、以下は漏斗状に径を減じて深さ1.96mで

1.0mとなる。井筒は上部が漏斗型に開いているが、この部分はすでに崩れてからのものであろう。深さ1.60mでの直径は0.62mで、それ以下は径を減じている。掘り方は黄褐色土を主体とする土で埋められており、井筒部分を埋めた土は、暗褐色土が主体である。

遺物は古代のものかほとんどで、その時期も多様である。井戸跡に伴うものは、鉄軸掛けの香炉の小片が出土した。

時期を推定する遺物が殆どないが、出土した陶器から、18世紀後半から19世紀と考えられる。

2. 奈良・平安時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は2軒検出した。分布はB3・C3グリッドにおいて最も重複が激しく、C6グリッド付近にもややまとまりが見られる。調査面積が狭いため、遺跡全体での分布状況は不明であるが、密度が高い状態であることは明らかである。時期

は7世紀末～8世紀初頭から9世紀末～10世紀初頭にかけて構築されている。竈は古い時期の住居跡では、西或いは北向きに設置され、時期が下ると東向きに設置される傾向がうかがえる。

第1・8号竪穴住居跡（第11・12・13図）

B2・3、C2・3グリッドで検出した。第1号掘立柱建物跡、第7号土壌と重複しており、新旧関係は第8号竪穴住居跡→第1号竪穴住居跡→第1号掘立柱建物跡→第7号土壌の順に新しくなる。第1号掘立柱建物跡の調査を終えてから本遺構の調査を行ったが、プラン確認時には第1号竪穴住居跡の存在を認識できず土層断面の観察によってその存在を認識した。

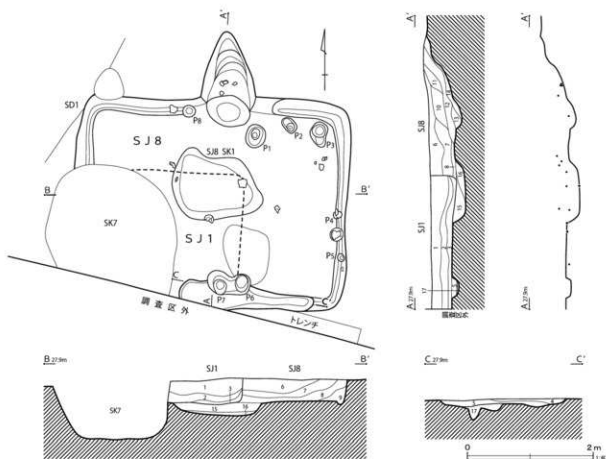
第1号竪穴住居跡は、南側は調査区外にかり西側は第7号土壌によって壊されている。北側の範囲は土層断面によって想定復原した。床面の高さは第8号竪穴住居跡とほぼ同じである。竈は東向きに設置されていた。竈底面には炭化物層が薄く残っており、煙道先端部は焼土が残っていた。住居跡の規模は不明であるが、竈を軸として北側は2.0mと推定される。竈の軸方位はN-94°-E

である。

遺物は、竈の覆土中から円面硯の破片と土鏝が1点出土した。

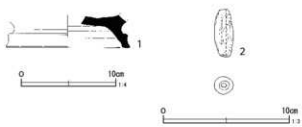
住居跡の時期を推定できる遺物は出土しなかったが、竈が東向きに設置されていることから、9世紀代の構築と考える。

第8号住居跡は、竈に対して横長の長方形を呈する。規模は、長軸4.35m、短軸3.32m、残存する深さ35cmを測り、主軸方位はN-3°-Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は平坦である。壁溝は竈部分を除いて全周していたと考えられる。壁溝の幅は10cm前後で、深さは8～10cmである。ピットは竈周辺に検出されたが、主柱穴は検出できなかった。南壁際のP6、P7は第1号住居跡の竈の下から検出した。直径約20cmで深さはいずれも17cmである。位置的に出入り口の施設と考えられる。床面中央に床下土壌を検出した。



- | | | | |
|---------|------------------------------------|---------|------------------------------------|
| 1 暗褐色土 | 黄色土粒子少量、炭化物塊を含む しまりあり | 10 暗褐色土 | 黄色土ブロック多量、焼土ブロックやや多量を含む |
| 2 暗褐色土 | 黄色土ブロックやや多量、焼土ブロック少量、炭化物塊を含む しまりあり | 11 暗褐色土 | しまりあり 粘性なし |
| 3 暗褐色土 | 黄色土粒子・焼土ブロック少量、炭化物塊を含む しまりあり 粘性あり | 12 暗褐色土 | 黄色土ブロック少量、焼土ブロック多量を含む |
| 4 暗褐色土 | 焼土ブロック・炭化粒子多量を含む | 13 暗褐色土 | 黄色土ブロック少量、焼土ブロックやや多量、炭化物多量を含む |
| 5 暗褐色土 | 黄色土ブロックを多量含む (カメラ覆り方) | 14 黒褐色土 | 焼土粒子少量、炭化物塊を含む |
| 6 暗褐色土 | 黄色土ブロック・焼土粒子やや多量、炭化物塊を含む | 15 暗褐色土 | ローム・ブロック少量、ローム粒子、焼土、炭化物・炭化物粒子少量を含む |
| 7 暗褐色土 | 黄色土ブロック少量、焼土粒子多量を含む しまりあり | 16 暗褐色土 | ローム・ブロック、ローム粒子多量、焼土・炭化物少量を含む |
| 8 暗灰褐色土 | 黄色土ブロック少量、焼土ブロックやや多量を含む しまりあり 粘性あり | 17 黄褐色土 | 暗褐色土少量を含む |
| 9 暗褐色土 | 黄色土粒子少量、炭化物塊を含む しまりあり | | |

第11図 第1・8号住居跡

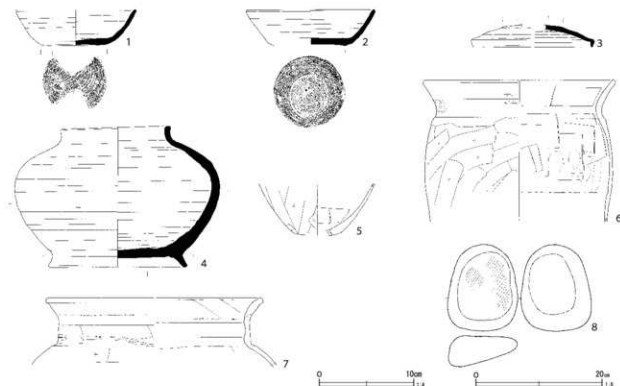


第12図 第1号住居跡出土遺物

不整楕円形で、長軸1.42m、短軸1.13m、深さは18cmである。竈は北壁中央に設置されていた。袖は検出できなかったが、壁溝が竈の両脇は掘られていないことから、この部分に袖があったと考えられる。燃焼部は床面を10cmほど掘り窪め、煙道は約25°の傾斜である。煙道先端は失われている。燃焼部からの長さは1.88m残存し、燃焼部の幅は0.69mである。

第6表 第1号住居跡出土遺物観察表 (第12図)

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ1	須恵器	甕	10	—	(12.2)	—	AH1K	I	灰	SJ1-1
2	SJ1	土製品	土錘	100	長さ3.7	幅1.5	孔径0.4	重さ6.7g	II	灰	SJ1-2



第13図 第8号住居跡出土遺物

第7表 第8号住居跡出土遺物観察表 (第13図)

番号	遺構	種別	器種	直径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ8	須恵器	坏	40	12.6	7.0	3.8	E I J K	I	灰	SJ8-7 南比企
2	SJ8	須恵器	坏	100	13.5	7.6	3.8	E H J K	I	暗青灰～赤黒青灰	SJ8-6 南比企
3	SJ8	須恵器	蓋	30	(12.4)	—	—	D E I J K	I	灰	SJ8-4 南比企
4	SJ8	須恵器	短頸壺	80	10.8	(14.0)	14.8	A D E I K	I	灰	SJ8-5
5	SJ8	土師器	甕	15	—	(4.6)	—	A H I K	II	灰黄褐	SJ8-3
6	SJ8	土師器	甕	20	(19.8)	—	—	A C E H I K	II	赤褐	SJ8-2 SK1と接合
7	SJ8	土師器	甕	25	(22.2)	—	—	A C E H I K	II	—	SJ8-1 SK1と接合
8	SJ8	石製品	砥石	長さ13.7	幅11.2	厚さ5.18	重さ1032.4g	—	—	—	SJ8-8 No.10・11接合

遺物は、覆土中から出土したものについては混入が認められるが、第13図2、坏は床面からの出土である。短頸壺は東壁際に正位の状態で検出した。

住居跡の時期は8世紀中葉と考えられる。

第2号竪穴住居跡 (第14図)

B1・2グリッドで検出した。南および西側は調査区外にかかり、住居跡全体の約1/4を調査した。第3号・8号溝跡、第6号土壇と重複し、本住居跡が最も古い。検出した規模は、北壁が約3.5m、東壁が約3.2m、残存する深さは25cmである。北壁の方はN-90°-Eである。埋没状況は自然堆積と判断できる。床面は平坦で、壁溝が

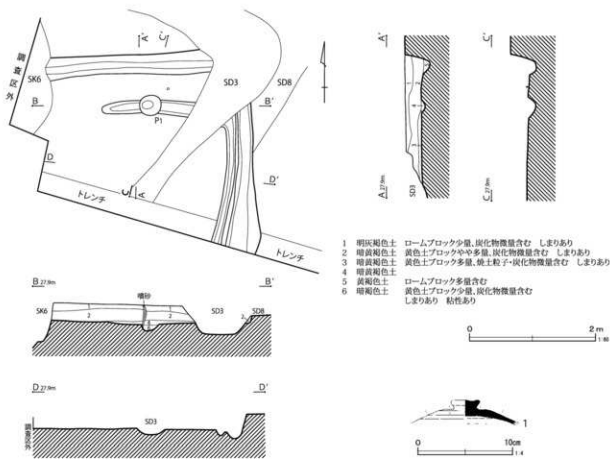
廻る。内側にも壁溝があることから、本住居跡は拡張している可能性が高い。ピットは1基検出したが内側の壁溝にかかり、これより古い可能性があることから柱穴ではないと判断される。竈は第6号土壇によって壊されているか調査区外にあると思われる。

遺物は、覆土中から南比企産の須恵器蓋の破片が出土した。

住居跡の時期を積極的に推定できる根拠はないが、9世紀の第6号土壇によって壊されていることから8世紀代の構築と考えておきたい。

第3号・6号竪穴住居跡 (第15・16・17図)

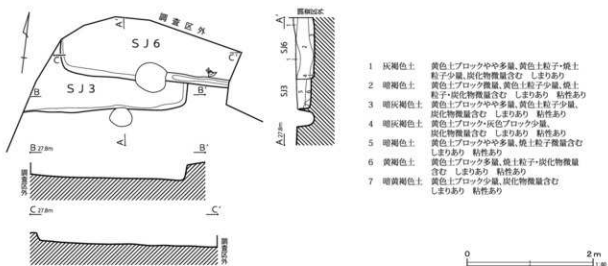
A2グリッドで検出した。北側の大半が調査区



第14図 第2号住居跡・出土遺物

第8表 第2号住居跡出土遺物観察表 (第14図)

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ2	須恵器	甕	40	—	—	—	E H I J K	II	灰褐色	SJ2-1 南比企



第15図 第3・6号住居跡

外にかかる。土層断面の観察から第6号竪穴住居跡が第3号竪穴住居跡より新しい。検出された規

模は、南壁で第3号竪穴住居跡が2.58m、第6号竪穴住居跡は2.57mである。残存する深さは第3



第16図 第3号住居跡出土遺物

第9表 第3号住居跡出土遺物観察表 (第16図)

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ3	土師器	坏	5	(11.9)	—	—	ACHIK	Ⅱ	橙	SJ3-1
2	SJ3	土師器	坏	5	(13.0)	—	—	ACHIK	Ⅱ	橙	SJ3-2



第17図 第6号住居跡出土遺物

第10表 第10号住居跡出土遺物観察表 (第17図)

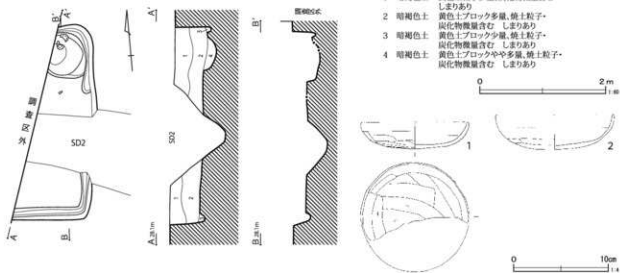
番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ6	土師器	坏	5	(12.8)	—	—	ACHIK	Ⅱ	にぶい黄橙	SJ6-1
2	SJ6	土師器	坏	5	(12.0)	—	—	ACIK	Ⅱ	橙	SJ6-2
3	SJ6	土師器	甕	10	(21.8)	—	—	ACEHIK	Ⅱ	明赤褐	SJ6-3

号竪穴住居跡が23cm、第6号竪穴住居跡は32cmである。埋没状況はいずれも自然堆積である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、第6号竪穴住居跡では浅い壁溝を部分的に確認した。柱穴は確認されなかった。

遺物は、第6号竪穴住居跡の南壁際で土師器甕

が出土したほか、覆土中から土師器坏の小破片を検出した。

住居跡の時期は、第6号竪穴住居跡が7世紀末～8世紀初頭と考えられ、第3号竪穴住居跡も同様の時期と考えておきたい。



第18図 第4号住居跡・出土遺物

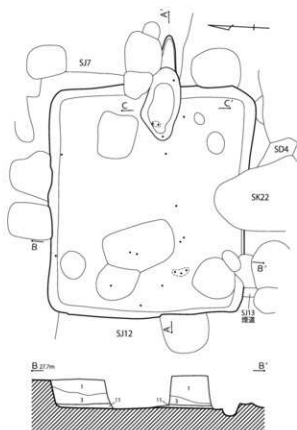
第11表 第4号住居跡出土遺物観察表 (第18図)

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ4	土師器	坏	60	11.2	—	2.9	ACHIK	Ⅱ	橙	SJ4-1
2	SJ4	土師器	坏	85	12.2	—	3.7	CEHK	Ⅲ	橙	SJ4-2

第4号竪穴住居跡 (第18図)

A 2・B 2グリッドで検出した。西側の大半が調査区外にかかる。第2号溝跡と重複し、本住居跡が古い。規模は東壁が3.13mであるが、南壁は1.18mの検出にとどまった。深さは45cmである。埋没状況は自然堆積と考えられる。壁は垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。ピットは検出されなかった。壁溝は東壁の一部が切れるが他は廻っている。深さは5～10cmである。北東隅に貯蔵穴を検出した。一部が調査区外にかかるが、南北方向の径が70cmで、深さは15cmである。竈は検出されなかったが、貯蔵穴の位置から調査区外の北壁にあるものと考えられる。

遺物は、貯蔵穴から土師器環が2点出土した。

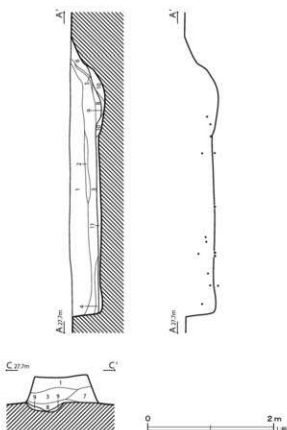


- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化粒子多量含む しまりあり 粘性あり
- 2 暗褐色土 地山褐色土ブロック多量含む しまりあり 粘性あり
- 3 暗褐色土 黄色土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量含む しまりあり 粘性あり
- 4 暗褐色土 焼土粒子少量含む しまりあり 粘性あり
- 5 暗褐色土 焼土ブロック多量、炭化物含む しまりあり 粘性あり
- 6 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物少量含む しまりあり 粘性あり

住居跡の時期は、7世紀末～8世紀初頭と考えられる。

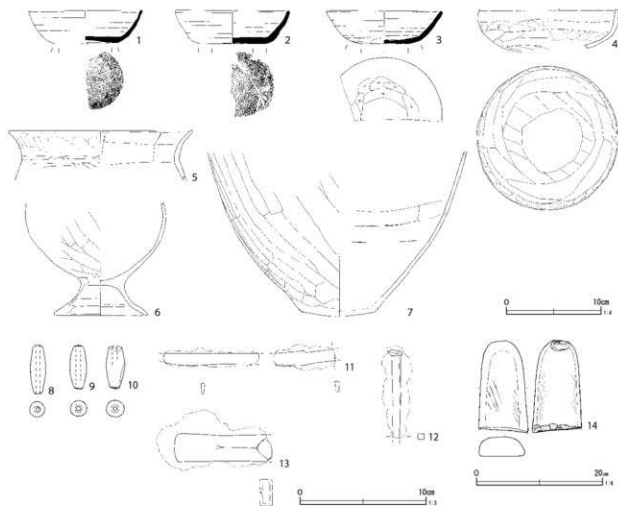
第5号竪穴住居跡 (第19・20図)

B 3グリッドで検出した。第7号・12号・13号・15号竪穴住居跡、第2号掘立柱建物跡、第22号土壇と重複し、他の竪穴住居跡、第2号掘立柱建物跡より新しく、第22号土壇より古い。平面形は、竈が設置される面に対して縦長の長方形を呈する。規模は、長軸3.68m、短軸3.22m、残存する深さ50cmで、方位はN-90°-Eである。埋没状況は自然堆積と考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は暗褐色の地山土を用い数センチの厚さで平坦に埋め戻している。壁溝などは検出されなかった。竈は東壁中央に構築されていた。



- 7 暗褐色土 シルト、地山ブロック、焼土ブロック・炭化物微量含む しまりあり 粘性あり
- 8 暗褐色土 灰及び焼土ブロック大量に含む しまりあり 粘性あり (50×70cm程度)
- 9 褐色土 焼土ブロック含む しまりあり 粘性あり
- 10 褐色土 しまりあり 粘性あり
- 11 暗褐色土 地山ブロック大量、焼土・炭化物少量含む

第19図 第5号住居跡



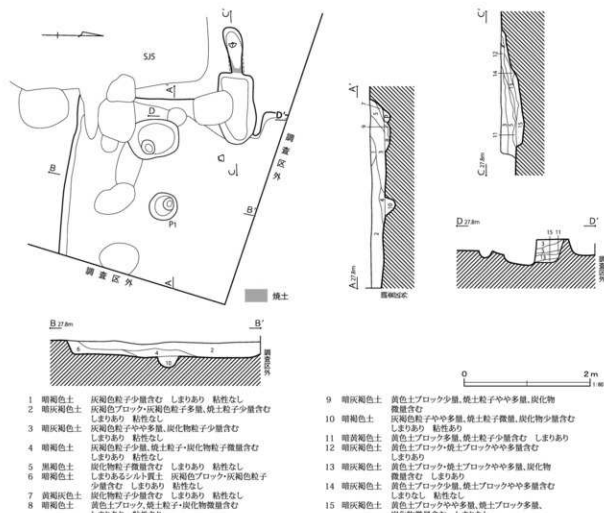
第20図 第5号住居跡出土遺物

第12表 第5号住居跡出土遺物観察表 (第20図)

番号	遺構	種別	器種	直径(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ5	須臾器	坏	30	(11.8)	(6.6)	3.5	DEIJK	I	灰	SJ5-7・南比企
2	SJ5	須臾器	坏	25	(12.0)	(7.2)	3.5	DEIK	I	灰	SJ5-6・SR2内接合 南比企
3	SJ5	須臾器	坏	35	(12.0)	(7.4)	3.5	EI	I	灰	SJ5-5 南比企
4	SJ5	土師器	坏	80	14.6	—	—	ACEHIK	II	橙	SJ5-2
5	SJ5	土師器	甕	20	(19.4)	—	—	CEHIK	II	にぶい橙	SJ5-4
6	SJ5	土師器	台付甕	70	—	9.8	—	ACEHIK	II	にぶい橙	SJ5-1
7	SJ5	土師器	甕	60	—	7.7	—	CEHIK	II	明赤褐	SJ5-14
8	SJ5	土製品	土錘	100	長さ3.8	幅1.2	孔径0.3	重さ4.6g	II	黒褐	SJ5-11
9	SJ5	土製品	土錘	100	長さ3.4	幅1.3	孔径0.35	重さ5.2g			SJ5-9
10	SJ5	土製品	土錘	—	長さ(3.4)	幅1.4	孔径0.35	重さ5.8g			SJ5-10
11	SJ5	鉄製品	刀子	—	長さ17.4	刃幅最大0.9	背幅0.3	重さ10.7g			SJ5-15 鉄製品1 同一個体
12	SJ5	鉄製品	刀子	—	長さ14.8	刃幅最大1.2	重さ10.4g				
13	SJ5	鉄製品	釘	—	長さ16.9	幅0.5	厚さ0.5	重さ33.7g	SJ5-16 鉄製品2		
12	SJ5	鉄製品	鉄斧	—	長さ17.7	刃幅2.3	重さ102.8g		SJ5-17 鉄製品3		
14	SJ5	石製品	砥石	—	長さ(14.6)	幅7.8	厚さ3.1	重さ485.0g		SJ5-18	

燃焼部底面は床面から20cmほど掘り下げたのち、5cmほど褐色土で埋め戻して火床面としている。煙道は25°の傾斜をもって延びる。竈規模は長さ1.68m、燃焼部幅は0.55mである。袖は検出されなかった。

遺物は、覆土下層を中心として土器のほか土錘・鉄製品などが散漫な状況で出土した。第20図1は底部周辺ヘラケズリであるが、2は底部周辺手持ちヘラケズリ、3は底部周辺から体部下半にかけて手持ちヘラケズリされる。



第21図 第7号住居跡

住居跡の構築年代は8世紀中葉と思われる。

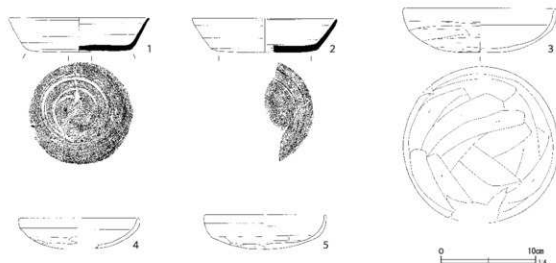
第7号竪穴住居跡（第21・22図）

A3・4、B3・4グリッドで検出した。第5号住居跡、第2号掘立柱建物跡と重複し本住居跡が最も古い。北側と東側は調査区外にかかる。検出した規模は西壁が3.32m、南壁が2.54m、残存する深さは23cmである。埋没状況は自然堆積である。壁はわずかに外側に傾斜して立ち上がる。床面はほぼ平坦で、壁溝はない。本住居跡に確実に伴うピットは1基である。P1は直径45cm、深さ15cmである。柱穴と考えられる。竈の左側に土塊状の掘り込みを検出した。平面形は隅丸長方形で、長軸0.82m、短軸0.63m、深さは9cmである。やや浅いが貯蔵穴と考えておきたい。覆土中から第

22図3と5が出土した。竈は西壁に構築されていた。遺構確認時には煙道部天井が残っていたが、調査期間中の大雨により崩落した。燃焼部は床面から15cmほど掘り下げて地山土を充填して火床面としている。壁面・煙道部天井ともによく焼けている。燃焼部の規模は長さ1.26m、幅0.55mである。左袖はピットによって壊されており、右袖だけが残っていた。地山土のブロックを含む土で作られていた。煙道は、長さ0.60mで煙出しにあたる先端部分の底面はわずかに窪んでいた。

遺物は、少数の出土であった。覆土中位以下及び貯蔵穴などからの出土で、図示できたのは坯5点である。

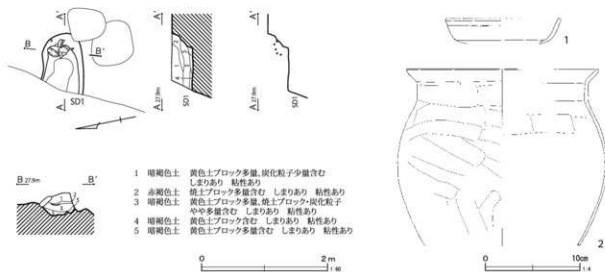
住居跡の時期は、8世紀前葉と考えられる。



第22図 第7号住居跡出土遺物

第13表 第7号住居跡出土遺物観察表 (第22図)

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ7	須恵器	坏	85	14.9	11.0	3.5	DEIJKL	I	灰	SJ7-5 南北企
2	SJ7	須恵器	坏	30	(15.2)	(9.8)	3.6	E I J K	I	灰	SJ7-4 南北企
3	SJ7	土師器	坏	90	16.1	—	4.7	ACHIK	II	橙	SJ7-1
4	SJ7	土師器	坏	30	(12.4)	—	—	ACHIK	II	橙	SJ7-2
5	SJ7	土師器	坏	35	(12.6)	—	3.6	ACHIK	II	橙	SJ7-3



第23図 第9号住居跡・出土遺物

第14表 第9号住居跡出土遺物観察表 (第23図)

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ9	土師器	坏	20	(6.0)	—	—	A I K	II	橙	SJ9-2
2	SJ9	土師器	甕	40	(20.0)	—	—	ACEHIK	II	にぶい・橙	SJ9-1

第9号竪穴住居跡 (第23図)

B 2 グリッドで検出した。中世の第1号溝跡に

大半を壊されており、検出したのは竈の燃焼部だけである。東向き竈で方位はおおよそN-100°

Eで、残存していた長さは0.88mである。燃焼部
奥壁はよく焼けていた。

遺物は、土師器環と「コ」の字状口縁の甕が出
土した。

住居跡の時期は、9世紀前葉と考えられる。

第10号・11号竪穴住居跡（第24・25・26図）

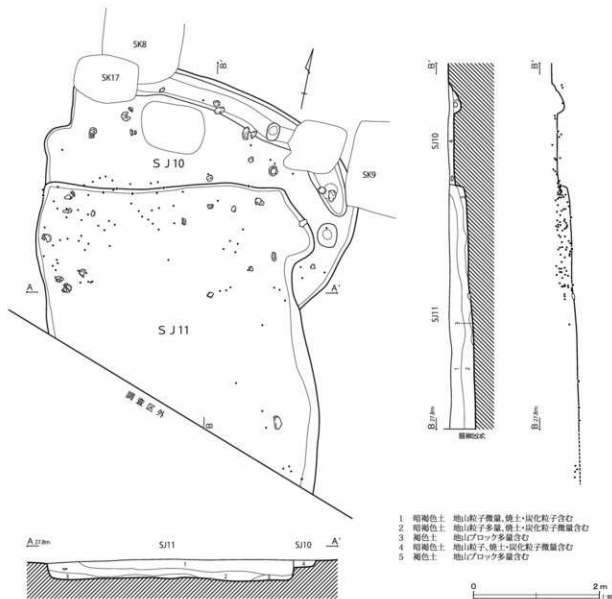
C4グリッドで検出した。いずれの住居跡も平
面形態があまり整っておらず、竈も検出されな
かったため、竪穴住居跡と判断するのに躊躇される
が、ここでは遺構名の変更は行わない。

第10号住居跡は第2号掘立柱建物跡、第8号・

9号・17号土壇と重複し、最も古い。また、土層
断面の観察から第11号住居跡が第10号住居跡より
新しいと判断した。

第10号住居跡は、南側を第11号住居跡に壊され
ている。規模は、長軸4.8m、短軸は約3.0mの確
認で、残存する深さは10cmである。床面は平坦で、
北壁際に幅45～50cm、深さ10～15cmの壁溝状の掘
り込みを検出した。ピットは東壁際に1基検出し
たが柱穴となるものは確認できなかった。

遺物は、坏類が主で他に拳大の礫が出土した。
第25図14は土製支脚である。



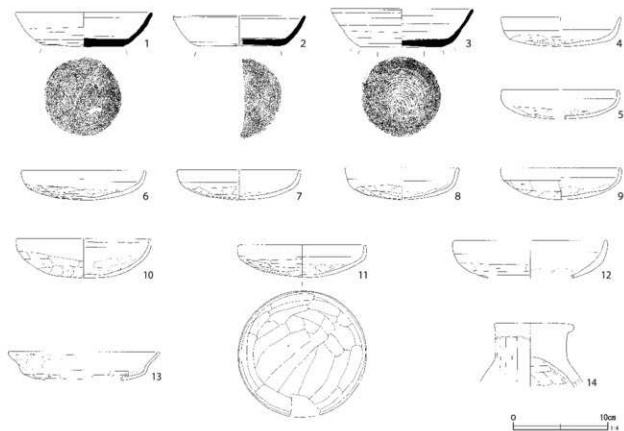
第24図 第10・11号住居跡

遺構の時期は、出土した坯から8世紀前葉と考えられる。

第11号住居跡は、南側が調査区外にかかる。不整形長方形を呈すると思われる。北壁の長さは3.8mで、東壁は4.9m検出した。残存する深さは35～40cmで、床面は南東に向かってやや下がっている。埋没状況は自然堆積である。壁溝及びピット

は検出されなかった。

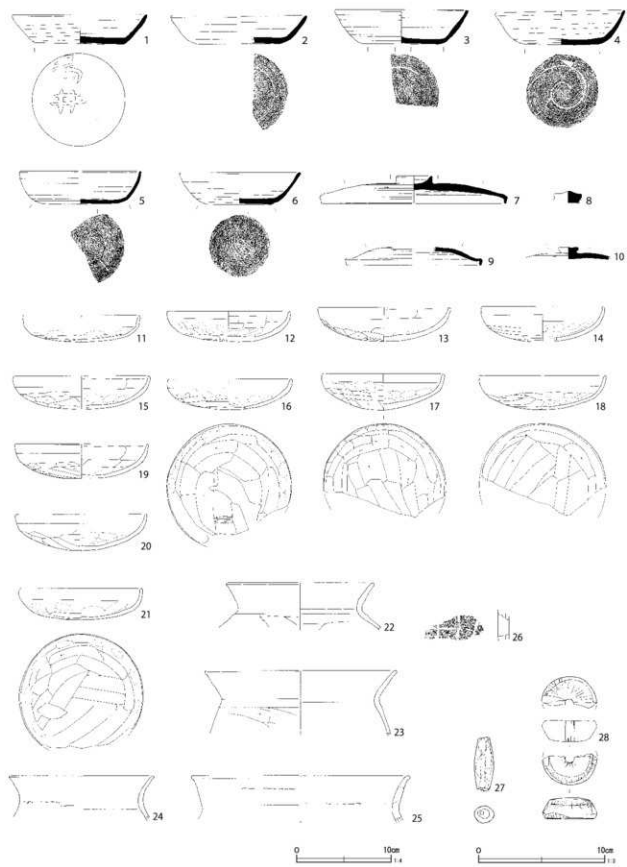
遺物は、須恵器環・蓋、土師器環・甕、土鍾、紡錘車などが出土した。出土状況は北側を中心に覆土中からまんべんなく出ている。第25図1は底面にごく薄く墨書が認められる。2字墨書で上の文字が判読しにくい「楊井」(やぎい)と思われる。



第25図 第10号住居跡出土遺物

第15表 第10号住居跡出土遺物観察表 (第25図)

番号	遺構	種別	器種	径(単位)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ10	須恵器	環	80	14.3	8.6	3.6	DEHIJK	I	灰	SJ10-1 南比企
2	SJ10	須恵器	環	45	(13.8)	(8.7)	3.2	E1JKL	I	灰白	SJ10-2 南比企
3	SJ10	須恵器	環	75	(14.9)	8.6	4.05	DEHIJK	I	浅黄橙	SJ10-3 南比企
4	SJ10	土師器	環	30	(12.5)	—	3.1	CDEHIK	II	橙	SJ10-7
5	SJ10	土師器	環	25	(12.3)	—	—	CEIK	II	にぶい橙	SJ10-12
6	SJ10	土師器	環	75	12.9	—	3.1	CHIK	II	橙	SJ10-6
7	SJ10	土師器	環	40	(12.9)	—	3.2	CEHIK	II	にぶい橙	SJ10-5
8	SJ10	土師器	環	30	(11.8)	—	3.4	CEHIK	II	橙	SJ10-4
9	SJ10	土師器	環	70	12.5	—	3.3	ACEHIK	II	にぶい黄橙	SJ10-10
10	SJ10	土師器	環	45	(14.0)	—	4.2	ACHIK	II	橙	SJ10-8
11	SJ10	土師器	環	90	13.3	—	3.5	CDEHIK	II	橙	SJ10-11
12	SJ10	土師器	環	20	(15.8)	—	—	ACIK	II	にぶい橙	SJ10-13
13	SJ10	土師器	環	15	(17.8)	—	—	ACIK	II	にぶい橙	SJ10-9
14	SJ10	土製品	支脚	40	上面径8.2	高さ[6.8]	—	CHIK	II	橙	SJ10-14



第26图 第11号住居跡出土遺物

第16表 第11号住居跡出土土物観察表 (第26図)

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	S11	須臾器	坏	80	14.1	9.5	3.1	CEH IJK	I	明灰	SJ11-15 南北比
2	S11	須臾器	坏	30	(14.3)	(8.4)	3.0	CE IJK	I	明灰	SJ11-12 南北比
3	S11	須臾器	坏	25	(13.8)	(8.0)	3.6	E IJK	I	灰	SJ11-10 南北比
4	S11	須臾器	坏	75	(13.6)	7.8	3.5	AH IJK	I	灰	SJ11-14 南北比
5	S11	須臾器	坏	15	(12.6)	(8.0)	3.5	E IJK	I	灰	SJ11-13 南北比 自然腐蝕灰
6	S11	須臾器	坏	75	12.7	6.6	3.4	E IJK	I	オリーブ灰	SJ11-18 南北比
7	S11	須臾器	蓋	25	(19.3)	—	2.9	HJK	I	浅黄緑	SJ11-16 南北比
8	S11	須臾器	蓋	90	—	つまみ2.7	—	EH IJK	II	浅黄	SJ11-19 南北比
9	S11	須臾器	蓋	15	(14.0)	—	—	E IJK	I	灰	SJ11-17 南北比
10	S11	須臾器	蓋	35	—	つまみ1.9	—	A EJK	III	灰白	SJ11-18
11	S11	土師器	坏	55	(12.3)	—	2.8	ACH I K	II	にぶい橙	SJ11-2 南北比
12	S11	土師器	坏	45	12.8	—	3.1	ACH I K	II	橙	SJ11-7
13	S11	土師器	坏	35	(13.8)	—	3.6	ACH I K	II	橙	SJ11-6
14	S11	土師器	坏	45	12.7	—	—	ACH I K	II	橙	SJ11-21
15	S11	土師器	坏	35	(14.2)	—	—	ACH I K	II	橙	SJ11-26
16	S11	土師器	坏	70	12.9	—	3.3	ACH I K	II	橙	SJ11-1
17	S11	土師器	坏	60	12.7	—	3.9	ACH I K	II	にぶい橙	SJ11-4
18	S11	土師器	坏	50	(13.2)	—	3.6	ACH I K	II	橙	SJ11-5
19	S11	土師器	坏	25	(13.8)	—	3.6	ACH I K	II	にぶい橙	SJ11-3
20	S11	土師器	坏	35	(13.6)	—	3.9	ACH I K	II	橙	SJ11-8
21	S11	土師器	坏	80	12.8	—	3.3	ACH I K	II	橙	SJ11-9
22	S11	土師器	甕	10	(15.2)	—	—	ACH I K	II	橙	SJ11-22
23	S11	土師器	甕	10	(20.0)	—	—	ABCEH I K	II	橙	SJ11-23
24	S11	土師器	甕?	5	(15.2)	—	—	AH I K	II	褐	SJ11-24
25	S11	土師器	甕	5	(22.8)	—	—	ACH I K	II	橙	SJ11-25
26	S11	土師器	甕	—	—	—	—	AH I K	III	灰褐	SJ11-27
27	S11	土製品	土埴	100	長さ4.3 幅1.5 孔径0.3	重さ8.8g	—	AH I K	—	橙	SJ11-20
28	S11	石製品	紡錘車	50	上面径3.80 下面径3.06	厚さ1.7 孔径0.7	重さ241.1g	—	—	—	SJ11-28

遺構の時期は第10号住居跡と同じく8世紀前半である。

第12号・15号竪穴住居跡 (第27・28図)

B3グリッドで検出した。第5号竪穴住居跡、第2号掘立柱建物跡と重複し最も古い。また、土層断面の観察から第12号住居跡が第15号住居跡より新しい。

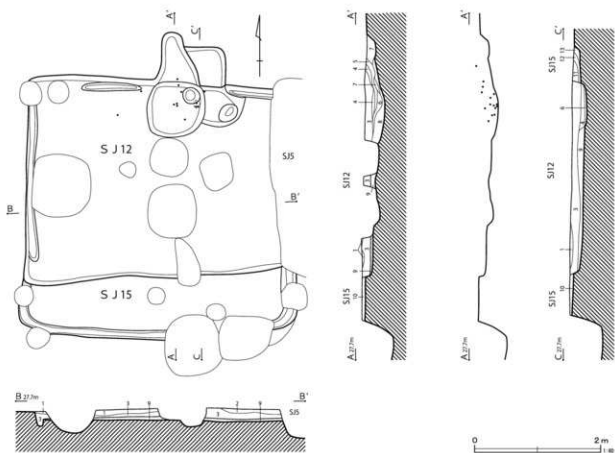
第12号住居跡は、東側を第5号住居跡によって壊されている。また、中央部も複数のピットによって床面が壊されている。平面形は竈に対して横長の長方形である。規模は西壁が3.25m、北壁は3.9mの残存である。残存する深さは17cmを測る。埋没状況は自然堆積である。壁の立ち上がりはやや傾斜している。床面は、竈周辺がやや低い。他はほぼ平坦である。竈部分は第15号住居跡の竈を埋め戻している。柱穴は検出されなかった。壁溝は西壁際及び北壁の竈の両脇に検出した。幅は15cm前後、深さは10cm前後である。竈は北壁に構築されていた。床面を10cmほど掘り下げて燃焼部と

している。規模は0.9m×0.9mである。袖は残っていないが第8号住居跡と同じく燃焼部の両脇は壁溝が掘られていないことからこの部分に袖があったと考えられる。煙道は長さ0.8mで12°の傾斜を持ち、煙道先端の底面はやや窪んでいた。

遺物は、竈とその周辺から少量出土した。図示できたのは4点である。

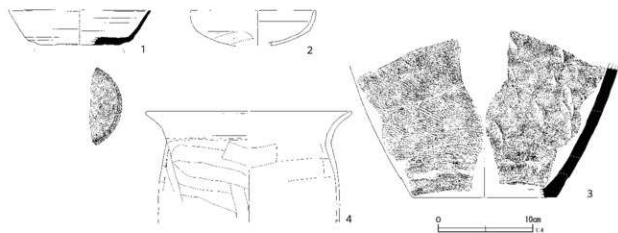
住居跡の時期は8世紀中葉～後葉と考えられる。

第15号住居跡は大半を第12号住居跡によって壊されている。残存していたのは、南側約1.0mと竈の東半分である。第12号住居跡の床面下に残存していた竈の状況から北壁と西壁は第12号住居跡と同じ位置であったと考えられる。平面形は竈に対してわずかに横長の方形である。規模は南北4.2m、東西4.35mで、深さは6.0cmである。残存する南側の床面には壁溝が廻っている。ピットは検出されなかった。竈は北壁に構築されていた。第12号住居跡の竈に西側を壊され、燃焼部は第12号住居跡の床が貼られていた。



- | | |
|---|--|
| <p>1 暗褐色土 地山粒子・焼土粒子・炭化粒子微量含む しまりあり</p> <p>2 暗褐色土 焼土粒子・炭化粒子少量含む しまりあり 粘性あり</p> <p>3 暗黄褐色土 地山黄褐色土ブロック多量含む しまりあり 粘性あり</p> <p>4 暗褐色土 焼土粒子・炭化物含む しまりあり 粘性ややあり</p> <p>5 黒褐色土 焼土ブロック・焼土粒子・炭化物多量含む しまりあり 粘性ややあり</p> <p>6 暗褐色土 焼土粒子・炭化物含む しまりあり 粘性ややあり</p> <p>7 暗褐色土 焼土ブロック・焼土粒子・炭化物少量含む 下に灰層 しまりあり 粘性ややあり</p> | <p>8 褐色土 焼土粒子・炭化物微量含む しまりあり 粘性ややあり</p> <p>9 暗黄褐色土 地山ブロック大量、焼土粒子・炭化粒子含む しまりあり 粘性ややあり</p> <p>10 暗褐色土 地山ブロック少量、焼土・炭化粒子微量含む 粘性ややあり</p> <p>11 暗褐色土 焼土ブロック大量、炭化物含む</p> <p>12 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物微量含む</p> <p>13 褐色土</p> |
|---|--|

第27図 第12・15号住居跡



第28図 第12号住居跡出土遺物

第17表 第12号住居跡出土土物観察表 (第28図)

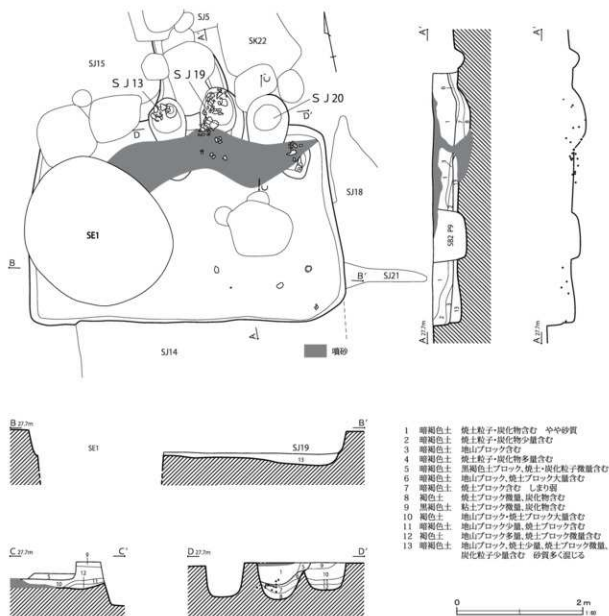
番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ12	須恵器	坏	30	(14.8)	(9.0)	3.7	DEH I J K	I	灰	SJ12-3 南比企
2	SJ12	土師器	坏	30	(12.2)	—	—	ACH I K	II	橙	SJ12-2
3	SJ12	須恵器	甕	15	—	(15.0)	—	A E H I J K	I	黄灰	SJ12-4 南比企
4	SJ12	土師器	甕	30	(21.5)	—	—	A C H I K	II	橙	SJ12-1

遺物は竈部分から土師器甕の小破片がわずかに出土したが、図示できるものはない。

住居跡の時期を積極的に推定できる根拠はないが第12号住居跡とあまり大きな時期差はないものと考えておきたい。

第13号・19号・20号竪穴住居跡(第29・30・31・32図)

B 3 グリッドで検出した。第5号・14号・18号・21号竪穴住居跡、第2号・8号掘立柱建物跡、第1号井戸跡と重複する。第14号・18号・21号竪穴住居跡より新しく、第5号竪穴住居跡、第2号掘立柱建物跡、第1号井戸跡より古い。この地点は遺構が集中し重複が激しいことと、地震による



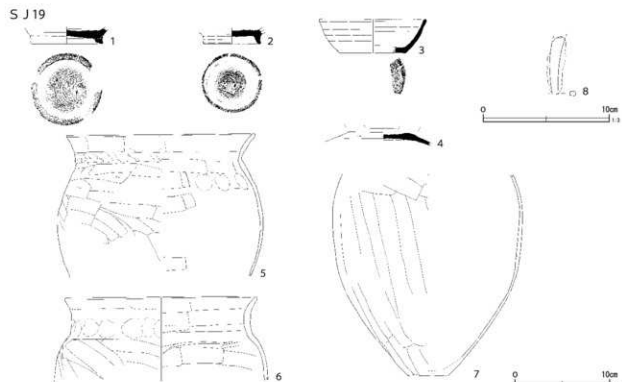
第29図 第13・19・20号住居跡



第30図 第13号住居跡出土遺物



第31図 第20号住居跡出土遺物



第32図 第19号住居跡出土遺物

第18表 第13号住居跡出土遺物観察表 (第30図)

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ13	須恵器	坏	25	—	(6.0)	—	ADHIK	II	黄灰	SJ13-4 木野
2	SJ13	須恵器	蓋つまみ	75	2.8	—	—	AIJ	II	褐灰	SJ13-5 南比企

第19表 第19号住居跡出土遺物観察表 (第32図)

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ19	須恵器	高台付壺	90	—	7.6	—	ACEHIK	II	橙	SJ19-2
2	SJ19	須恵器	高台付壺	85	—	6.1	—	HIK	I	灰白	SJ19-3
3	SJ19	須恵器	坏	10	(11.1)	(7.0)	—	H I J K	I	灰	SJ19-4 南比企
4	SJ19	須恵器	蓋	70	—	—	—	I J	II	灰	SJ19-8
5	SJ19	土師器	甕	60	19.7	—	—	ACIK	I	にぶい+橙	SJ19-7
6	SJ19	土師器	甕	30	(20.2)	—	—	A E H I K	I	にぶい+橙	SJ19-1
7	SJ19	土師器	甕	25	—	(4.2)	—	HIK	II	にぶい+赤褐	SJ19-9
8	SJ19	鉄製品	棒状品	—	長さ14.5	幅最大0.8	厚さ0.3	重さ8.0g	—	—	SJ19-10 C3G 鉄製品1

第20表 第20号住居跡出土遺物観察表 (第31図)

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ20	須恵器	蓋	30	—	—	—	J	II	灰	SJ20-1 南比企

噴砂の影響を受け個々の遺構の識別が困難を極めた。第19号住居跡は、第20号住居跡より新しい。第19号住居跡は第20号住居跡の竈を壊しており、

床面も第19号住居跡の床面の上にあることから、新旧関係は明らかである。

第13号住居跡は、当初は第19号住居跡と重複す

るピットと認識し調査したところ、住居跡の壁面に焼土を検出し竈であることが判明した。底面は第19号住居跡の床面下に残存していたが、地震による地割れにより焚口部は60cmほど動いていた。煙道が北に伸びていたが、東側半分はピットによって、また、先端は第5号住居跡に壊されていた。残存部に須恵器環や土師器製の胴部破片が残っていた。

第19号住居跡は竈に対して横長の長方形を呈する。長軸5.02m、短軸3.14mを測り、残存する深さは34cmである。方位はN-2°-Eである。埋没状況は自然堆積であるが、埋没後に地震による噴砂が多量に混入していた。床面はおおむね平坦であるが、西側は近世の第1号井戸跡によって壊され、また、竈の前は幅60cm、長さ3.0mに亘って噴砂によって失われていた。壁溝及びピットは検出されなかった。竈は北壁のやや東寄りに構築されていた。焚口部は噴砂によって失われており、燃烧炉底面も本来の深さより下がっているように感じられた。袖は右側がわずかに残っていたが良

好な状態ではなかった。

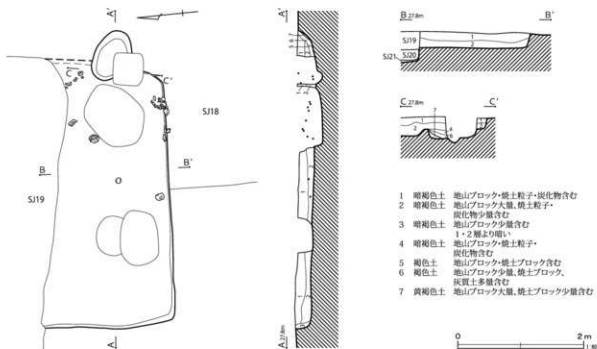
遺物は主に竈および噴砂の中に流れ出した状態で出土した。

住居跡の時期は9世紀前半〜中葉と思われる。

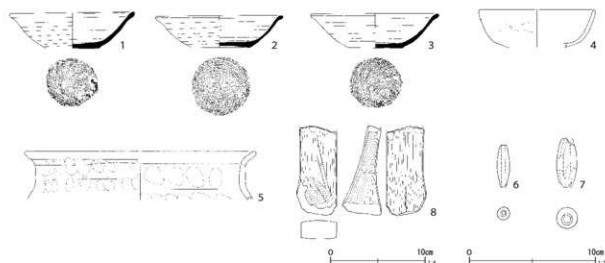
第20号竈穴住居跡は、竈を第19号住居跡の竈の東隣に検出した。また、床面は第19号住居跡より低く土層断面で観察できた。床面は東に向かって緩やかに低くなっていた。西側は第1号井戸跡や噴砂によって壊されており、明確でなかった。

第14号竈穴住居跡 (第33・34図)

B 3 グリッドで検出した。第13号・18号・19号・20号・21号竈穴住居跡、第2号・8号掘立柱建物跡と重複し、第13号・19号・20号竈穴住居跡、第2号・8号掘立柱建物跡より古く、第18号竈穴住居跡より新しい。第21号住居跡との新旧関係は明確に捉えられなかったが、遺物からは第21号住居跡の方が新しいと思われる。東壁に竈を持ち、北側の大半は新しい竈穴住居跡によって壊されている。規模は長軸方向で4.2mあり、西壁は2.1m残存していた。残存する深さは24cmで、方位は



第33図 第14号住居跡



第34図 第14号住居跡出土遺物

第21表 第14号住居跡出土遺物観察表 (第34図)

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ14	須恵器	坏	90	13.0	5.6	3.75	ABDHK	Ⅱ	灰白	SJ144 未野
2	SJ14	須恵器	坏	100	13.1	6.2	3.4	BEHIK	Ⅰ	灰	SJ146 未野
3	SJ14	須恵器	坏	95	13.3	5.5	3.6	AEHIK	Ⅱ	灰白	SJ145 未野
4	SJ14	土師器	坏	25	(12.1)	—	—	AHK	Ⅲ	にぶい褐	SJ143
5	SJ14	土師器	甕	35	(24.0)	—	—	ACHIK	Ⅱ	明褐	SJ141 SJ142 同一個体
6	SJ14	土製品	土錘	90	長さ3.4	幅1.0	孔径0.3	重さ2.6g	AHK	にぶい黄橙	SJ149
7	SJ14	土製品	土錘	90	長さ3.9	幅1.6	孔径0.55	重さ8.3g	ACHIK		SJ148
8	SJ14	石製品	砥石		長さ0.4	幅(4.2)	厚さ2.0	重さ165.9g			SJ141 No.7

N-92°-Eである。竈部分も同じ土層がかぶっており住居廃棄後に埋め戻した可能性もある。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は竈に向かってわずかに低くなる。壁溝やピットは検出されなかった。竈は東壁の南寄りに構築されていた。燃焼部は床面から15cmほど下げていた。長軸0.83m、短軸0.51mである。煙道は残っていない。

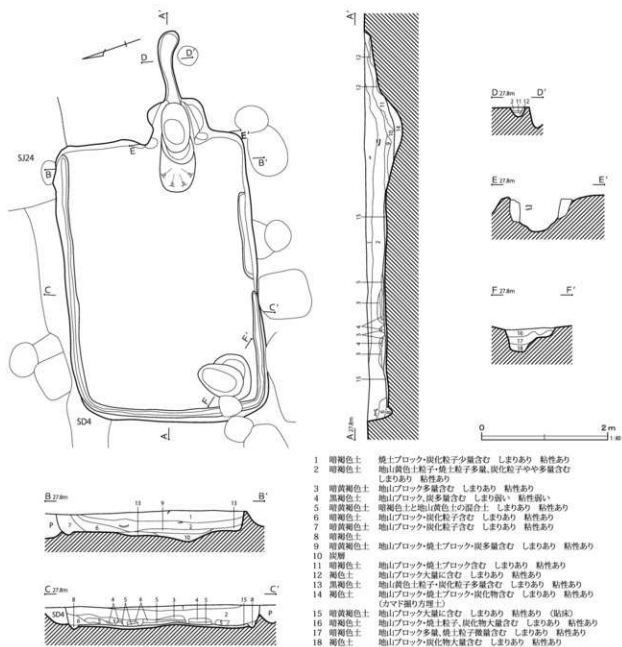
遺物は少量の出土であるが、南壁際から坏類と砥石が、竈周辺から土師器甕が出土した。

住居跡の時期は、9世紀前半と考えておきたい。

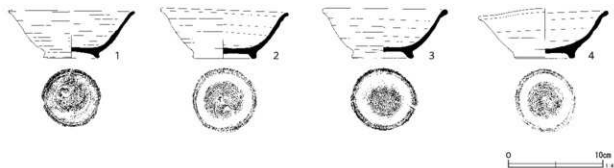
第17号竈穴住居跡 (第35～41図)

C5・6グリッドで検出した。第24号竈穴住居跡、第3号・4号掘立柱建物跡、第4号溝跡と重複し、最も新しい。平面形は竈に対して縦長の長方形である。規模は長軸4.42m、短軸3.08m、残存する深さ28cmである。主軸方位はN-108°-Eである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は住居跡の北西隅付近および竈周辺がやや低く、中央部

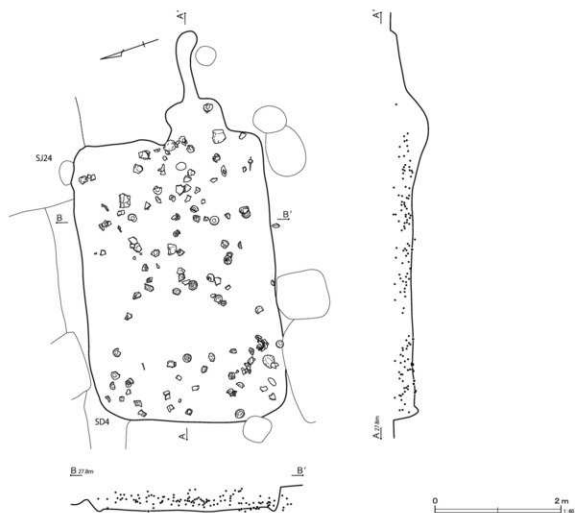
がわずかに高い。地山土を多量に含む暗黄褐色土で、全面に貼床され固く締まっていた。壁溝は、南壁の一部と東壁以外の部分で検出した。幅18cm前後、深さは6cm前後であるが、西壁際はやや深く10cm前後であった。ピットは検出されなかった。竈は東壁のやや南寄りに構築されていた。竈の前50cmほどが焚口部で、燃焼部に向かって緩やかに下がり、踏みしめられて硬化していた。燃焼部は、上面の南側がピットによって一部壊されていた以外は、遺存状態は良好であった。床面から25cm掘り下げ、焼土及び炭化物混じりの地山土で約半分の深さまで埋め戻し火床面としていた。燃焼部には床面の高さ近くまで炭と灰が残っていた。袖には片岩と楕円形の礫が用いられていた。燃焼部側が被熱して赤化していた。燃焼部の始端が住居外に張り出していることから、袖は住居内には殆ど伸びていないと考えられる。煙道は長さ1.14mで、床面を基準とした傾斜は11°である。先端は直角



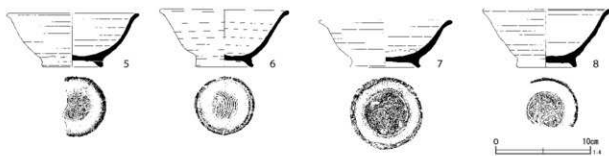
第35図 第17号住居跡(1)



第36図 第17号住居跡出土遺物(1)



第37図 第17号住居跡（2）



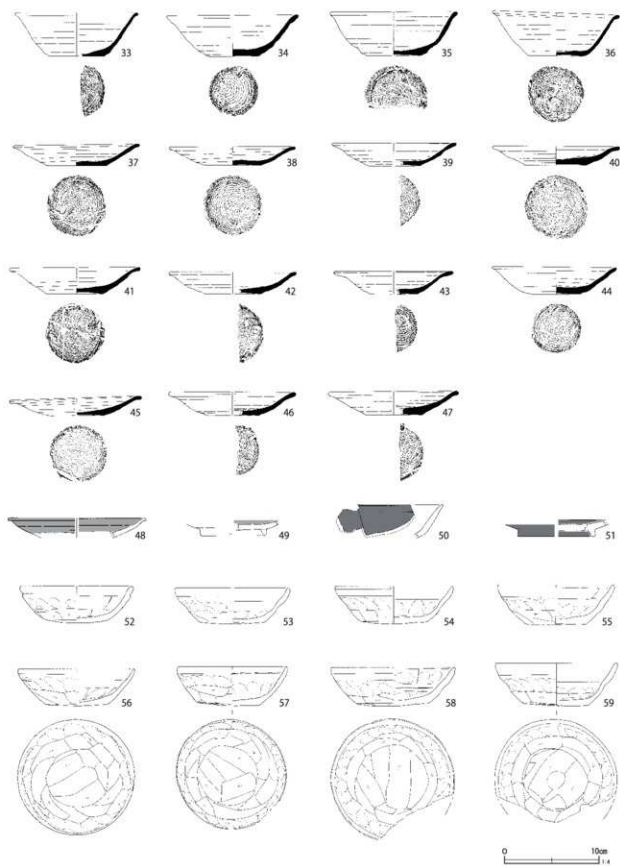
第38図 第17号住居跡出土遺物（2）

度で立ち上がる。燃烧部から煙道の半ばまでは壁がよく焼けていた。竈から離れた住居跡南西隅に、貯蔵穴と考えられる土城状の掘り込みを検出した。不整楕円形で、東側が一段浅くなる。規模は、長軸0.84m、短軸0.74m、深さ35cmである。

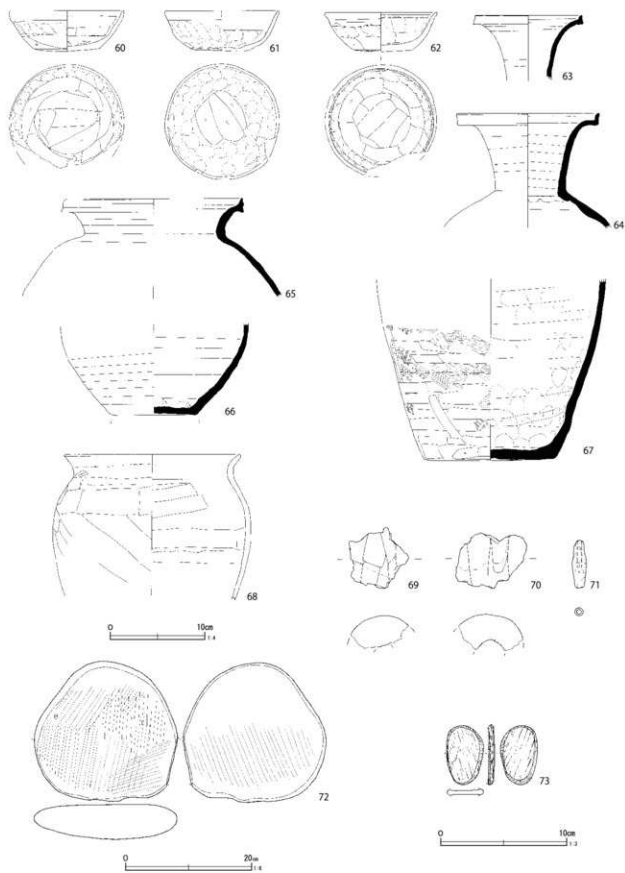
遺物は床面及び覆土中から多量に出土した。坯類が多く、残存率が高い個体が多いのが特徴である。また、破片であるが灰軸陶器、緑軸陶器も出土した。出土状況は住居跡の全面に亘っており、焼土や炭化物を含む土と一緒に投げ込まれたので



第39图 第17号住居跡出土遺物(3)



第40图 第17号住居跡出土遺物(4)



第41图 第17号住居跡出土遺物(5)

第22表 第17号住居跡出土遺物観察表(1)(第36・38・39・40・41図)

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ17	須恵器	高台付埴	25	(13.0)	5.9	5.0	DEIK	Ⅱ	灰	SJ17-11 未野
2	SJ17	須恵器	高台付埴	80	13.2	6.8	5.1	ACEHIK	Ⅱ	灰黄	SJ17-24 未野 酸化炎
3	SJ17	須恵器	高台付埴	90	12.7	6.5	5.2	ACEHIK	Ⅱ	灰	SJ17-22 未野
4	SJ17	須恵器	高台付埴	70	13.4	5.3	4.7	BCEHIK	Ⅱ	灰	SJ17-8 未野
5	SJ17	須恵器	高台付埴	25	(13.6)	(6.5)	5.7	IK	Ⅱ	黄灰	SJ17-21 未野
6	SJ17	須恵器	高台付埴	70	13.3	6.2	6.1	CEIK	Ⅱ	灰	SJ17-23 未野
7	SJ17	須恵器	高台付埴	40	(13.6)	7.4	5.0	CEH	Ⅱ	灰	SJ17-7 未野
8	SJ17	須恵器	高台付埴	45	(13.2)	(6.4)	6.2	EHK	Ⅱ	灰白	SJ17-25 未野 酸化炎
9	SJ17	須恵器	高台付埴	60	13.8	—	(5.6)	ACEHIK	Ⅲ	灰	SJ17-17 未野 酸化炎
10	SJ17	須恵器	高台付埴	20	(14.2)	(6.0)	5.8	ACH	Ⅱ	褐灰—黒	SJ17-15 未野
11	SJ17	須恵器	高台付埴	35	(14.0)	6.1	6.1	DEHIK	Ⅱ	にぶい黄橙	SJ17-19 未野 酸化炎
12	SJ17	須恵器	高台付埴	70	13.8	6.4	5.9	ACEHIK	Ⅱ	にぶい橙	SJ17-9 未野 酸化炎
13	SJ17	須恵器	高台付埴	90	13.8	6.9	5.9	ADEHIK	Ⅱ	にぶい褐	SJ17-16 未野
14	SJ17	須恵器	高台付埴	100	14.0	6.7	6.0	ACEHI	Ⅱ	黒(赤味あり)	SJ17-18 未野
15	SJ17	須恵器	高台付埴	90	13.8	7.1	6.4	AEIK	Ⅱ	灰	SJ17-10 未野
16	SJ17	須恵器	高台付埴	70	15.7	9.0	5.6	CEH	Ⅲ	にぶい赤褐	SJ17-20 未野 酸化炎
17	SJ17	須恵器	高台付埴	80	15.9	6.7	7.2	ACHIK	I	にぶい橙	SJ17-67 未野
18	SJ17	須恵器	高台付埴	30	(15.8)	7.5	7.7	ABCEHI	I	黄灰	SJ17-12 42 未野
19	SJ17	須恵器	高台付埴	30	(15.6)	—	—	EHK	Ⅲ	橙	SJ17-68 未野
20	SJ17	須恵器	高台付埴	70	14.9	—	(5.8)	CEHI	Ⅱ	灰白	SJ17-13 未野
21	SJ17	須恵器	埴	100	12.1	6.2	3.5	CEKL	I	暗灰	SJ17-51 未野
22	SJ17	須恵器	埴	50	(12.0)	(5.3)	(3.9)	ADEH	Ⅱ	灰	SJ17-44 未野
23	SJ17	須恵器	埴	60	12.3	5.7	4.3	EIK	I	灰	SJ17-43 未野
24	SJ17	須恵器	高台付埴	95	12.85	5.2	4.5	ACDEHIK	Ⅲ	橙	SJ17-14 未野 酸化炎
25	SJ17	須恵器	埴	60	(12.5)	6.4	4.4	ABCEIK	Ⅲ	灰黄褐	SJ17-49 未野 酸化炎
26	SJ17	須恵器	埴	80	12.3	5.7	4.85	AEHK	Ⅱ	褐灰	SJ17-40 未野
27	SJ17	須恵器	埴	10	(12.4)	(5.7)	4.9	AEHK	Ⅱ	灰	SJ17-52 未野
28	SJ17	須恵器	埴	30	(12.9)	(6.0)	4.3	BEIK	I	暗灰	SJ17-41 未野
29	SJ17	須恵器	埴	55	12.7	5.4	4.3	ABCDEIK	Ⅱ	赤褐—黒褐	SJ17-50 未野 酸化炎
30	SJ17	須恵器	埴	40	(13.2)	(6.2)	4.3	ABEHK	Ⅱ	にぶい橙	SJ17-54 未野 酸化炎
31	SJ17	須恵器	埴	35	(13.6)	(6.0)	4.5	CEIK	Ⅱ	上層灰下部 橙	SJ17-46 未野 酸化炎
32	SJ17	須恵器	埴	50	(12.9)	5.4	4.5	BCEHK	Ⅲ	橙	SJ17-53 未野 酸化炎
33	SJ17	須恵器	埴	25	(13.0)	(6.0)	4.6	AEHK	Ⅱ	明赤褐	SJ17-45 未野 酸化炎
34	SJ17	須恵器	埴	40	(13.4)	5.0	4.3	ABEH	Ⅱ	灰黄褐—赤褐	SJ17-47 未野
35	SJ17	須恵器	埴	50	(14.0)	(5.6)	4.6	ACEHIK	Ⅱ	灰黄褐—赤褐	SJ17-56 未野 酸化炎
36	SJ17	須恵器	埴	70	13.2	5.8	4.8	ABCEHK	I	明赤褐	SJ17-48 未野 酸化炎
37	SJ17	須恵器	皿	70	13.0	6.4	2.3	CEHIK	Ⅱ	褐灰	SJ17-65 未野
38	SJ17	須恵器	皿	100	13.0	6.0	2.0	EHK	Ⅱ	灰黄褐	SJ17-62 未野
39	SJ17	須恵器	皿	30	(13.0)	—	2.4	CEHIK	I	褐灰	SJ17-58 未野
40	SJ17	須恵器	皿	60	13.2	6.5	2.0	AEH	Ⅲ	にぶい黄橙	SJ17-57 未野
41	SJ17	須恵器	皿	60	(13.5)	6.2	2.8	CEHI	I	にぶい橙	SJ17-66 未野 酸化炎
42	SJ17	須恵器	皿	30	(13.4)	(5.7)	(2.3)	CEIK	I	灰	SJ17-60 未野
43	SJ17	須恵器	皿	25	(12.3)	(5.1)	(2.4)	ACH	I	灰	SJ17-59 未野 酸化炎
44	SJ17	須恵器	皿	100	12.8	5.1	3.0	AEH	I	明赤—オリーブ黄	SJ17-56 未野 酸化炎
45	SJ17	須恵器	皿	90	13.6	5.6	2.1	AEIK	I	灰	SJ17-64 未野
46	SJ17	須恵器	皿	45	(13.0)	(5.6)	(2.5)	EIK	I	灰	SJ17-61 未野
47	SJ17	須恵器	皿	40	(13.3)	(6.0)	2.5	EIK	I	灰	SJ17-63 未野
48	SJ17	灰輪陶器	皿	10	(14.2)	—	—	EIK	I	灰白	SJ17-72 猿投
49	SJ17	灰輪陶器	埴	20	—	(6.7)	—	EK	I	灰白	SJ17-73 猿投
50	SJ17	緑輪陶器	埴	—	—	—	—	L	Ⅱ	淡黄	SJ17-69 猿投
51	SJ17	緑輪陶器	埴	20	—	(8.0)	—	K	Ⅱ	灰	SJ17-70 猿投
52	SJ17	土師器	埴	30	(11.8)	6.5	3.9	AHK	Ⅱ	にぶい橙	SJ17-38 未野
53	SJ17	土師器	埴	40	(11.9)	7.0	3.8	ACEHIK	Ⅱ	にぶい黄橙	SJ17-34 未野
54	SJ17	土師器	埴	50	(12.3)	6.9	4.0	AHIK	Ⅱ	にぶい橙	SJ17-35 未野
55	SJ17	土師器	埴	40	(12.0)	(6.4)	4.2	AHIK	Ⅱ	にぶい橙	SJ17-32 未野
56	SJ17	土師器	埴	100	12.2	6.6	3.9	ACEHIK	I	にぶい黄橙	SJ17-29 未野
57	SJ17	土師器	埴	95	11.4	6.5	4.15	AEHK	Ⅱ	にぶい橙	SJ17-37 未野
58	SJ17	土師器	埴	80	13.0	7.7	4.1	AHIK	Ⅱ	にぶい橙	SJ17-30 未野
59	SJ17	土師器	埴	65	12.7	6.8	4.5	AHIK	Ⅱ	橙	SJ17-31 未野
60	SJ17	土師器	埴	75	11.9	6.9	4.3	ACHIK	Ⅱ	にぶい黄橙	SJ17-33 未野

第23表 第17号住居跡出土遺物観察表(2)(第41図)

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
61	SJ17	土師器	坏	95	11.95	—	4.2	ACHIK	II	橙	SJ17-28
62	SJ17	土師器	坏	85	11.6	6.1	4.2	AH1K	—	橙	SJ17-36
63	SJ17	須恵器	壺	90	11.2	—	—	CIK	I	灰	SJ17-2 未野
64	SJ17	須恵器	壺	80	14.9	—	—	A	I	灰白	SJ17-3 未野
65	SJ17	須恵器	甕	50	18.8	—	—	AH1K	I	灰	SJ17-6 未野
66	SJ17	須恵器	甕	40	—	9.0	—	CEH1K	I	褐灰	SJ17-5 未野
67	SJ17	須恵器	甕	80	—	14.9	(19.3)	EIKL	I	暗灰	SJ17-1 未野
68	SJ17	土師器	甕	70	—	18.6	—	ACHIK	I	にぶい橙	SJ17-4
69	SJ17	土製品	羽口	—	長さ14.8	幅1.7	厚さ12.4	AIK	—	—	SJ17-27
70	SJ17	土製品	羽口	—	長さ14.4	幅1.6	厚さ11.8-2.2	ACIK	—	—	SJ17-26
71	SJ17	土製品	土鎌	100	長さ3.7	幅1.1	孔径0.3	AH1K	—	橙	SJ17-39
72	SJ17	石製品	砥石	—	長さ22.0	幅2.5	厚さ5.8	—	—	—	SJ17-75
73	SJ17	石製品	砥石?	—	長さ4.7	幅3.0	厚さ0.5	—	—	—	SJ17-76 左 幅約1.0の断面を削いでいる

はないかと考えられる。

時期は、9世紀後半～10世紀初頭と考えられる。

第18号竪穴住居跡(第42・43図)

B3・C3グリッドで検出した。第13号・14号・19号・20号・21号竪穴住居跡、第2号・8号掘立柱建物跡、第2号井戸跡と重複し、本住居跡が最も古い。北西側は他の住居跡によって壊され、南東隅は第2号井戸跡によって壊されている。平面形は竈に対して縦長の長方形を呈し、各辺ともほぼ直線的で角は他の竪穴住居跡のように丸くならず直角である。規模は長軸5.15m、短軸4.9m、残存する深さ31cmである。方位はN-3°-Eである。覆土は、地山ブロックを大量に含む褐色土が主体である。中央部(4層)は縦に入る土層であるが、第21号住居跡の竈および煙道を構築する際に掘り直したためと考えられる。壁の立ち上がりはやや傾斜している。床面は南西隅がやや低くなるが他は平坦である。壁溝は北辺を除いて掘り込まれていたものと考えられる。主柱穴を4基確認した。直径約40cm～50cmで、深さは23cm～45cmである。ただし、浅いものについては第21号住居跡に削られた面からの深さである。竈正面に検出したピットは、灰と炭が多量に入っていたことから、いわゆる灰ピットであろう。北東隅に貯蔵穴を検出した。楕円形を呈し、規模は長軸0.62m、短軸0.56m、残存する深さ17cmである。竈は北壁の中央に構築されていた。右側は第2号掘立柱建物跡の柱穴によって壊されていた。燃焼部は住居

跡床面からごくわずかに低いだけである。長さ70cm、幅56cmで、奥壁は12cmほどの高さで立ち上がり煙道へ続く。煙道は9°の傾斜である。長さ60cm残存していたが、先端部は失われていた。

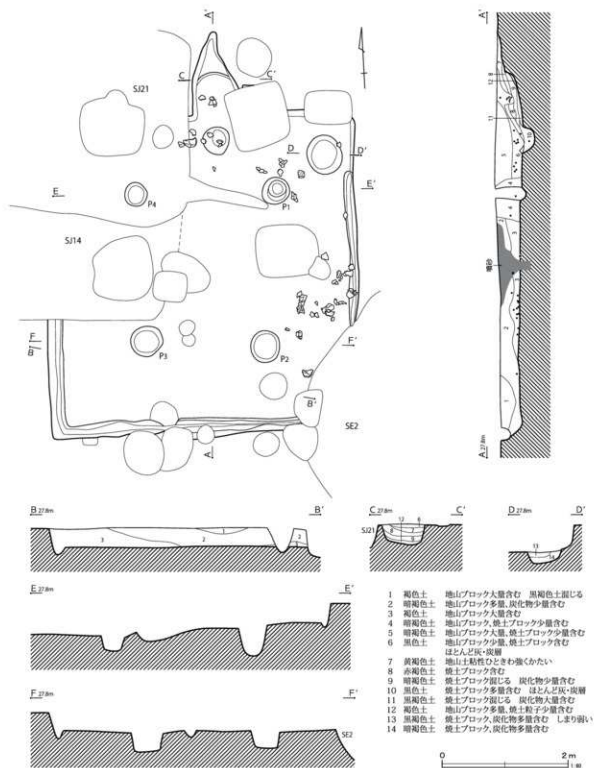
遺物は、竈周辺と南東部分から坏類と土師器甕及び円面碗の破片が出土した。

時期は、8世紀前半と考えられる。

第21号竪穴住居跡(第44図)

B3グリッドで検出した。第13号・14号・18号・19号・20号竪穴住居跡、第2号・8号掘立柱建物跡、第1号井戸跡と重複する。第14号・18号竪穴住居跡より新しく、それ以外の遺構より古い。平面形態は竈に対して縦長の長方形と考えられるが、住居跡の大半を新しい遺構によって壊されているため、詳細は不明である。残存していたのは竈および南壁部分である。残存していた規模は南壁が3.1mで、東壁は1.7mであった。残存する深さは50cmであるが、床面は第20号住居跡の床面にわずかに残っていた程度で、第20号住居跡の床面とほぼ同じ高さであったと考えられる。壁溝及び柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。竈は、東壁に構築されていた。燃焼部は、長さ50cm、幅46cmで、第17号住居跡と同じく住居跡外に張り出しており、袖は検出できなかった。煙道は長さ1.2mで床面に対して10°の傾斜を持ち、煙り出し部分の底面は平坦である。煙り出しの壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さは35cm残存していた。

遺物は、竈部分から須恵器坏、土鎌などごく少



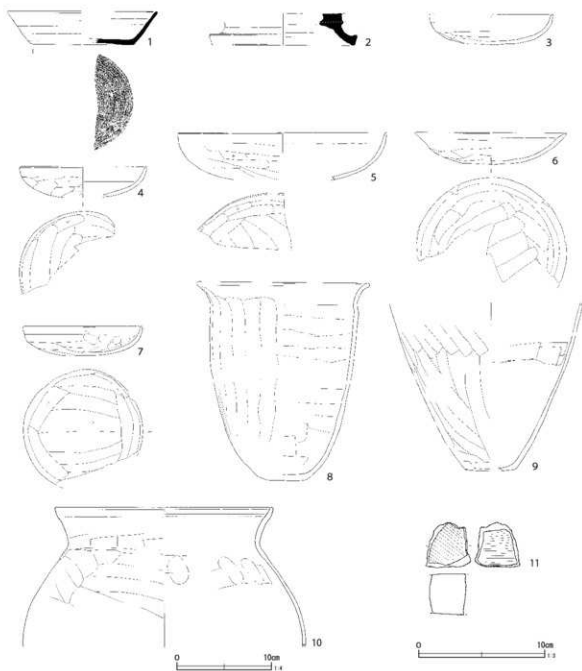
第42図 第18号住居跡

量検出した。

時期を判断する遺物に乏しいが、9世紀前半～中葉と考えておきたい。

第22号竪穴住居跡（第45図）

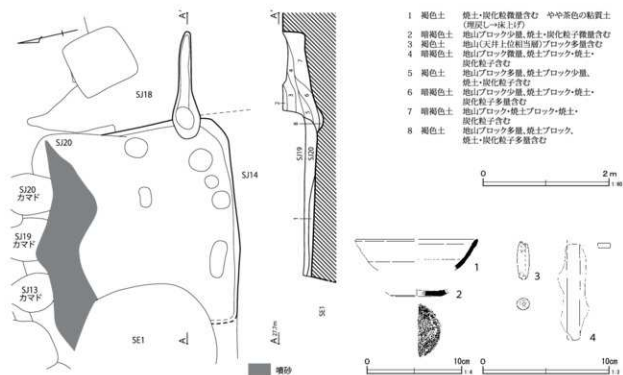
B4グリッドで検出した。第24号土壌と重複し、これより古い。住居跡の大部分は北側の調査区外にかかっていたため、詳細は不明である。検出したのは、南壁と西壁の一部である。検出した規模



第43図 第18号住居跡出土遺物

第24表 第18号住居跡出土遺物観察表 (第43図)

番号	遺構	種別	器種	形状(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ18	須恵器	坏	30	(15.8)	(10.4)	3.5	EHJK	I	灰	SJ18-9 南比企
2	SJ18	須恵器	碗	—	—	14.0	—	CHI	II	灰	SJ18-13
3	SJ18	土師器	坏	40	(12.9)	—	3.2	ACHIK	II	橙	SJ18-3
4	SJ18	土師器	坏	30	(13.2)	—	(3.2)	K	II	橙	SJ18-5
5	SJ18	土師器	坏	15	(22.0)	—	(5.0)	H	II	橙	SJ18-6
6	SJ18	土師器	坏	55	(15.8)	—	3.3	CEHIK	II	にぶい橙	SJ18-8
7	SJ18	土師器	坏	90	12.4	—	3.1	CEHIK	II	橙	SJ18-2
8	SJ18	土師器	甕	70	18.0	5.2	—	AEIK	II	明赤褐	SJ18-1
9	SJ18	土師器	甕	60	—	5.2	—	CEHI	II	にぶい橙	SJ18-11
10	SJ18	土師器	甕	30	(22.8)	—	—	CEHI	II	橙	SJ18-10
11	SJ18	石製品	砥石	—	長さ(3.6)	幅(3.5)	厚さ(3.11)	重さ(60.0g)	—	—	SJ18-12



第44図 第21号住居跡・出土遺物

第25表 第21号住居跡出土遺物観察表 (第44図)

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	焼成	色調	備考	
1	SJ21	須恵器	坏	25	(12.8)	—	—	CEIJK	I	黄灰	SJ21-1 南比奈
2	SJ21	須恵器	坏	40	—	(7.2)	—	EHIJ	II	黄灰	SJ21-2 南比奈
3	SJ21	土製品	土罐	—	長さ3.0	幅1.0	孔径0.3	—	—	—	SJ21-3
4	SJ21	鉄製品	棒状品	—	長さ[7.6]	幅1.05	厚さ0.4	—	—	—	SJ21-4 鉄製品5

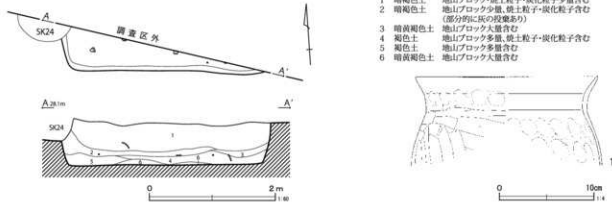
は、南壁が3.18m、西壁残存するは0.7mである。深さは66cmであった。長軸方位は南壁でN-94°-Eを示す。覆土は、他の住居跡と同じく地山ブロックを多く含む。壁はわずかに開き気味に立ち上がる。床面は平坦で、壁溝は検出されなかった。

遺物は、覆土中からわずかに出土したのみで、図示できたのは土師器甕1点である。

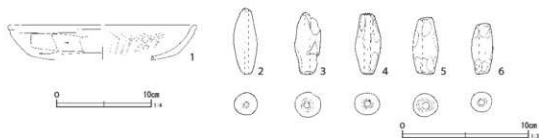
時期を判断する根拠に乏しいが、8世紀中葉～後葉と考えるべき

第23号竪穴住居跡 (第46・47図)

B6・C6グリッドで検出した。北側と東側は



第45図 第23号住居跡・出土遺物



第47図 第23号住居跡出土遺物

第27表 第23号住居跡出土遺物観察表 (第47図)

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ23	土師器	坏	15	(19.5)	—	(3.7)	H	II	橙	SJ23-1
2	SJ23	土製品	土鉢		長さ5.2	幅1.8	孔径0.3	重さ11.3g		灰黄褐色	SJ23-6
3	SJ23	土製品	土鉢		長さ4.8	幅2.0	孔径0.45	重さ14.7g		にぶい黄橙	SJ23-4
4	SJ23	土製品	土鉢		長さ4.8	幅2.0	孔径0.5	重さ15.0g		にぶい橙	SJ23-3
5	SJ23	土製品	土鉢		長さ4.5	幅2.0	孔径0.55	重さ15.2g		にぶい橙	SJ23-5
6	SJ23	土製品	土鉢		長さ4.0	幅2.65	孔径0.5	重さ10.5g		にぶい橙	SJ23-2

はN-92°Eである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は水平で竈周辺がやや低い。壁溝は、竈左側及び住居跡南西隅を除いて、幅20cm前後、深さ約10cmで掘り込まれていた。柱穴は検出されなかった。床下土壌と考えられる掘り込みを2基検出した。不整形円形で、長軸1.0m、短軸0.8~0.9m、深さはいずれも15cmである。竈は東壁のやや南寄りに構築されていた。焚口部は燃焼部に向かって緩やかに下がっている。燃焼部は、床面を10cm掘り下げそのまま火床面としている。支脚が残っていた。板状の石を用いている。袖は検出されなかった。第17号住居跡と同じく、燃焼部が住居跡の外側に張り出す形態のため、袖はなかったが、あっても短いものであったと考えられる。燃焼部の規模は長さ90cm、幅60cmである。煙道は火床面から段を持たずにそのまま移行する。長さ80cmで、床面に対して11°の傾斜を示す。

遺物は、ごく少量の出土で図示できたのは4点である。覆土中から灰釉陶器の破片が出土した。

(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第52図)

B2・3グリッドで検出した。第1号・8号・9号竈穴住居跡、第7号土壌、第1号溝跡と重複し、竈穴住居跡の遺構確認時と上面で柱穴を確認

第49図4は棒状の自然石であるが、先端部分を若干研磨している。

時期は9世紀後葉~10世紀初頭と考えておきたい。

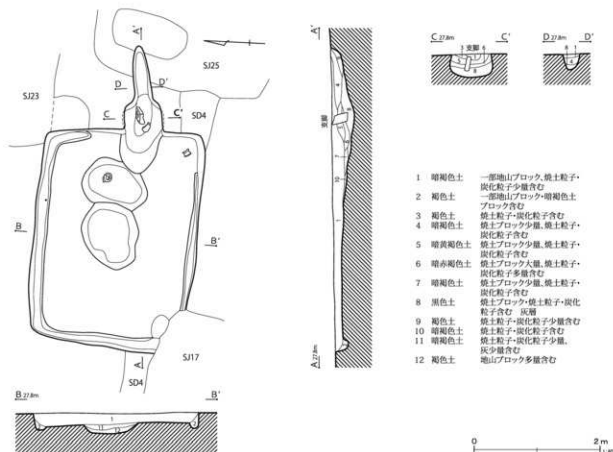
第25号竈穴住居跡 (第50・51図)

C6グリッドで検出した。第24号竈穴住居跡、第4号溝跡と重複し、前者より古く、後者より新しい。遺構の東側の大部分は調査区外にかかる。検出した規模は、西壁が2.6m、北壁は1.4mである。確認面からの残存する深さは、39cmであるが、調査区の土層の観察では1.0mの掘り込みがあった。方位は西壁を基準にするとN-17°Eを測る。埋没状況は自然堆積と考えられる。床面は西壁側にやや下がっていた。壁溝や柱穴は検出されなかった。

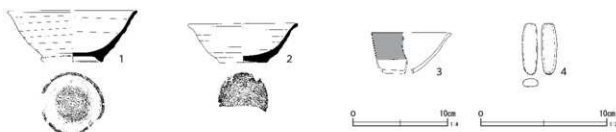
遺物は、覆土中から少量出土した。図示できたのは4点である。

時期は、9世紀中葉と考えられる。

したことから、竈穴住居跡より新しい。第1号溝跡は中世に属するものであり、第7号土壌は検出時に住居跡等より新しいことを確認している。したがって、本遺構は竈穴住居跡より新しく、他の



第48図 第24号住居跡



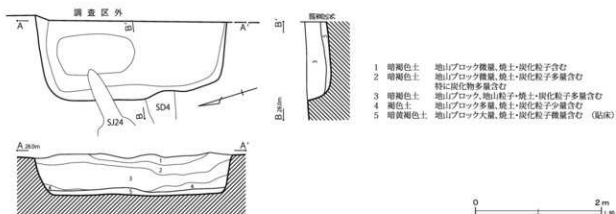
第49図 第24号住居跡出土遺物

第28表 第24号住居跡出土遺物観察表 (第49図)

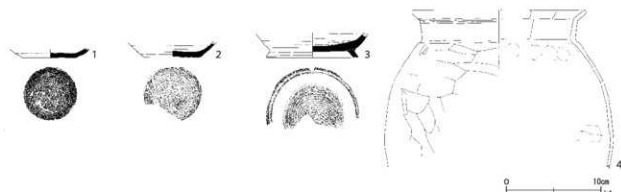
番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ24	須恵器	高台付碗	70	(13.4)	6.6	5.4	ABCEH	Ⅲ	にぶい褐	SJ24-2 木野 酸化炭
2	SJ24	須恵器	碗	40	(11.4)	(5.1)	4.1	AEH I	Ⅲ	黒灰	SJ24-1 木野
3	SJ24	灰釉陶器	碗	—	—	—	—	K	I	灰白	SJ21-6 破片
4	SJ24	石製品	—	—	長さ4.1 幅1.2 厚さ0.65	—	重さ5.7g	—	—	—	SJ218 断面に若干敲打している

遺構より古い。建物は、2間×2間の東西棟と考えられ、方位はN-89°-Eである。西側の梁行は第1号溝跡と第7号土壌によって壊されていると推定した。柱穴掘り方は隅丸方形で、長軸0.6~0.88m、短軸0.52~0.67m、検出面からの深さは

浅いもので22cm、深いものは58cmである。覆土はいずれも暗褐色土が主体で、灰褐色粒子を含んでいた。柱間は北側の桁行が2.7m、南側は2.65mで、梁行の柱間は北から2.34m、2.0mである。桁行側の柱穴が重複していることから建て替えがあった



第50図 第25号住居跡



第51図 第25号住居跡出土遺物

第29表 第25号住居跡出土遺物観察表 (第51図)

番号	遺構	種別	器種	片径(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SJ25	須恵器	坏	100	—	5.7	—	HIK	Ⅱ	灰	SJ25-2 未野
2	SJ25	須恵器	坏	70	—	6.0	—	DEIK	I	灰	SJ25-3 未野
3	SJ25	須恵器	長頸瓶	50	—	9.8	—	ABEHIK	I	灰黄	SJ25-4 未野
4	SJ25	土師器	甕	15	(18.0)	—	—	AHI	Ⅱ	橙	SJ25-1

ものと考えられる。

遺物は土師器小片がわずかに出土したが甲斐期を判断できるようなものはなかった。

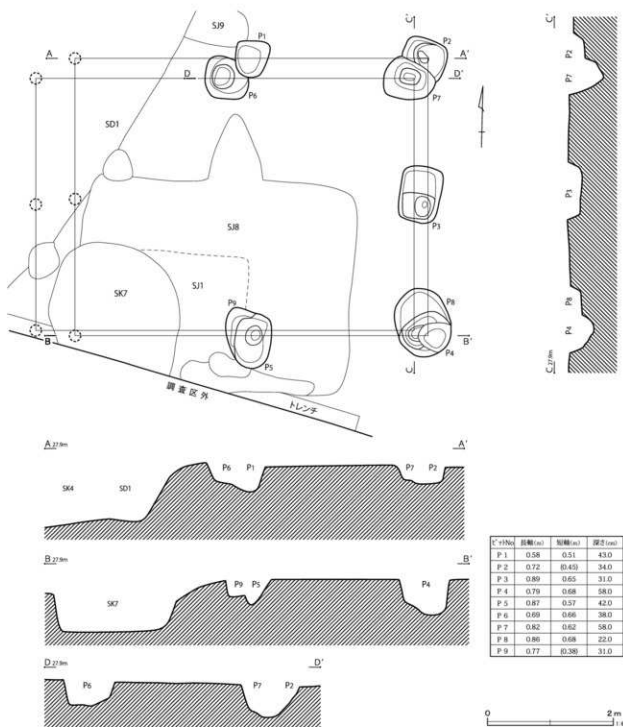
遺構の時期は、9世紀代の第1号竪穴住居跡より新しいことから、9世紀後半以降と推定しておきたい。

第2号・8号掘立柱建物跡 (第53～57図)

B3・4、C3・4グリッドで検出した。第1号・2号井戸跡、第8号・17号・22号・24号土壌、第5号・7号・10号・12号～15号・18号～22号竪穴住居跡、第4号溝跡と重複し、2基の井戸跡と第22号土壌より古く、竪穴住居跡と第4号溝跡よ

り新しい。第8号・17号・24号土壌との新旧関係は不明である。北東側は調査区外にかかる。

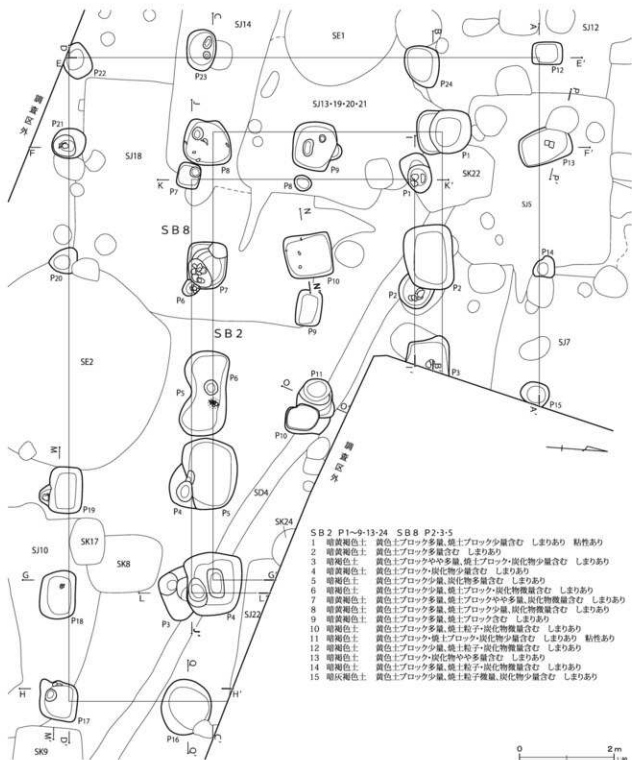
第2号掘立柱建物跡は、調査時には4間×2間の側柱建物と認識したが、調査の進捗によって、竪穴住居跡の覆土中に掘り込まれた柱穴を新たに複数確認し、その後の整理の過程で、あらためて四面庇付総柱建物と推定した。建物はN-86°-Eの方位を示す東西棟で、身舎の規模は、桁行が9.5m、梁行は4.8mである。柱間は、桁行前側で東から2.2m、2.1m、2.6m、2.6mとなり、東側の2間は狭い。梁行は、南から2.2m、2.6mである。殆どの柱穴は、柱抜き取りの後、焼土と炭化物を



第52図 第1号掘立柱建物跡

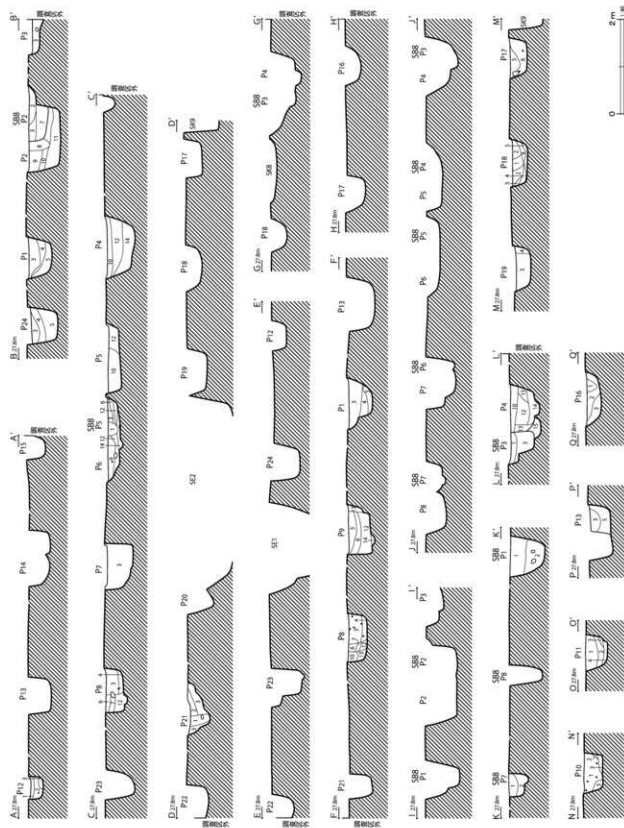
含む土で埋め戻され、柱痕は残っていなかった。このような状況から、本建物跡は火災に遭い、その後焼跡を片づけたと推定される。埋め戻された覆土中には、拳大の礫が纏まって入っていたことから、柱穴底面には根石が敷かれていたと考えられる。北西角の柱穴だけは、桁行、梁行ともに外

側にややずれるが、他の柱穴は柱筋がほぼ揃うと考えられる。柱穴掘り方は、方形乃至は長方形で、大きさは長軸0.94～1.80m、短軸0.88～1.16m、深さは30～70cmとばらつきがある。軸の長いものについては、重複や抜き取りの際に広がったと考えられる。建て替えについては、1箇所だけである



P	F	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	F	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	F	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	F	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)			
P1	0.94	0.88	53.1	P8	1.02	0.93	56.0	P15	0.60	0.49	40.0	P22	0.66	0.60	48.0	P3	0.82	0.74	42.0
P2	1.25	1.05	71.0	P9	1.06	1.02	60.0	P16	1.22	1.06	42.0	P23	0.86	0.62	77.0	P6	0.32	0.32	62.0
P3	0.92	0.60	33.0	P10	1.00	0.92	44.0	P17	0.84	0.82	44.0	P24	0.84	0.74	65.0	P7	0.38	0.54	43.0
P4	1.34	1.16	65.0	P11	0.84	0.76	54.0	P18	1.03	0.76	38.0	P1	0.84	0.58	73.0	P8	0.38	0.52	70.0
P5	1.50	1.12	33.0	P12	0.64	0.48	32.0	P19	0.98	0.92	42.0	P2	0.73	0.46	67.0	P9	0.64	0.63	71.0
P6	1.80	0.94	42.0	P13	1.15	0.74	51.0	P20	0.58	0.52	56.0	P3	1.04	0.54	70.0	P10	0.75	0.53	33.0
P7	0.98	0.84	63.0	P14	0.63	0.55	49.0	P21	0.72	0.56	49.0	P4	1.00	0.50	35.0				

第53図 第2・8号掘立柱建物跡(1)



第54图 第2·8号排立柱建物跡(2)

S B 2 P10	黄色土粒子やや多量、焼土ブロック少量、炭化物微量含む	しまりあり
1 暗褐色土	黄色土粒子やや多量、焼土ブロック少量、炭化物微量含む	しまりあり
2 暗褐色土	黄色土ブロック多量、焼土粒子・炭化物微量含む	しまりあり
3 暗褐色土	黄色土ブロック多量、炭化物微量含む	しまりあり
S B 2 P11	暗褐色土を主体とし、地山黄色土ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量含む	しまりあり 粘性あり
1 暗褐色土	暗褐色土を主体とし、地山黄色土ブロック多量含む	
2 暗褐色土	黄色土ブロック多量、炭化物微量含む	しまりあり 粘性あり
3 暗褐色土	地山ブロックを主体とし、暗褐色土が混入する	しまりあり 粘性あり
4 暗褐色土	暗褐色土を主体とし、地山黄色土ブロック少量含む	しまりあり 粘性あり
※分析しているが、基本的には埋戻しである		
S B 2 P12	黄色土ブロック多量、炭化物微量含む	しまりあり
1 暗褐色土	黄色土ブロック多量、炭化物微量含む	しまりあり
2 暗褐色土	黄色土ブロック多量、焼土粒子・炭化物微量含む	しまりあり
3 暗褐色土	黄色土ブロック少量、焼土・炭化物微量含む	しまりあり
S B 2 P16	ローム・ローム粒子多量、焼土少量、炭化物多量含む	
1 暗褐色土	ローム・焼土粒子・炭化物少量含む	
2 暗褐色土	ローム・焼土粒子・炭化物少量含む	
3 暗褐色土	焼土・炭化物少量含む	

S B 2 P17-18-19	炭化粒子微量含む	しまりあり 粘性あり
1 暗褐色土	炭化粒子微量含む	しまりあり 粘性あり
2 暗褐色土	地山ブロック多量、炭化粒子少量含む	しまりあり 粘性あり
3 暗褐色土	地山ブロック多量含む	しまりあり 粘性あり
4 暗褐色土	地山ブロック多量含む	しまりあり 粘性あり
5 暗褐色土	地山ブロック少量、焼土粒子・炭化物微量含む	
6 暗褐色土	地山ブロック多量、焼土粒子・炭化物微量含む	
S B 2 P21	黄色土ブロック少量、焼土粒子・炭化物微量含む	しまりあり
1 暗褐色土	黄色土ブロック多量、炭化物微量含む	しまりあり
2 暗褐色土	黄色土ブロック少量、炭化物微量含む	しまりあり
3 暗褐色土	黄色土ブロック少量、焼土・炭化物微量含む	
S B 8 P1	暗褐色土を主体とし、地山黄色土ブロック多量含む	
1 暗褐色土	暗褐色土を主体とし、地山黄色土ブロック多量含む	
2 暗褐色土	焼土ブロック少量含む	しまりあり 粘性あり
S B 8 P7	焼土・炭化粒子少量含む	しまりあり 粘性あり
1 暗褐色土	地山ブロック含む	しまりあり 粘性あり
2 暗褐色土	焼土・炭化粒子少量含む	しまりあり 粘性あり

第55図 第2・8号掘立柱建物跡(3)

が、南東角の柱穴断面で柱穴の重複が確認できたことから、その可能性もあると考えている。庇は、南面と西面の中央の柱穴1箇所を井戸跡によって壊されている。身舎からの距離は、南面3.0m、北面2.3m、東面2.3m、西面2.0mである。柱穴掘り方は身舎より一回り小さく、深さは40cm代が多い。

遺物は、柱穴覆土から破片の状態で出土し、緑釉陶器、灰釉陶器が含まれる割合が高い。

時期は、搬入陶器がK-90号様式の新しい段階であり、P 8出土の土師器杯も9世紀後葉～10世紀前葉の中で捉えられる。

第8号掘立柱建物跡のP 1～P10は、第2号掘立柱建物跡より新しい。平面図は掘り上がりの状態を示しているが、P 2、P 3の土層断面で新旧関係が把握できる。規模は4間×2間の東西棟で、桁行8.8m、梁行4.8mである。主軸方位は第2号掘立柱建物と同じN-86°-Eである。柱穴覆土には第2号掘立柱建物跡と同じ礫が含まれているものがある。本建物については、重複関係から第2号掘立柱建物跡の火災後に、規模をやや縮小して復旧した建物と推定する。

第3号・4号掘立柱建物跡(第58～61図)

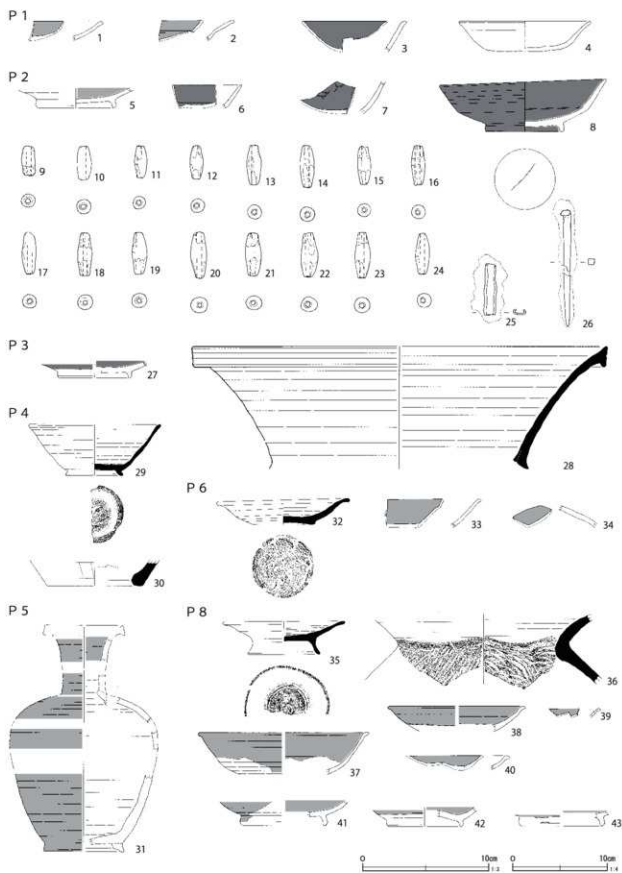
B 5・C 5グリッドで検出した。第17号住居跡、

第21号土壇、第4号溝跡と重複し、溝跡より新しく他の遺構より古い。

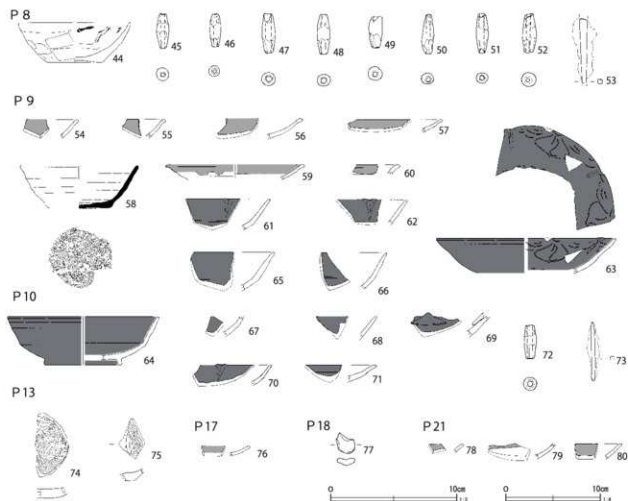
第3号掘立柱建物跡は、3間×2間の南北棟で、南東隅の柱穴は第17号住居跡によって壊されている。規模は桁行6.9m、梁行4.9mで、方位はN-5°-Wを示す。柱穴掘り方は隅丸長方形で、長軸0.8～1.2m、短軸0.6～1.1m、検出面からの深さは浅いもので22cm、深いものは53cmである。隅の柱穴掘り方はL字型を呈する。覆土は暗褐色土が主体で、地山の黄色土粒子を含んでいた。柱間は、西側の桁行が南から2.7m、2.5m、1.7mで、梁行は西から2.65m、2.25mである。建物の北半部外側に雨落溝(S D10)を検出した。溝は西側では南端が立ち上がるが、東側南端部は立ち上がり認められず、だらだらと広がって消滅していた。

遺物は、P 1と雨落溝から須恵器杯が1点ずつ出土した。いずれも南北企産で第2号掘立柱建物跡の遺物よりやや古いことから、第3号掘立柱建物跡は第2号掘立柱建物跡より古いと考えられる。

第4号掘立柱建物跡は、第3号掘立柱建物跡の内側に北側と西側の柱穴を検出した。2間×2間の南北棟で、南側の柱穴2基は複乱しと第17号住居跡によって壊されていると推定した。東側の中間柱はなかった。規模は、桁行4.7m、梁行4.0mで、



第56图 第2号窟立柱建物跳出土遗物(1)



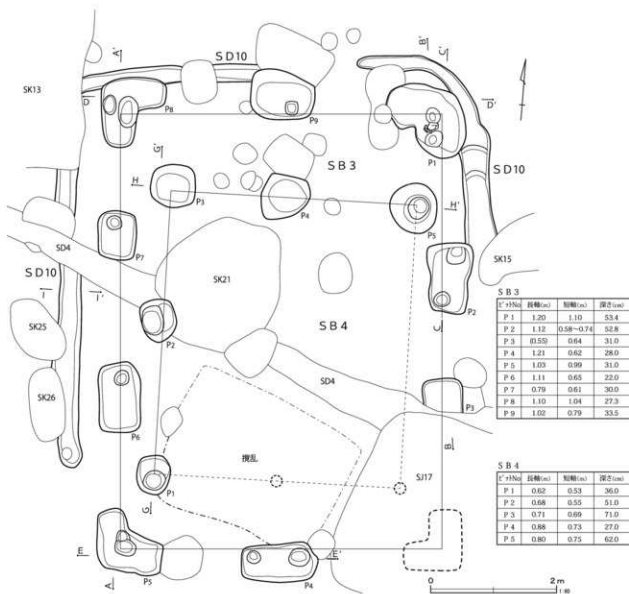
第57図 第2号掘立柱建物跡出土遺物(2)

第30表 第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表(1)(第56図)

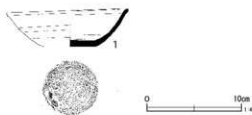
番号	遺物	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SB2	灰輪陶器	碗	5	—	—	—	IK	I	灰白	SR2-58 SR2 P1 撥投
2	SB2	灰輪陶器	段皿	—	—	—	—	K	I	—	SR2-40 SR2 P1 釜段 破片
3	SB2	緑輪陶器	碗	—	—	—	—	I	II	灰	SR2-47 SR2 HtI 撥投
4	SB2	土師器	坏	40	13.8	—	3.2	H IK	II	にぶい+橙	SR2-3
5	SB2	灰輪陶器	碗	30	—	(8.0)	—	—	I	灰	SR2-42 SR2 P12 C 撥投
6	SB2	緑輪陶器	種碗	—	—	—	—	—	II	灰白	SR2-50 SR2 P2C 撥投
7	SB2	緑輪花文	種碗	—	—	—	—	—	I	淡黄色	SR2-45 SR2 P12C 撥投
8	SB2	緑輪陶器	種碗	—	—	—	—	—	II	淡黄色	SR2-46 SR2 P12C 撥投
9	SB2	土製品	土鉢	300-100	17.4	8.1	5.6	—	—	—	SR2-26 SR2-P2B
10	SB2	土製品	土鉢	—	長さ2.3	幅1.05	孔径0.4	重さ2.8g	—	—	—
11	SB2	土製品	土鉢	—	長さ2.7	幅1.15	孔径0.4	重さ3.3g	—	にぶい+黄橙	SR2-24 SR2-P2B
10	SB2	土製品	土鉢	—	長さ2.5	幅1.0	孔径0.3	重さ2.2g	—	にぶい+黄橙	SR2-16 SR2-P2B
12	SB2	土製品	土鉢	—	長さ2.6	幅1.1	孔径0.35	重さ2.7g	—	にぶい+黄橙	SR2-25 SR2-P2B
13	SB2	土製品	土鉢	—	長さ3.1	幅1.1	孔径0.35	重さ3.5g	—	黒	SR2-19 SR2-P2B
14	SB2	土製品	土鉢	—	長さ3.3	幅1.15	孔径0.35	重さ3.8g	—	にぶい+黄橙	SR2-20 SR2-P2B
15	SB2	土製品	土鉢	—	長さ3.0	幅1.0	孔径0.3	重さ3.0g	—	浅黄	SR2-15 SR2-P2B
16	SB2	土製品	土鉢	—	長さ3.1	幅1.1	孔径0.35	重さ3.3g	—	にぶい+黄橙	SR2-22 SR2-P2B
17	SB2	土製品	土鉢	—	長さ3.3	幅1.1	孔径0.35	重さ3.8g	—	にぶい+黄橙	SR2-23 SR2-P2B
18	SB2	土製品	土鉢	—	長さ3.35	幅1.15	孔径0.3	重さ4.0g	—	にぶい+黄橙	SR2-13
19	SB2	土製品	土鉢	—	長さ3.25	幅1.2	孔径0.35	重さ3.7g	—	にぶい+黄橙	SR2-12 SR2-P2B
20	SB2	土製品	土鉢	—	長さ3.6	幅1.3	孔径0.3	重さ5.5g	—	にぶい+黄橙	SR2-18 SR2-P2B
21	SB2	土製品	土鉢	—	長さ3.35	幅1.25	孔径0.35	重さ4.5g	—	にぶい+黄橙	SR2-11 SR2-P2B
22	SB2	土製品	土鉢	—	長さ3.45	幅1.35	孔径0.35	重さ5.1g	—	黒	SR2-17 SR2-P2B
23	SB2	土製品	土鉢	—	長さ3.6	幅1.25	孔径 0.35	重さ4.5g	—	にぶい+黄橙	SR2-21 2-2B

第31表 第2号福立柱建物跡出土遺物観察表(2) (第56図~57図)

番号	遺構	種別	器種	保存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考	
24	SR2	土製品	土鉢		長さ3.2	幅1.1	孔径0.35	重さ3.6g		浅黄	SB2-14 SB2-P2B	
25	SR2	鉄製品	釘		長さ4.0	幅1.0	厚さ—	重さ26.3g			SB2-37-2 鉄製品18	
26	SR2	鉄製品	釘		長さ9.2	幅0.4	厚さ0.5	重さ16.9g			SB2-37-1 鉄製品18	
27	SR2	灰輪陶器	高台付埴	10	—	(7.4)	—	—	I	灰白	SB2-57 SB2-P3 猿投	
28	SR2	須恵器	甕		(43.6)	—	—	—	I	灰	SB2-7 表層No.2に接合 未野	
29	SR2	須恵器	高台付埴	30	(13.8)	(6.0)	5.4	E I K	II	暗灰	SB2-9 未野	
30	SR2	須恵器	甕	5	—	(10.0)	—	—	II	灰	SB2-10 未野	
31	SR2	灰輪陶器	長頸壺		—	(8.4)	—	—	I	灰白	SB2-60 SB2-P5 猿投	
32	SR2	須恵器	皿	90	13.7	6.6	2.8	E H I K	II	灰	SB2-1 未野	
33	SR2	灰輪陶器	埴	5	—	—	—	—	I	灰白	SB2-41 SB2-P6 No.2 猿投	
34	SR2	灰輪陶器	壺	底20	—	—	—	—	I	白灰	SB2-61 SB2-P6 猿投	
35	SR2	須恵器	高台付埴	40	12.6	7.7	3.5	A B C E H	III	灰黄	SB2-4 未野 酸化灰	
36	SR2	須恵器	甕	15	—	—	—	—	E H	II	灰	SB2-6 未野
37	SR2	灰輪陶器	埴	25	(8.0)	—	—	—	I K	I	灰白	SB2-30 SB2-P8 No.3 猿投
38	SR2	灰輪陶器	皿	30	(14.0)	—	—	—	K	I	灰白	SB2-44 SB2-P8 No.3 猿投
39	SR2	灰輪陶器	埴or埴	5	—	—	—	—	I K	I	灰白	SB2-48 S B2-P8 猿投
40	SR2	灰輪陶器	埴	5	—	—	—	—	I K	I	灰白	SB2-53 SB2-P8 猿投
41	SR2	灰輪陶器	埴	20	—	(8.6)	—	—	I K	I	灰白	SB2-56 SB2-P8 猿投
42	SR2	灰輪陶器	埴	30	—	(7.6)	—	—	I K	I	灰	SB2-55 SB2-P8 猿投
43	SR2	灰輪陶器	埴	底30	—	(8.4)	—	—	I	灰	SB2-54 SB2-P8 猿投	
44	SR2	土師器	埴	60	(11.6)	5.8	4.2	C E H K	III	橙	SB2-8	
45	SR2	土製品	土鉢		長さ2.7	幅0.95	孔径0.3	重さ2.0g		にぶい橙	SB2-32 SB2-P8B	
46	SR2	土製品	土鉢		長さ2.6	幅0.8	孔径0.25	重さ1.6g		にぶい橙	SB2-33 SB2-P8B	
47	SR2	土製品	土鉢		長さ3.1	幅1.05	孔径0.4	重さ2.4g		灰褐	SB2-31 SB2-P8B	
48	SR2	土製品	土鉢		長さ3.15	幅1.0	孔径0.4	重さ2.5g		灰褐	SB2-29 SB2-P8B	
49	SR2	土製品	土鉢		長さ[2.5]	幅1.1	孔径0.35	重さ1.8g		灰	SB2-34 SB2-P8B	
50	SR2	土製品	土鉢		長さ3.1	幅0.9	孔径0.3	重さ1.8g		にぶい橙	SB2-35 SB2-P8B	
51	SR2	土製品	土鉢		長さ3.1	幅0.9	孔径0.35	重さ1.9g		灰褐	SB2-30 SB2-P8B	
52	SR2	土製品	土鉢		長さ3.1	幅1.1	孔径0.3	重さ2.3g		にぶい黄橙	SB2-28 SB2-P2B	
53	SR2	鉄製品	釘		長さ[5.0]	幅0.6	厚さ0.35	重さ12.4g			SB2-38 鉄製品19	
54	SR2	灰輪陶器	埴	5	—	—	—	—	I	灰白	SB2-51 SB2-P9 猿投	
55	SR2	灰輪陶器	埴		—	—	—	—	I	灰白	SB2-52 SB2-P9 猿投	
56	SR2	灰輪陶器	埴	5	—	—	—	—	I	灰白	SB2-49 P9 猿投	
57	SR2	灰輪陶器	埴or埴	5	—	—	—	—	I	灰白	SB2-43 SB2-P9 猿投	
58	SR2	須恵器	埴	器9-11区	(12.3)	6.2	4.5	C I K	III	灰黄褐	SB2-62 B3-G1 B3G-P16 未野 2-4付着 酸化灰	
59	SR2	灰輪陶器	埴	10	(14.4)	—	—	—	I	灰白	SB2-68 B3G-10 B3G-P16 猿投	
60	SR2	灰輪陶器	小形壺		—	—	—	—	I	灰白	SB2-80 B3G-2 B3G-P16 猿投	
61	SR2	緑輪陶器	輪花埴埴		—	—	—	—	KL	II	淡緑色	SB2-75 B3G-8 B3G-P16 猿投
62	SR2	緑輪陶器	輪花埴		—	—	—	—	KL	II	淡緑色	SB2-74 B3G-7 B3G-P16 猿投
63	SR2	緑輪陶器	花文輪花埴		(19.0)	—	—	—	L	II	淡黄色	SB2-72 B3G-15 B3G-P16 猿投
64	SR2	緑輪陶器	埴埴	器5-17区	(16.0)	(8.0)	5.1	K	II	淡黄色	SB2-69 B3G-12 B3G-P16 尾上	
65	SR2	緑輪陶器	埴埴		—	—	—	—	H	II	淡橙—灰白	SB2-71 B3G-14 B3G-P16 猿投
66	SR2	緑輪陶器	埴埴		—	—	—	—	KL	II	淡緑色	SB2-78 B3G-16 B3G-P16 猿投
67	SR2	緑輪陶器	埴埴		—	—	—	—	KL	II	淡緑色	SB2-78 B3G-21 B3G-P16 猿投
68	SR2	緑輪陶器	埴		—	—	—	—	L	II	淡緑色	SB2-77 B3G-20 B3G-P16 猿投
69	SR2	緑輪陶器	埴		—	—	—	—	KL	II	淡緑色	SB2-79 B3G-22 B3G-P16 被塵により破片密着
70	SR2	緑輪花文	輪花皿		—	—	—	—	K	I	灰	SB2-70 B3G-13 B3G-P16
71	SR2	緑輪陶器	埴埴		—	—	—	—	KL	II	淡緑色	SB2-76 B3G-19 B3G-P16
72	SR2	土師器	埴		長さ2.6	幅1.0	孔径0.4	重さ2.4g		浅黄	SB2-65 B3G-7 B3G-P16	
73	SR2	鉄製品	棒状品		長さ4.6	幅0.3	厚さ0.25	重さ2.7g			SB2-67 B3G-8-9 同一群 B3G-P16 表層No.20-22	
74	SR2	土師器	埴	45	—	—	—	—	A H I K	II	外面橙・内面黒	SB2-60 B3G-2 B3G-P22 内土層
75	SR2	土師器	埴	5	—	—	—	—	A C H I K	II	外面橙・内面黒	SB2-64 B3G-3 B3G-P22-P23
76	SR2	灰輪陶器	埴		—	—	—	—	I K	I	灰白	SB2-84 SB2-1 SB2-P12 猿投
77	SR2	銅製品	銅埴		重さ1.1g	—	—	—	K	I	灰白	SB2-85 C6G-1 C6G-P8 表層No.20
78	SR2	灰輪陶器	埴		—	—	—	—	K	I	灰白	SB2-83 C6G-4 C6G-P11 猿投
79	SR2	灰輪陶器	高台付埴		—	—	—	—	K	I	灰白	SB2-81 C6G-2 C6G-P11 猿投
80	SR2	灰輪陶器	埴		—	—	—	—	I	I	灰白	SB2-82 C6G-3 C6G-P11 猿投



第58图 第3・4号掘立柱建物跡(1)



第59图 第3号掘立柱建物跡出土遺物



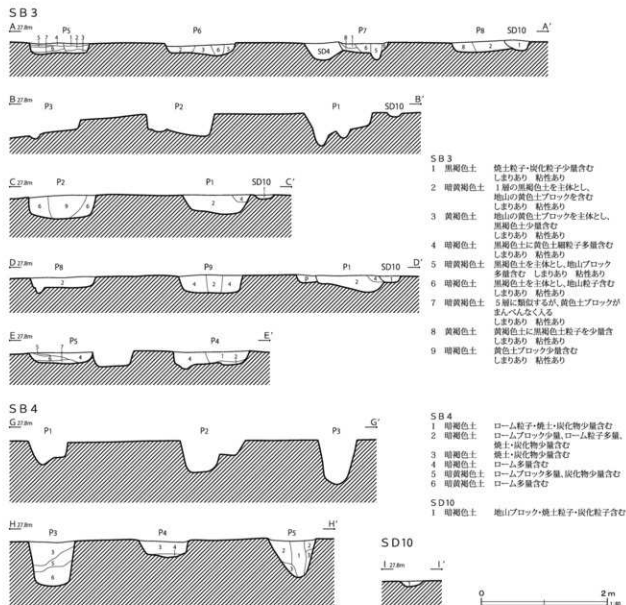
第60图 第10号溝跡出土遺物

第32表 第3号掘立柱建物跡出土遺物觀察表(第59图)

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SB3	須恵器	环	95	12.1	5.7	4.0	E H I J K	I	灰	SB3-1 南比企 SB3P1

第33表 第10号溝跡出土遺物觀察表(第60图)

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SD10	須恵器	环	25	(11.6)	—	—	H I J K	I	灰	SD10-1 南比企



第61図 第3・4号掘立柱建物跡(2)

方位はN 2° -Wである。柱間は、桁行が南から25m、22m、梁行は西から19m、21mである。

遺物は出土しなかったため、第3号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

第6号掘立柱建物跡(第62図)

C5・6グリッドで検出した。第7号掘立柱建物跡、第1号・2号柵列、第28号土壇と重複する。東側と南側の殆どが調査区外にかかる建物跡と推定した。検出したのは北側の柱穴3基と、中央の柱穴の南に1基である。検出した規模は北側が2

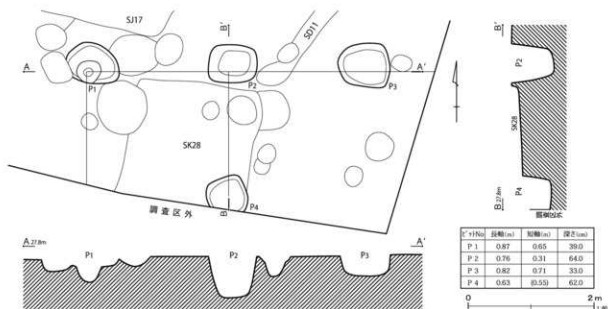
間分で4.4m、柱間は西から23m、21mである。

遺物は出土しなかった。

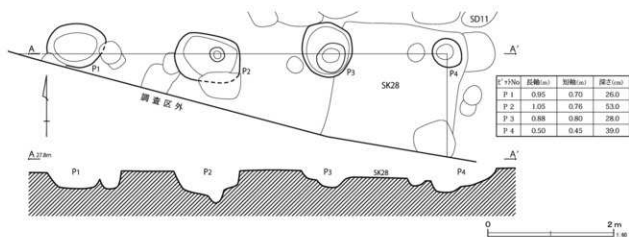
第7号掘立柱建物跡(第63図)

C5・6グリッドで検出した。第6号掘立柱建物跡、第2号柵列、第28号土壇と重複する。西側と南側の殆どが調査区外にかかる建物跡と推定した。検出したのは北側の柱穴4基である。規模は、3間分で5.9m、柱間は西から23m、1.8m、1.8mである。

遺物は出土しなかった。



第62図 第6号掘立柱建物跡



第63図 第7号掘立柱建物跡

(3) 柵列跡

第1号柵列 (第64図)

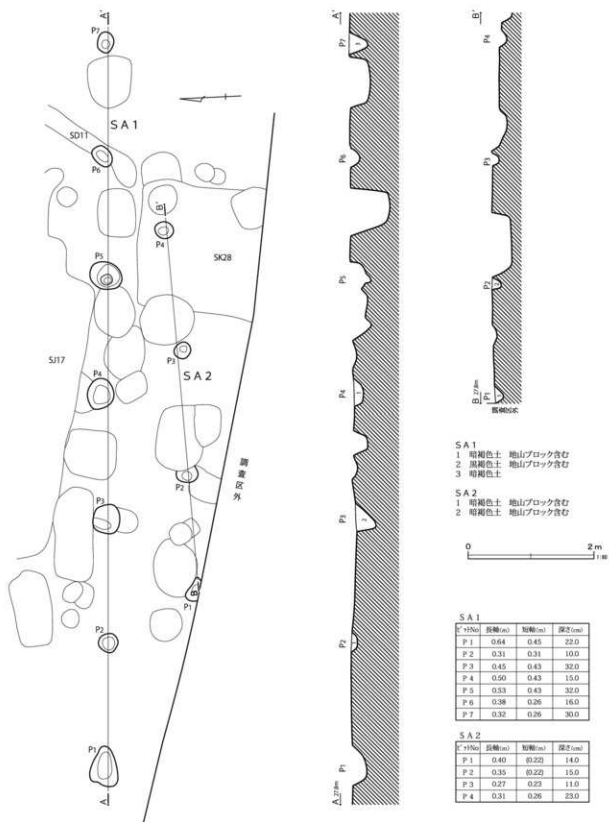
C5・6グリッドで検出した。第6号掘立柱建物跡とは直接重複するピットがないため新旧関係は不明である。東側は調査区外に延びる。方位はN-87°-Wで、長さは11.6mである。ピットは7基検出した。径は0.26~0.64mで、深さは10~32cmである。ピット間の距離は、西から2.0m、2.0m、2.0m、1.8m、2.0m、1.8mである。

遺物が出土しなかったため時期は不明である。

第2号柵列 (第64図)

C5・6グリッドで検出した。第6号・7号掘立柱建物跡、第28号土城と重複し、土城より新しいか掘立柱建物跡との新旧関係は捉えられなかった。東西方向で、方位はN-88°-Eを示し、西側は調査区外に延びる。ピットは径30cm前後で深さは11~23cmである。ピット間の距離は、西から1.8m、2.0m、1.9mである。

遺物は出土しなかったため時期は不明である。



第64図 第1・2号柵列跡

(4) 土壌

土壌は、B2グリッド及びB5・C5グリッド周辺でやや纏まって検出した。平面形態は、円形を基調とするものと長方形を基調とするものがある。本遺跡の特徴として、一括廃棄に伴うと考えられる土壌が約半数を占める。

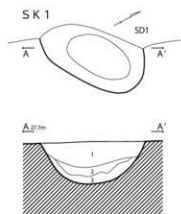
一括廃棄に関する土壌は、調査区西側B2グリッドとB5・C5グリッド周辺に集中している。西側では第2号・3号・4号・6号・7号・22号土壌、B5グリッド周辺では第9号・13号・14号・16号・21号土壌などが該当する。これらの土壌は、第22号土壌が第8号掘立柱建物跡に壊されているほかは、重複する全ての古代の遺構より新しい。土層は、レンズ状堆積であるが、第13号土壌(第66図)のように下半が埋め戻され、上半がレンズ状堆積を示すものもある。覆土に共通するのは暗褐色土と黄色土が互層になる点で、これに焼土と炭化物が多量に含まれていた。第9号土壌のように、炭化物が一定の厚さで存在し、層として分層できる場合も少なくない。覆土中からは、どの層からも同一時期の遺物が出土し、埋まるのに大きな時間差があったとは考えられない。また、第9号土壌は多量の遺物を出土し、その状況から一括廃棄されたものであることは間違いない。出土した遺物は、圧倒的に埴類が多く、残存率が高い。また、灰軸陶器と緑軸陶器の比率が高い。出土した遺物は、殆どが二次的に被熱しているのも特徴である。

以下に、上述のような特徴を最もよく表している土壌として、第9号土壌と第21号土壌についてとりあげる。他の土壌については、紙数の関係で詳述できないため計測表を掲載した。

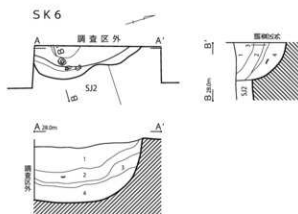
第9号土壌(第66図)は、C4グリッドで検出した。平面形は長方形で、壁の立ち上がりはほぼ垂直である。底面には、中央に高さ15cmの東西方向の掘り残しがあり、北側は平坦であるが、南側

は中央が浅いピット状になっていた。覆土中からは残存率の高い埴類が多量に出土した。出土状況は、平面的には、土壌内に広がっているが、北側に集中が顕著である。個々の土器の出土状況は、内面が上のものもあれば、底部外面が上のものや斜めのものなどさまざまに統一性はない。このような状況から、遺物は投げ込まれたものと判断され、垂直分布からは北西方向から投げ込まれたことが窺える。このように、覆土と炭化物を多量に含むこと、遺物は一括廃棄されたもので北西方向から埋め戻されていること、土壌が第2号掘立柱建物跡に近接して掘られていること、第2号掘立柱建物跡は火災に遭った建物であることから、本土壌は第2号掘立柱建物の焼け跡を整理した際に掘られ、すぐに埋められたと推定できる。遺物は埴類が圧倒的に多く、図示したのも埴類が9割以上を占める。第72図105は混入であるが他は本土壌に伴う。灰軸陶器は、第72図100が浜北産、102が東濃産で他は猿投産である。K-90の新しい段階で、伴出した遺物とも年代は矛盾しない。墨書土器が4点出土した。全て「上家」の文字で、第71図79-81は口縁に平行に、82は垂直に描かれる。墨書の位置は体部外面である。

第21号土壌(第67図)はC5グリッドで検出した。不整形であるが、一部直線的な部分がある。断面は半円形である。遺物は覆土中からまんべんなく出土した。やはり埴類が多く、灰軸陶器、緑軸陶器の割合が高い。灰軸陶器は全て猿投産で、緑軸陶器は188が猿投産、189は尾北産である。いずれもK-90の新しい段階である。また、本土壌の出土破片が第2号掘立柱建物跡P2出土破片と接合した(第56図6)ことから、本土壌と掘立柱建物跡の同時性が推定できる。このほかに片面視の破片が出土した。脚部には筥先状の工具で鋭い沈線が刻まれる。南比企産である。

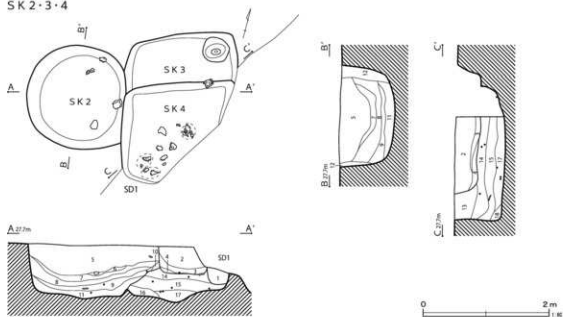


- 1 暗褐色土 黄色土ブロック・黄色土粒子少量、焼土粒子・炭化物少量含む しまりあり 粘性あり
- 2 暗灰褐色土 黄色土ブロック・黄色土粒子・焼土粒子・炭化物少量含む しまりあり 粘性あり
- 3 暗灰褐色土 黄色土ブロックやや多量、焼土粒子少量含む しまりあり



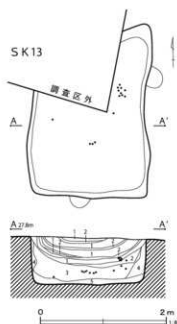
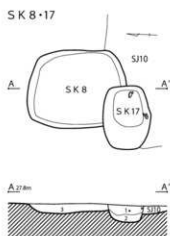
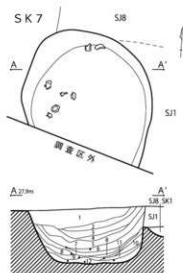
- 1 暗褐色土 黄色土ブロック・焼土ブロック少量、炭化物少量含む しまりあり
- 2 暗褐色土 黄色土ブロックやや多量、黄色土粒子・焼土粒子少量、炭化物少量含む しまりあり
- 3 暗灰褐色土 黄色土ブロック・焼土粒子・炭化物少量含む しまりあり
- 4 暗褐色土 炭・灰の層 黄色土ブロック少量含む 粘性あり

SK 2・3・4



- 1 暗黄褐色土 黄色土ブロック・黄色土粒子少量、炭化物少量含む しまりあり (土層に付いたベント)
- 2 暗褐色土 黄色土ブロック多量、黄色土粒子・焼土粒子少量、炭化物やや多量含む しまりあり 粘性あり
- 3 黒褐色土 炭化物主体 黄色土ブロックやや多量含む 粘性あり
- 4 暗灰褐色土 黄色土粒子・焼土粒子・炭化物少量含む しまりあり 粘性あり
- 5 暗黄褐色土 黄色土ブロック少量、黄色土粒子やや多量、焼土粒子少量、炭化物やや多量含む
- 6 暗黄褐色土 黄色土粒子・炭化物少量含む しまりあり
- 7 黒褐色土 (炭化物主体) 黄色土ブロック少量含む
- 8 暗灰褐色土 黄色土ブロック・灰色土ブロック少量、炭化物少量含む 粘性あり
- 9 黒褐色土 (炭化物主体) 黄色土ブロック少量含む 粘性あり
- 10 暗褐色土 黄色土粒子やや多量、焼土粒子少量、炭化物やや多量含む
- 11 暗灰褐色土 黄色土ブロックやや多量、炭化物少量含む 粘性あり
- 12 暗黄褐色土 黄色土ブロック・黄色土粒子多量含む
- 13 暗黄褐色土 黄色土ブロック少量、黄色土粒子やや多量、焼土粒子少量、炭化物やや多量含む
- 14 暗灰褐色土 色土粒子・焼土粒子・炭化物少量含む 粘性あり
- 15 暗灰褐色土 黄色土ブロック・焼土粒子・炭化物少量含む 粘性あり
- 16 暗灰褐色土 黄色土ブロック多量、炭化物少量含む 粘性あり
- 17 暗灰褐色土 黄色土ブロック少量、焼土粒子少量、炭化物少量含む 粘性あり
- 18 暗灰褐色土 黄色土ブロック少量、炭化物少量含む しまりあり 粘性あり

第65図 土壌 (1)



- SK 7
- 1 暗褐色土 黄色土ブロック・黄色土粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量含む
しまりあり
 - 2 暗黄褐色土 (黄色土ブロック主体) 黄色土ブロック多量、炭化物微量含む
しまりあり
 - 3 暗褐色土 黄色土ブロック・焼土ブロック少量含む
 - 4 暗灰褐色土 黄色土ブロック・焼土ブロック少量含む しまりなし、粘性あり
 - 5 明灰褐色土 黄色土粒子少量、焼土ブロック微量、炭化物少量含む しまりあり
 - 6 明灰褐色土 (炭化物の屑を含む) 黄色土ブロック少量、焼土ブロック・
炭化物微量含む
 - 7 暗灰褐色土 (炭化物の屑を含む) 黄色土ブロック少量
 - 8 暗黄褐色土 黄色土ブロック主体 黄色土ブロック多量、焼土粒子・炭化物
微量含む 粘性あり
 - 9 灰褐色土 黄色土粒子少量 粘性あり
 - 10 暗灰褐色土 黄色土ブロック少量、焼土ブロック多量、炭化物少量含む

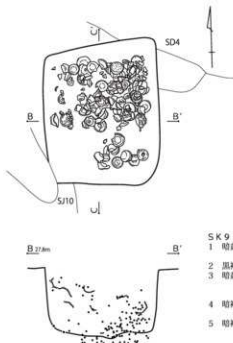
- 11 暗褐色土 (炭化物主体) 黄色土ブロック少量、炭化物多量含む
- 12 灰褐色土 灰色土ブロック多量、炭化物微量含む 粘性なし

SK 8・17

- 1 暗褐色土 炭化物少量含む
- 2 暗褐色土 焼土・ブロック少量含む
- 3 暗褐色土 焼土・ブロック少量含む

SK 13

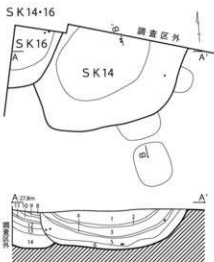
- 1 暗褐色土 暗褐色土主体 黄色土粒子・炭化物少量含む
- 2 シルト質 黄色土主体 砂粒含む
- 3 暗褐色土 暗褐色土主体で、炭化物屑が互層になる 焼土粒子多量含む
しまりややあり 粘性ややあり (暗灰土)
- 4 暗褐色土 暗褐色土に黄色土ブロック少量含む しまりあり 粘性あり
- 5 暗褐色土 暗褐色土に黄色土ブロック多量含む しまりあり 粘性あり



SK 9

- 1 暗黄褐色土 (暗褐色土主体) 黄色土ブロック多量含む
しまりあり 粘性あり
- 2 灰褐色土 灰褐色土含む しまりあり 粘性あり
- 3 暗黄褐色土 (暗褐色土主体)
黄色土ブロックやや多量、焼土ブロック・
炭化物ブロック含む しまりあり 粘性あり
- 4 暗褐色土 炭化ブロック、炭化粒子少量含む
しまりあり 粘性あり
- 5 暗褐色土 炭化粒子含む しまりあり 粘性あり
4・5層は遺存率の高い環状多量含む

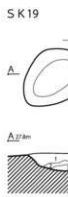
第66図 土壌 (2)



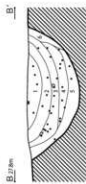
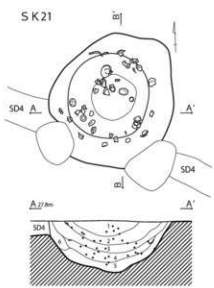
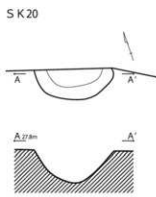
- 1 暗褐色土 炭化物層との互層 焼土粒子少量含む
- 2 暗炭褐色土 ローム・ロームブロック多量含む
- 3 暗炭褐色土 炭化物層との互層 ローム・ロームブロック多量、焼土少量含む
- 4 暗炭褐色土 ローム・ロームブロック多量含む
- 5 暗褐色土 炭化物層(幅3cm前後)との互層 ローム多量、焼土少量含む
- 6 暗炭褐色土 焼土・焼土・炭化物少量含む
- 7 暗炭褐色土 焼土少量、炭化物多量含む
- 8 暗炭褐色土 ローム・焼土粒子少量含む
- 9 暗炭褐色土 ローム・炭化物少量含む
- 10 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量含む 粘性あり
- 11 暗褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物少量含む
- 12 暗炭褐色土 ローム・焼土粒子少量含む
- 13 暗炭褐色土 ローム多量、炭化物少量含む
- 14 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量含む 粘性あり



- 1 暗炭褐色土 焼土粒子・炭化物少量含む
- 2 暗炭褐色土 炭化物層と焼土層の互層
- 3 暗炭褐色土 焼土・焼土粒子少量、炭化物多量含む
- 4 暗炭褐色土 地山ブロック・炭化物多量含む



- 1 暗褐色土 黄色土ブロック多量、焼土ブロック・炭化物やや多量含む
- 2 暗炭褐色土 黄色土ブロック多量、焼土ブロック少量、炭化物微量含む しまりあり
- 3 暗炭褐色土 黄色土ブロック多量、炭化物やや多量含む しまりあり



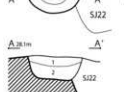
- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物やや多量含む しまりあり 粘性あり
- 2 暗褐色土 黄色地山ブロック多量含む しまりあり 粘性あり
- 3 暗褐色土 黄色地山ブロック・焼土粒子・炭化物少量含む しまりあり 粘性あり
- 4 暗褐色土 同層と暗褐色土の互層 焼土ブロック多量含む しまりあり 粘性あり
- 5 暗炭褐色土 地山ブロック多量、炭化物粒子含む しまりあり 粘性あり
- 6 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量含む しまりあり 粘性あり



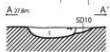
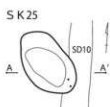
第67図 土壌 (3)



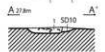
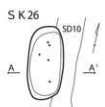
- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化粒子少量含む
しまりあり 粘性あり
- 2 暗褐色土 地山褐色土粒子・焼土粒子少量含む
やや砂質 しまりあり 粘性ややあり
- 3 暗灰褐色土 灰色粘質土ブロック多量・炭化粒子
少量含む しまりあり 粘性あり
- 4 暗灰褐色土 炭層(厚さ2~3cm)を層中に挟み
黄色土ブロック混入する
しまりあり 粘性あり
- 5 黄褐色土 地山黄色土ブロック多量含む
しまりあり 粘性あり
- 6 暗褐色土 焼土粒子・炭化
粒子多量含む
しまりあり 粘性あり



- 1 暗褐色土 地山ブロック・焼土粒子・
炭化粒子含む
- 2 暗褐色土 地山ブロック多量・焼土粒子・
炭化粒子少量含む



- 1 暗褐色土 地山ブロック・
焼土粒子・炭化
粒子含む



- 1 暗褐色土 地山ブロック・
焼土粒子・炭化
粒子少量含む



- 1 暗褐色土 地山粒子多量・焼土粒子・
炭化物含む
- 2 暗褐色土 地山ブロック・焼土粒子・
炭化物多量含む
- 3 褐色土 地山ブロック多量・焼土
粒子・炭化物少量含む



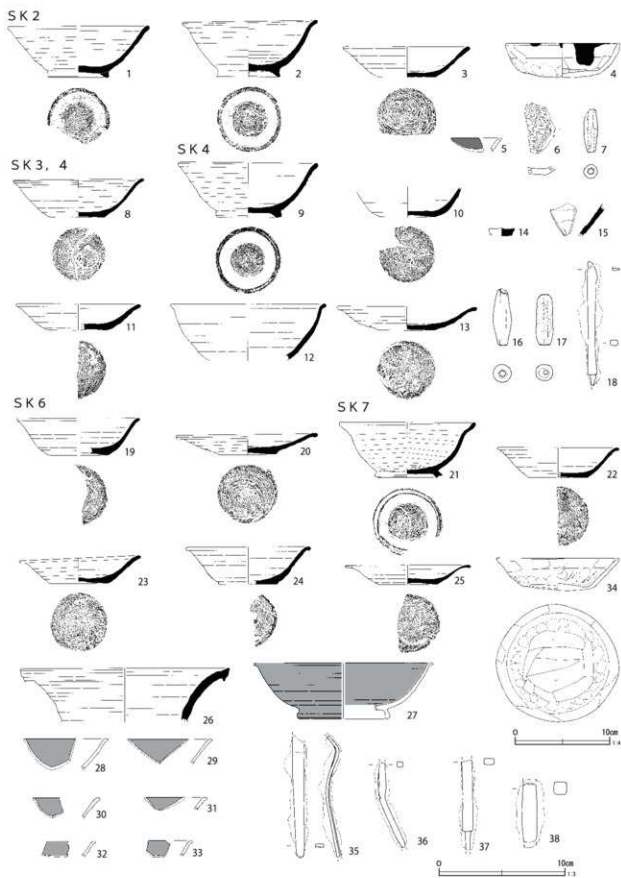
- 1 暗褐色土 地山ブロック多量・焼土粒子・
炭化粒子含む
- 2 褐色土 地山ブロック多量・焼土粒子・
炭化粒子少量含む



第68図 土壌 (4)

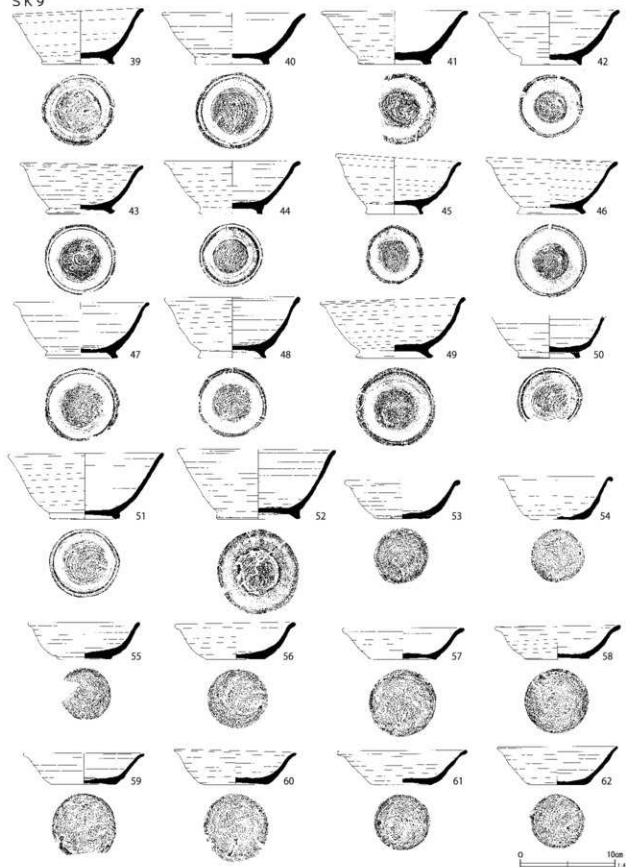
第34表 土壌計測表

遺構名	グリッド	形態	規模 (m)	方位
SK 1	B-2・3	楕円形	1.68×0.87×0.67	N-56°-E
SK 2	B-2	円形	1.72×1.70×0.84	N-4°-E
SK 3	B-2	方形?	1.83×0.77×0.43	N-73°-E
SK 4	B-2	方形	1.75×1.56×0.46	N-72°-E
SK 6	B-1	不整形円形?	(1.59)×(0.53)×0.84	N-12°-E
SK 7	B-2	楕円形?	2.11×(1.78)×0.88	N-16°-E
SK 8	B・C-4	隅丸方形	1.56×1.25×0.15	N-4°-W
SK 9	C-4	長方形	1.50×1.22×0.73	N-1°-E
SK 13	B・C-5	長方形	2.75×1.96×0.76	N-0°
SK 14	B-5	不整形楕円形?	2.52×1.55×0.53	N-81°-E
SK 15	C-5・6	不整形	1.90×0.96×0.43	N-71°-E
SK 16	B-5	不整形楕円形?	(1.0)×(0.73)×0.59	N-10°-E
SK 17	C-4	隅丸長方形	1.02×0.76×0.26	N-86°-E
SK 18	B-6	不整形楕円形?	1.10×0.80×0.30	N-63°-E
SK 19	C-5	楕円形	1.10×0.88×0.27	N-49°-W
SK 20	B-5・6	円形?	1.26×(0.50)×0.79	N-71°-W
SK 21	C-5	不整形楕円形	2.14×1.96×0.83	N-23°-E
SK 22	B-3	長方形	1.73×1.22×0.66	N-22°-W
SK 24	B-4	円形?	0.87×(0.34)×0.37	N-76°-W
SK 25	C-5	楕円形	1.10×(0.70)×0.17	N-36°-W
SK 26	C-5	隅丸長方形	1.17×0.57×0.09	N-6°-W
SK 27	B-6	円形	1.30×(0.87)×0.45	N-81°-W
SK 28	C-6	長方形?	2.02×(1.95)×0.18	N-8°-E



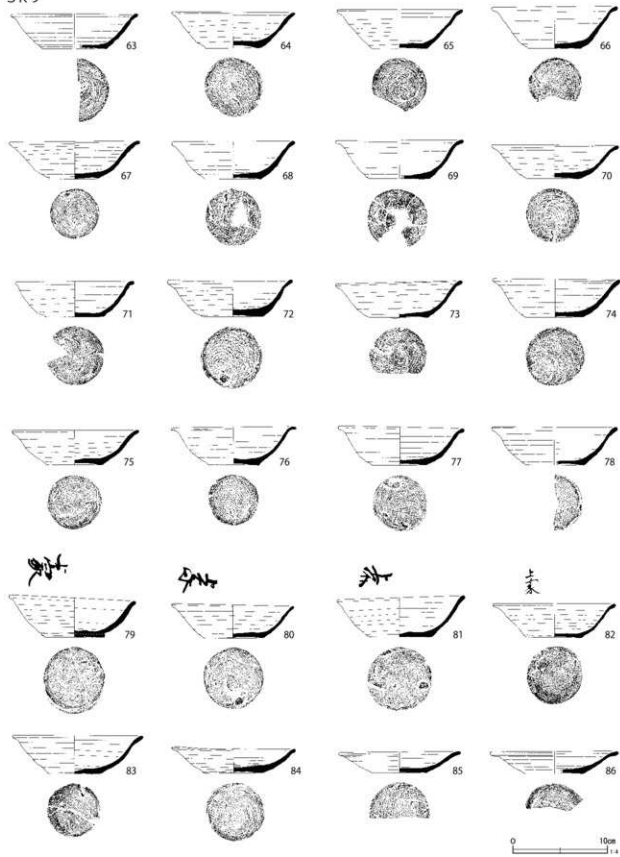
第69図 土器出土遺物(1)

SK9



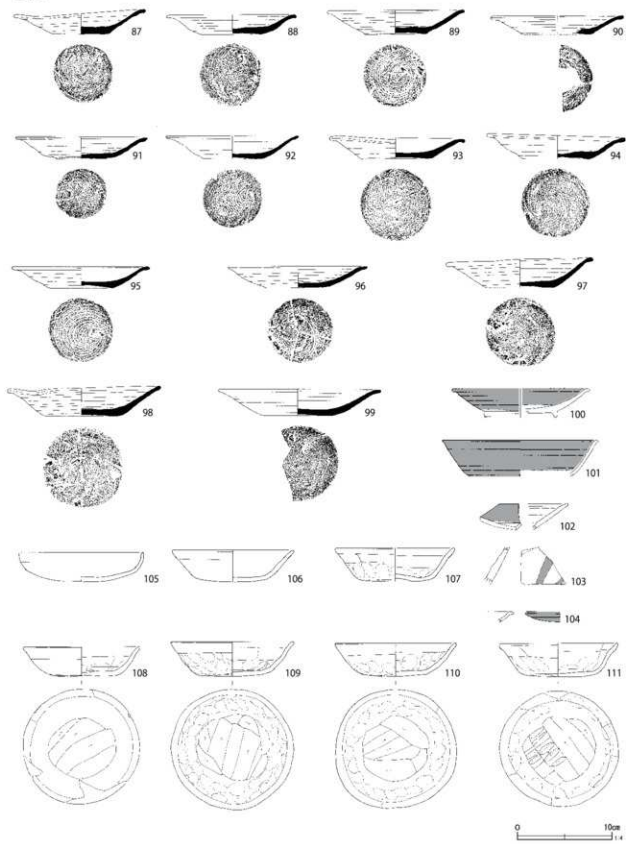
第70図 土壙出土遺物(2)

SK 9



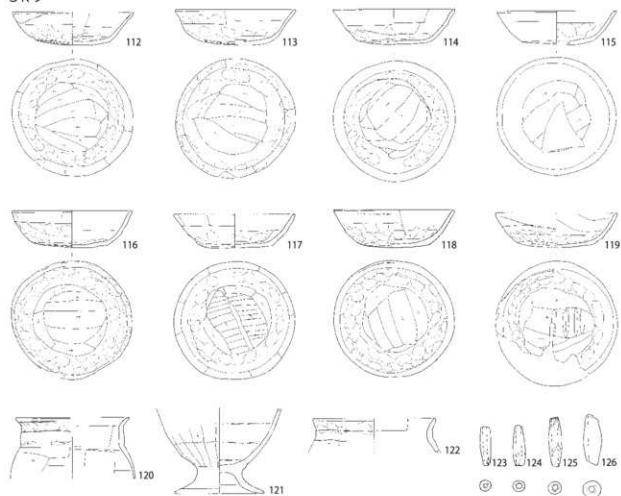
第71图 土横出土遺物(3)

SK 9



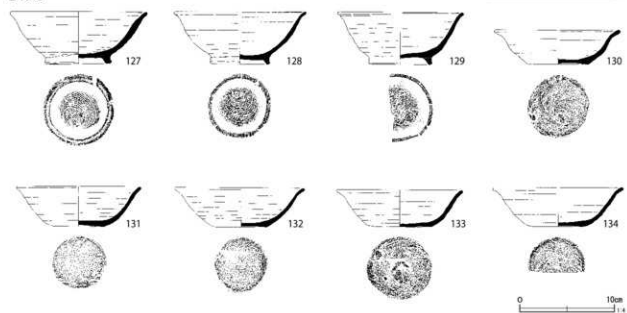
第72図 土壇出土遺物(4)

SK 9



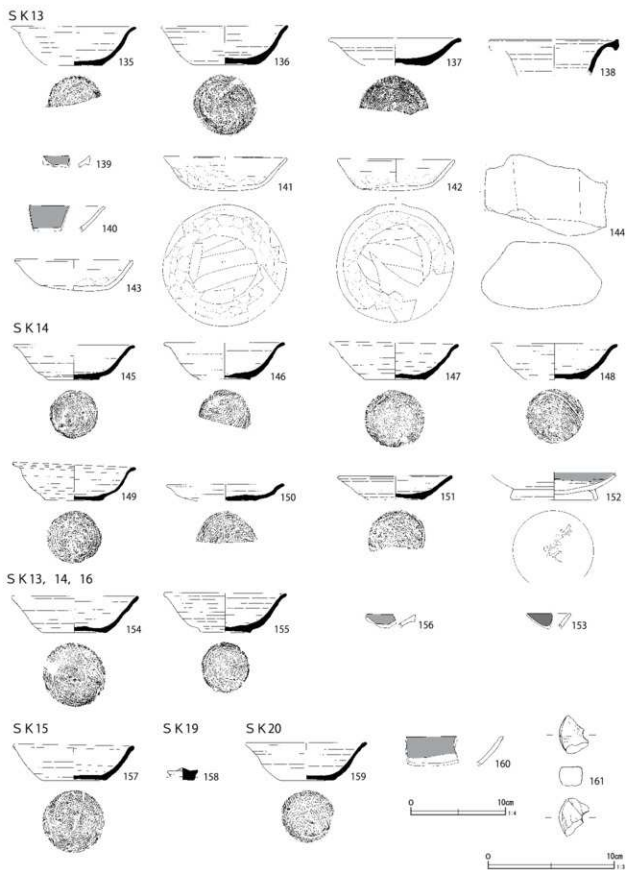
0 10cm
1:3

SK 13



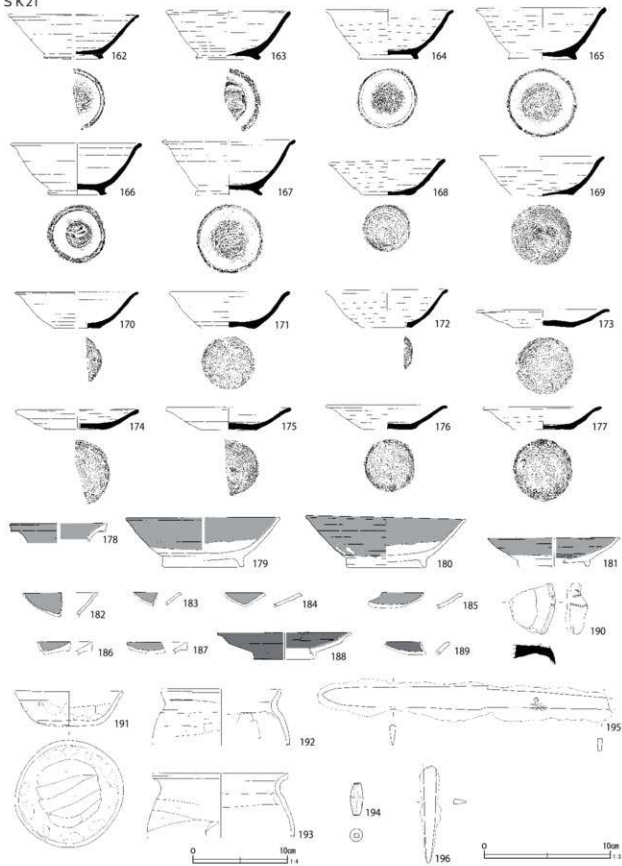
0 10cm
1:4

第73図 土橋出土遺物(5)

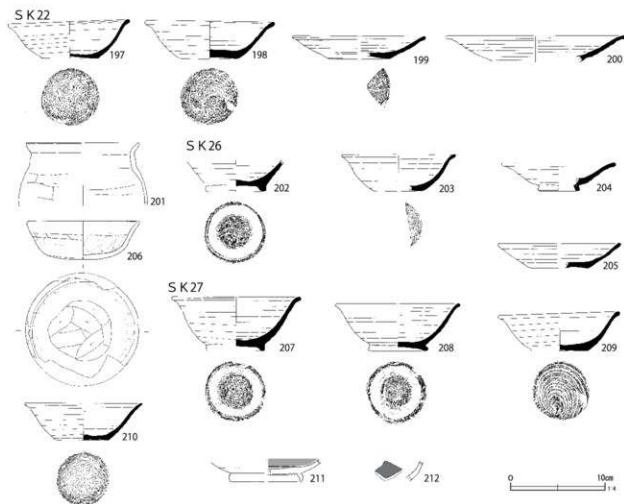


第74図 土壇出土遺物(6)

S K21



第75図 土器出土遺物(7)



第76図 土壌出土遺物(8)

第35表 土壌出土遺物観察表(1) (第69図)

番号	遺構	種別	器種	形状率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	SK2	須恵器	高台付壺	15	(14.8)	6.4	5.4	EH	Ⅱ	暗赤~黒	SK2-3 未野
2	SK2	須恵器	高台付壺	50	14.1	6.7	5.9	A E H I K	Ⅱ	褐灰	SK2-1 未野
3	SK2	須恵器	坏	20	13.0	6.1	3.3	A B E H K	I	灰褐	SK2-4 未野
4	SK2	土師器	坏	90	12.0	—	3.6	A E H I K	Ⅲ	にぶい橙	SK2-2
5	SK2	緑釉陶器	皿	破片	—	—	—	扶輪物少	Ⅲ	淡黄色 軟質	SK2-7 撥投
6	SK2	土師器	皿	底部	—	—	—	A H I K	Ⅲ	黄褐	SK2-5 内面黑色処理・ミギキ
7	SK2	土製品	土鏝	—	長さ3.4	幅1.1	孔径0.4	重さ2.8g	—	—	SK2-6
8	SK3・4	須恵器	坏	60	13.5	5.8	4.0	A B E H I K	Ⅱ	黒灰	SK3・4-2 未野
9	SK4	須恵器	高台付壺	30	(14.4)	6.9	5.8	B D E H	Ⅱ	灰	SK4-2 未野 底100%
10	SK4	須恵器	坏	50	—	5.9	(3.1)	C E H I K	Ⅱ	灰	SK4-1 未野
11	SK4	須恵器	皿	40	13.0	(6.0)	(2.7)	A B E H I K	I	濁灰~にぶい濁	SK4-3 未野
12	SK4	須恵器	壺	25	(16.2)	—	(6.0)	A E I K	I	暗灰	SK4-5 未野
13	SK4	須恵器	皿	90	(14.4)	6.2	2.5	A C E H I L	Ⅱ	にぶい橙	SK4-4 未野 胎土小礫
14	SK4	須恵器	蓋つまみ	90	—	—	—	C H I J K	I	灰白	SK4-9 南比企
15	SK4	須恵器	坏	破片	—	—	—	A C I K	Ⅱ	灰白	SK4-10 漆付着 未野
16	SK3・4	土製品	土鏝	—	長さ4.4	幅1.4	孔径0.5	重さ6.5g	—	灰褐	SK3・4-4
17	SK4	土製品	土鏝	—	長さ4.0	幅1.3	孔径0.35	重さ6.6g	—	黄灰	SK4-11
18	SK3・4	鉄製品	鉄鏝	—	断面径(最大径) 長さ(最大径)	幅(最大径)	孔径(最大径)	重さ(最大径)	—	—	SK3・4-5 鉄製品 9
19	SK6	須恵器	坏	30	12.8	(6.0)	3.9	E I K	Ⅱ	黒灰	SK6-1 未野
20	SK6	須恵器	皿	80	14.8	6.2	2.2	E H I K	I	褐灰	SK6-2 未野
21	SK7	須恵器	高台付壺	55	(14.2)	7.1	5.8	C I K	I	灰白	SK7-2 未野

第36表 土壌出土遺物観察表(2) (第69図・70図・71図)

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
22	SK7	須恵器	坏	45	(12.6)	(6.2)	3.15	DEHIK	Ⅱ	黒灰	SK7-5 未野
23	SK7	須恵器	坏	70	12.5	6.0	2.9	DEHIK	Ⅱ	灰	SK7-3 未野
24	SK7	須恵器	坏	40	(13.0)	(6.0)	4.0	AEEK	Ⅱ	灰	SK7-8 未野
25	SK7	須恵器	皿	40	(12.8)	(6.0)	2.1	ABCEHIK	Ⅲ	灰褐-黒	SK7-4 未野
26	SK7	須恵器	甕	25	(21.7)	—	—	EJ	Ⅱ	黒灰	SK7-7 南北企
27	SK7	須恵器	埴	10	(18.4)	(9.2)	5.9	IK	Ⅰ	灰白	SK7-9 袋投
28	SK7	灰輪陶器	埴	5	—	—	—	IK	Ⅰ	灰白	SK7-16 袋投
29	SK7	灰輪陶器	埴	5	—	—	—	IK	Ⅰ	灰白	SK7-20 袋投
30	SK7	灰輪陶器	埴	5	—	—	—	IK	Ⅰ	灰白	SK7-19 袋投
31	SK7	灰輪陶器	埴	5	—	—	—	IK	Ⅰ	灰白	SK7-18 袋投
32	SK7	灰輪陶器	埴	5	—	—	—	IK	Ⅰ	灰白	SK7-17 袋投
33	SK7	灰輪陶器	埴	5	—	—	—	IK	Ⅰ	灰白	SK7-15 袋投
34	SK7	土師器	坏	90	12.8	—	3.4	EHIK	Ⅱ	仁赤い橙	SK7-1
35	SK7	鉄製品	棒状品		長さ[9.7]	幅1.0最大	厚さ0.25	重さ18.0g			SK7-10 鉄製品10
36	SK7	鉄製品	釘?		縦長[7.0]	幅0.45	厚さ0.4	重さ12.5g			SK7-13 鉄製品13
37	SK7	鉄製品	鉄線		縦長[7.1]	幅0.9最大	厚さ0.45	重さ14.7g			SK7-12 鉄製品12
38	SK7	鉄製品	棒状品		長さ[5.4]	幅0.9	厚さ0.4	重さ27.3g			SK7-11 鉄製品11
39	SK9	須恵器	高台付埴	70	13.4	7.7	5.8	DEH	Ⅱ	灰	SK9-58 未野
40	SK9	須恵器	高台付埴	100	14.7	8.0	5.5	CEHJ	Ⅱ	灰	SK9-56 未野
41	SK9	須恵器	高台付埴	30	(14.8)	(7.8)	5.7	ABDEH	Ⅲ	橙	SK9-48 未野
42	SK9	須恵器	高台付埴	85	14.4	6.5	5.7	BCEK	Ⅱ	灰	SK9-49 未野
43	SK9	須恵器	高台付埴	95	12.8	7.3	5.3	EIJ	Ⅰ	黒灰	SK9-54 未野
44	SK9	須恵器	高台付埴	80	13.9	6.7	5.6	CEIK	Ⅱ	灰	SK9-55 未野
45	SK9	須恵器	高台付埴	70	12.8	6.1	6.0	DE	Ⅱ	灰	SK9-53 未野
46	SK9	須恵器	高台付埴	90	13.7	7.2	5.8	EHIK	Ⅰ	暗灰-黒灰	SK9-52 未野
47	SK9	須恵器	高台付埴	70	(13.8)	7.7	5.9	ABCEHK	Ⅱ	褐灰	SK9-57 未野
48	SK9	須恵器	高台付埴	55	14.0	7.2	6.4	ABCHK	Ⅱ	灰	SK9-51 未野
49	SK9	須恵器	高台付埴	80	15.1	8.1	6.4	BEH	Ⅲ	灰-黒灰	SK9-59 未野
50	SK9	須恵器	高台付埴	55	—	6.6	—	EIK	Ⅰ	暗灰	SK9-50 未野
51	SK9	須恵器	高台付埴	60	16.1	7.3	6.9	E	Ⅱ	灰	SK9-61 未野
52	SK9	須恵器	高台付埴	90	16.5	8.8	7.5	ABCEHI	Ⅲ	明褐色	SK9-60 未野?
53	SK9	須恵器	坏	60	(11.8)	5.8	4.1	CEIKL	Ⅰ	灰	SK9-24 未野
54	SK9	須恵器	埴	70	11.7	5.6	4.6	EIK	Ⅰ	暗灰	SK9-27 未野
55	SK9	須恵器	坏	60	11.4	5.7	3.9	ADEI	Ⅱ	黒灰	SK9-25 未野
56	SK9	須恵器	坏	100	12.4	6.1	3.9	EIK	Ⅱ	灰	SK9-26 未野
57	SK9	須恵器	坏	100	12.6	6.9	3.3	AHK	Ⅱ	灰褐	SK9-21 未野
58	SK9	須恵器	坏	100	13.0	6.8	3.5	EK	Ⅱ	灰	SK9-23 未野
59	SK9	須恵器	坏	65	(12.6)	6.8	3.3	EIK	Ⅱ	灰	SK9-31 未野?
60	SK9	須恵器	坏	95	12.7	6.5	3.8	ABCEHK	Ⅱ	灰白-黒	SK9-38 未野
61	SK9	須恵器	坏	90	13.5	6.0	3.6	ABDEHI	Ⅲ	灰褐	SK9-19 未野 酸化灰
62	SK9	須恵器	坏	100	12.5	5.8	4.1	EHK	Ⅱ	黒灰	SK9-22 未野
63	SK9	須恵器	坏	50	(12.9)	(6.7)	3.7	AEHIK	Ⅰ	灰白	SK9-32 未野 灰白
64	SK9	須恵器	坏	90	12.8	6.1	3.9	AEEK	Ⅱ	灰白	SK9-47 未野
65	SK9	須恵器	坏	40	(13.1)	5.9	4.1	CEIJK	Ⅱ	灰	SK9-36 未野
66	SK9	須恵器	坏	100	13.0	5.7	4.4	BCE	Ⅱ	黒灰	SK9-35 未野
67	SK9	須恵器	坏	100	13.6	5.2	4.0	E	Ⅰ	灰	SK9-20 未野
68	SK9	須恵器	埴	60	(12.6)	6.0	4.0	EHK	Ⅲ	仁赤い橙	SK9-17 未野 酸化灰
69	SK9	須恵器	坏	30	(13.4)	6.6	4.1	EHIK	Ⅱ	黒灰	SK9-30 未野
70	SK9	須恵器	坏	100	13.1	5.6	3.6	AEHIK	Ⅱ	暗灰-浅黄	SK9-42 未野?
71	SK9	須恵器	坏	70	12.3	6.1	3.8	HIK	Ⅲ	灰白	SK9-29 未野?
72	SK9	須恵器	坏	80	13.0	6.2	3.9	AEEK	Ⅱ	灰	SK9-40 未野?
73	SK9	須恵器	坏	60	13.3	6.1	3.7	BCDEK	Ⅱ	灰	SK9-33 未野?
74	SK9	須恵器	坏	70	13.4	6.1	4.2	EHIJK	Ⅱ	灰	SK9-37 未野
75	SK9	須恵器	坏	90	13.2	5.8	3.7	EHIK	Ⅰ	灰	SK9-39 未野
76	SK9	須恵器	坏	60	(12.7)	5.4	4.0	AEHIK	Ⅱ	暗灰-仁赤い橙	SK9-43 未野
77	SK9	須恵器	坏	90	13.0	5.8	4.2	EIK	Ⅰ	暗灰-黒灰	SK9-46 未野
78	SK9	須恵器	坏	45	(13.0)	(6.0)	4.0	BEK	Ⅱ	灰	SK9-34 未野
79	SK9	須恵器	坏	80	13.0	6.3	4.5	HI	Ⅲ	灰白-浅黄橙	SK9-6 器種不明
80	SK9	須恵器	坏	90	12.6	6.3	3.4	AIK	Ⅰ	灰	SK9-44 未野?
81	SK9	須恵器	坏	90	13.3	6.7	4.4	AEHI	Ⅱ	灰	SK9-41 未野?

第37表 土壌出土遺物観察表(3) (第71図・72図・73図・74図)

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
82	SK9	須恵器	坏	60	(12.6)	6.0	3.5	EIK	I	灰	SK9-28 未野
83	SK9	須恵器	坏	70	13.5	5.5	4.0	BCE	II	にぶい赤褐	SK9-18 未野 酸化炭
84	SK9	須恵器	甗	100	12.8	6.0	2.8	A E H I K	I	灰-黒灰	SK9-5 未野
85	SK9	須恵器	甗	25	(12.5)	(6.0)	2.2	A C E I K	I	灰	SK9-15 未野
86	SK9	須恵器	甗	25	(13.2)	(6.2)	—	A B E I K	I	灰	SK9-14 未野
87	SK9	須恵器	甗	100	13.6	6.1	2.7	E H	I	黒灰	SK9-4 未野
88	SK9	須恵器	甗	100	13.3	6.6	2.1	E H K	II	灰	SK9-3 未野
89	SK9	須恵器	甗	75	14.2	6.2	2.6	A B E H I K	II	国産前千石赤褐	SK9-13 未野
90	SK9	須恵器	甗	25	(13.6)	(7.1)	—	H I	II	赤褐	SK9-12 未野? 酸化炭
91	SK9	須恵器	甗	90	13.7	5.3	2.4	A B C I K	II	にぶい赤褐	SK9-8 未野
92	SK9	須恵器	甗	50	(13.8)	6.1	2.4	A C K	II	灰黄	SK9-16 未野
93	SK9	須恵器	甗	90	13.8	7.4	2.4	E H	II	胎	SK9-6 未野 酸化炭
94	SK9	須恵器	甗	80	14.4	7.1	2.7	A C E H I K	II	褐灰	SK9-10 未野
95	SK9	須恵器	甗	100	14.2	6.6	2.3	C D E H I K	II	黄灰	SK9-9 未野
96	SK9	須恵器	甗	95	14.5	6.7	2.4	A H I	II	にぶい橙	SK9-2 未野
97	SK9	須恵器	甗	95	15.2	7.0	3.2	A B E H I K	II	にぶい赤褐-黒	SK9-11 未野
98	SK9	須恵器	甗	85	15.8	7.5	3.2	A C E H I K	II	黄灰-灰	SK9-1 未野
99	SK9	須恵器	甗	60	16.9	7.3	2.8	B E H	II	灰-黒灰	SK9-7 未野
100	SK9	灰輪陶器	甗	40	(14.0)	(7.2)	3.1	I K	I	灰白	SK9-63 汎北
101	SK9	灰輪陶器	甗	60	16.1	—	—	K	I	白灰	SK9-62 須投
102	SK9	灰輪陶器	段皿	5	—	—	—	I K	I	灰白	SK9-65 須投
103	SK9	灰輪陶器	甗	5	—	—	—	I K	I	灰白	SK9-66 被熱 須投
104	SK9	灰輪陶器	甗	破片	—	—	—	I K	I	灰白	SK9-67 須投
105	SK9	土師器	坏	70	13.0	—	3.1	C I K	II	にぶい橙	SK9-77
106	SK9	土師器	坏	50	12.7	—	3.4	H I K	II	にぶい橙	SK9-75
107	SK9	土師器	坏	60	(12.4)	—	3.5	A H I K	II	—	SK9-76
108	SK9	土師器	坏	85	12.1	—	3.1	A E H I K	II	にぶい橙	SK9-85
109	SK9	土師器	坏	100	12.8	—	3.7	A H I K	II	橙	SK9-81
110	SK9	土師器	坏	100	12.6	—	3.5	A C H K	II	橙	SK9-82 外面の指は2段上段はナデられる
111	SK9	土師器	坏	95	12.4	—	3.5	A H I K	II	橙	SK9-79
112	SK9	土師器	坏	95	12.7	—	3.5	A H K	II	にぶい橙	SK9-89
113	SK9	土師器	坏	95	12.5	—	3.8	A E H I K	II	橙	SK9-86
114	SK9	土師器	坏	100	12.7	—	3.7	A H I K	II	橙	SK9-80
115	SK9	土師器	坏	85	12.5	—	—	A H K	II	にぶい橙	SK9-88
116	SK9	土師器	坏	95	12.5	—	3.9	A E H K	II	橙	SK9-87
117	SK9	土師器	坏	100	12.7	—	3.6	A H I K	II	橙	SK9-78
118	SK9	土師器	坏	100	12.6	—	4.0	A C H I K	II	橙	SK9-83
119	SK9	土師器	坏	75	(12.7)	—	3.4	C H I K	II	にぶい橙	SK9-84
120	SK9	土師器	甗	35	(11.8)	—	—	A C H I K	II	赤褐	SK9-73 (同一個体小)
121	SK9	土師器	甗	65	—	(9.4)	—	C H I K	II	灰褐	SK9-74 (同一個体小)
122	SK9	土師器	甗	20	(12.8)	—	—	A C H I K	II	にぶい橙	SK9-72
123	SK9	土製品	土鉢	—	長さ3.1	幅0.9	孔径0.3	重さ2.1g	—	にぶい橙	SK9-71
124	SK9	土製品	土鉢	—	長さ3.2	幅0.95	孔径0.45	重さ2.0g	—	赤褐	SK9-69
125	SK9	土製品	土鉢	—	長さ3.9	幅1.0	孔径0.4	重さ3.3g	—	赤褐	SK9-68
126	SK9	土製品	土鉢	—	長さ4.0	幅1.45	孔径0.5	重さ6.3g	—	にぶい橙	SK9-70
127	SK13	須恵器	高台付甗	80	14.2	7.1	5.5	A B E H I K	I	灰褐	SK13-4 積 底100% 口前75%
128	SK13	須恵器	高台付甗	55	(13.8)	6.4	5.5	A C E H I K	I	灰	SK13-13 未野
129	SK13	須恵器	高台付甗	35	(13.0)	6.8	5.5	E I K	I	灰	SK13-12 積 底100% 口前60%
130	SK13	須恵器	坏	70	(12.8)	6.4	3.6	B E H	II	灰-褐灰	SK13-11 未野
131	SK13	須恵器	坏	55	(13.0)	5.5	4.2	D E I K	II	黄灰	SK13-6 未野
132	SK13	須恵器	坏	80	13.5	5.4	4.1	C E I K	II	灰	SK13-4 未野
133	SK13	須恵器	坏	90	12.9	6.5	3.8	A D E I K	II	灰-黒灰	SK13-10 未野
134	SK13	須恵器	坏	40	(13.6)	(5.6)	4.1	A E H I J K	II	灰	SK13-9 未野
135	SK13	須恵器	坏	45	(13.0)	(5.9)	4.1	A E H I J K	II	褐灰	SK13-7 未野
136	SK13	須恵器	坏	70	—	6.3	4.1	A E H I K	II	陶灰-褐	SK13-8 未野
137	SK13	須恵器	甗	40	(13.8)	6.2	2.9	A B I	I	灰	SK13-15 未野
138	SK13	須恵器	甗	20	(13.5)	—	—	D E H I	I	にぶい赤褐	SK13-16 自然輪
139	SK13	灰輪陶器	甗	5	—	—	—	A E I K	I	灰白	SK13-20 須投
140	SK13	灰輪陶器	甗	5	—	—	—	A I K	I	灰白	SK13-19 須投

第38表 土城出土遺物観察表(4) (第74図・75図・76図)

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
141	SK13	土師器	環	80	12.9	—	3.6	H1K	Ⅱ	にふい・橙	SK13-1
142	SK13	土師器	環	70	12.2	7.8	3.3	AH1	Ⅱ	橙	SK13-3
143	SK13	土師器	環	90	12.4	—	—	H1K	Ⅱ	にふい・橙	SK13-2
144	SK13	石製品	砥石	—	長さ(8.4)	幅13.0	厚さ7.1	重さ829.5g	—	—	SK13-21
145	SK14	須恵器	環	70	12.5	5.2	3.8	E1K	Ⅰ	オリーブ灰〜灰	SK14-3
146	SK14	須恵器	環	20	—	—	—	DE1K	Ⅱ	灰	SK14-4 未野
147	SK14	須恵器	環	80	13.2	6.4	4.0	EH1K	Ⅰ	灰〜黒灰	SK14-5 未野
148	SK14	須恵器	環	90	13.0	6.2	3.8	ABE1K	Ⅱ	灰	SK14-6 未野
149	SK14	須恵器	環	85	12.7	6.1	4.0	EH1	Ⅰ	灰〜にふい・褐灰	SK14-7 未野?
150	SK14	須恵器	皿	40	(12.0)	(6.2)	1.7	EH1	Ⅰ	暗灰	SK14-1 未野?
151	SK14	須恵器	皿	30	(11.9)	(6.0)	—	ABE1K	Ⅰ	灰	SK14-2 未野
152	SK14	灰輪陶器	高台付埴	70	—	8.8	—	I	Ⅰ	灰白	SK14-8 猿投
153	SK14	緑輪陶器	埴	破片	—	—	—	KL	Ⅱ	淡黄色	SK14-9 猿投
154	SK10-13-14	須恵器	環	60	13.2	6.8	3.9	AB	Ⅰ	黒灰	SK10-13・14-2 未野
155	SK10-13-14	須恵器	環	60	12.7	5.3	4.2	CDE1K	Ⅰ	灰	SK10-13・14-1 未野
156	SK10-13-14	灰輪陶器	長頸壺	—	—	—	—	IK	Ⅰ	灰	SK10-13・14-7 猿投
157	SK15	須恵器	環	95	12.5	6.6	3.9	E1JK	Ⅱ	灰白	SK15-1 南比企
158	SK19	須恵器	蓋	100	3.2	—	—	AEH1K	Ⅱ	灰	SK19-1 未野 表面磨滅
159	SK20	須恵器	環	55	12.6	5.2	4.0	CEH1	Ⅱ	灰	SK20-1 未野
160	SK20	灰輪陶器	埴	5	—	—	—	IK	Ⅰ	灰白	SK20-4 猿投
161	SK20	石製品	紡錘車	30	上面径4.0	孔径(0.8)	厚さ(1.5)	重さ10.8g	—	—	SK20-3 滑石? 被熱
162	SK21	須恵器	高台付埴	25	(13.0)	(6.3)	4.7	BEH1	Ⅰ	黒灰	SK21-8 未野
163	SK21	須恵器	高台付埴	30	(13.0)	(6.9)	5.2	BEH1JK	Ⅰ	灰	SK21-7 未野
164	SK21	須恵器	高台付埴	90	13.2	6.4	5.2	ACE1K	Ⅰ	灰〜黄灰	SK21-5 未野
165	SK21	須恵器	高台付埴	95	13.3	7.3	5.5	BEH	Ⅲ	にふい・赤褐	SK21-10 未野
166	SK21	須恵器	高台付埴	30	(13.4)	6.3	5.5	BE1	Ⅰ	灰	SK21-6 未野
167	SK21	須恵器	高台付埴	45	(13.8)	7.0	5.8	ACEH1	Ⅱ	褐灰	SK21-9 未野
168	SK21	須恵器	環	60	12.2	4.8	3.8	AE1K	Ⅱ	灰	SK21-13 未野
169	SK21	須恵器	環	70	13.0	6.5	4.1	ABEH1K	Ⅱ	灰	SK21-14 未野
170	SK21	須恵器	環	40	(12.9)	(5.0)	3.8	EH1	Ⅰ	黒灰	SK21-11 未野?
171	SK21	須恵器	環	90	12.5	5.7	3.9	ABEFH1	Ⅰ	暗灰	SK21-15 未野?
172	SK21	須恵器	埴	40	(12.6)	(5.3)	4.0	CE1K	Ⅰ	暗灰	SK21-12 未野?
173	SK21	須恵器	皿	50	(14.1)	6.5	1.9	ACEH1	Ⅱ	にふい・赤褐	SK21-26 未野?
174	SK21	須恵器	皿	40	(12.6)	5.9	2.1	CH1	Ⅱ	灰褐	SK21-1 未野
175	SK21	須恵器	皿	30	(13.0)	(5.8)	2.4	BE1K	Ⅰ	灰	SK21-2 未野
176	SK21	須恵器	皿	95	12.5	5.1	2.6	ABEH1K	Ⅱ	灰	SK21-4 未野
177	SK21	須恵器	皿	80	12.1	5.8	2.4	AE1K	Ⅱ	灰	SK21-3 未野
178	SK21	須恵器	長頸壺	15	(10.3)	—	—	IK	Ⅰ	暗灰色	SK21-39
179	SK21	灰輪陶器	埴	破片	(16.0)	(8.7)	5.2	IK	Ⅰ	灰	SK21-30 猿投
180	SK21	灰輪陶器	埴	100	16.7	8.0	5.5	GK	Ⅰ	灰	SK21-33 猿投
181	SK21	灰輪陶器	皿	20	(13.6)	(6.8)	—	IK	Ⅰ	灰白	SK21-29 猿投
182	SK21	灰輪陶器	埴	5	—	—	—	IK	Ⅰ	灰白	SK21-35 猿投
183	SK21	灰輪陶器	埴	5	—	—	—	IK	Ⅰ	灰白	SK21-34 猿投
184	SK21	灰輪陶器	埴	5	—	—	—	IK	Ⅰ	灰白	SK21-36 猿投
185	SK22	灰輪陶器	皿	破片	—	—	—	L	Ⅰ	灰	SK21-42 猿投
186	SK21	灰輪陶器	長頸壺	—	—	—	—	IK	Ⅰ	灰白	SK21-41 猿投
187	SK21	灰輪陶器	長頸壺	—	—	—	—	IK	Ⅰ	暗めの灰色	SK21-40 輪 猿投
188	SK21	緑輪陶器	輪花埴皿	—	(14.0)	(6.5)	2.8	K	Ⅰ	やや暗い灰	SK21-32 猿投
189	SK21	緑輪陶器	皿か埴	—	—	—	—	H	Ⅱ	淡黄色	SK21-31 尾北
190	SK21	須恵器	凹面観	破片	—	—	—	E1JK	Ⅰ	灰	SK21-38 破片 南比企
191	SK21	土師器	環	100	11.3	—	3.7	E1K	Ⅱ	橙	SK21-16
192	SK21	土師器	小型甕	40	(12.6)	—	—	CHK	Ⅱ	橙	SK21-20
193	SK21	土師器	甕	30	(14.2)	—	—	ACH1	Ⅱ	明赤褐	SK21-21
194	SK21	土師器	土埴	—	長さ2.55	幅1.0	孔径0.3	重さ1.8g	—	—	SK21-25
195	SK21	鉄製品	刀	—	長さ[22.5]	刃幅1.8	背幅0.4	重さ160.2g	—	—	SK21-28 鉄製品16
196	SK21	鉄製品	刀子	—	長さ[7.6]	刃幅1.0	背幅0.4	重さ13.6g	—	—	SK21-27 鉄製品15
197	SK22	須恵器	環	90	12.6	6.0	4.1	E1K	Ⅰ	黒灰	SK22-3 未野
198	SK22	須恵器	環	80	13.3	6.0	4.1	B1K	Ⅱ	暗灰	SK22-2 未野
199	SK22	須恵器	皿	20	(13.6)	(6.7)	—	BCE	Ⅱ	灰白	SK22-4 未野
200	SK22	須恵器	皿	10	(19.0)	—	—	BCEH	Ⅱ	灰	SK22-5 未野

第39表 土壌出土遺物観察表 (5) (第76図)

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
201	SK22	土師器	台付甕	25	(11.8)	—	—	ACIK	Ⅱ	にぶい赤褐	SK22-1
202	SK26	須恵器	高台付壺	100	—	6.4	—	CEIK	Ⅱ	灰-黒	SK26-1 未野
203	SK26	須恵器	環	30	12.0	5.0	3.9	EIK	Ⅱ	灰-黒	SK26-2 未野
204	SK26	須恵器	高台付壺	25	(11.8)	(4.4)	3.0	CEHK	I	灰	SK26-5 未野
205	SK26	須恵器	皿	30	12.9	6.0	2.6	BCEH	Ⅲ	灰黄褐	SK26-4 酸化炭 未野
206	SK26	土師器	環	80	12.7	—	4.1	AEHK	Ⅱ	にぶい黄橙	SK26-3
207	SK27	須恵器	高台付壺	70	(13.2)	6.2	5.7	CDEHIK	Ⅲ	灰-黒灰	SK27-4 未野
208	SK27	須恵器	高台付壺	30	(12.8)	6.3	5.0	ABEH	Ⅱ	灰	SK27-3 未野
209	SK27	須恵器	環	80	12.6	6.0	4.1	CDEIK	Ⅲ	黒-暗灰	SK27-1 未野?
210	SK27	須恵器	環	100	(12.4)	5.6	3.9	CEIK	Ⅱ	灰	SK27-2 未野
211	SK27	灰輪陶器	高台付壺	30	—	(7.2)	—	IK	I	灰白	SK27-5 瘡投
212	SK27	緑輪陶器	残塊	破片	—	—	—	L	Ⅱ	淡黄色	SK27-6 瘡投

(5) 溝跡

第4号溝跡 (第78図)

東西方向の溝で、調査区を横断し、両端とも調査区外に延びる。重複する全ての遺構より古い。検出した長さは47.9m、幅は0.4m前後でほぼ一定している。深さは11~28cmである。

遺構に伴う遺物は出土しなかった。

時期は、重複する遺構の中で一番古い第15号住居跡の時期が、8世紀前葉であることからそれより古い。

第9号溝跡 (第77図)

B5グリッドで検出した。南北方向の溝で北側

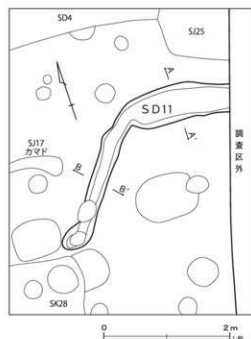
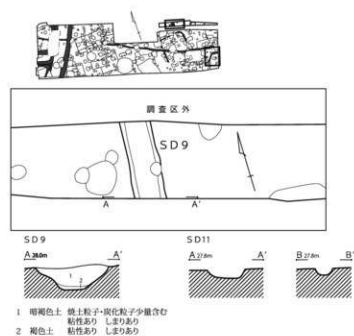
は調査区外に延び、南側は埋設物の下に延びるが南側の調査区では確認できなかった。検出した長さ1.25m、幅0.46~0.49m、深さは36cmである。

遺物は出土しなかった。時期は不明である。

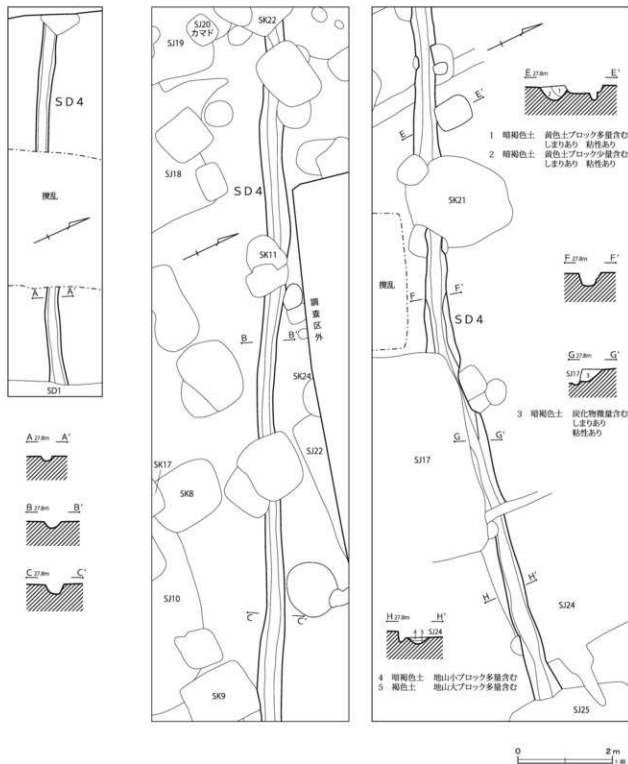
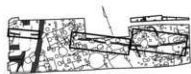
第11号溝跡 (第77図)

C6グリッドで検出した。第6号掘立柱建物跡、第1号柵列と重複しており、柵列より古いか掘立柱建物との新旧関係は不明である。東側は調査区外に延びる。長さは4.0m、幅は0.58~0.25m、深さは9~14cmである。

遺物は出土しなかった。時期は不明である。



第77図 溝跡 (1)



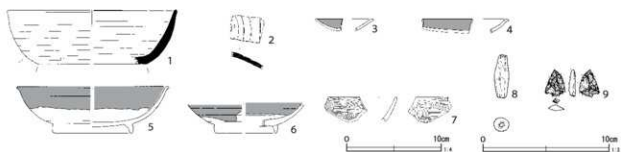
第78図 清跡 (2)

(6) グリッド出土遺物

グリッド出土遺物として扱ったものには、当初の遺構確認時に遺構が把握しきれないまま取り上げたものがある。当然ながらそれらの遺物はB3グリッド周辺に集中している。その多くは第2号

掘立柱建物跡に関連する可能性が高い。

また、土器や遺構は検出されなかったが、縄文時代の石鎌が1点出土した。



第99図 グリッド出土遺物

第40表 グリッド出土遺物観察表 (第79図)

番号	遺構	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	A3G	須恵器	環	20	(17.8)	(11.4)	5.7	E H J	II	灰	A3G-1 A3G-P2 南比企
2	B3G	須恵器	蓋	—	—	—	—	E I K	I	灰	B3G-5 B3G-P33
3	表採	灰輪陶器	輪	—	—	—	—	I K	I	灰白	表採-8 破片 猿投
4	B3G	灰輪陶器	皿	5	—	—	—	I K	I	灰白 やや暗い灰	C3G-5 C3G 猿投
5	C3G	灰輪陶器	埴	45	(16.0)	(8.5)	4.9	砂粒少々	I	灰	B3G-24 表採-7 猿投
6	B3G	灰輪陶器	高台付埴	35	—	(6.0)	—	K	I	灰白 やや暗い灰	B3G-11 B3G-P24 表採-4 猿投
7	A3G	土師器	坏	5	—	—	—	A H I K	—	黒	A3G-2 A3G-P10 黒色
8	C3G	土製品	土鎌	—	長さ3.35	幅1.15	孔径0.35	—	—	黒	C3G-1 C3G-P6
9	B3G	石製品	石鎌	—	長さ(2.1)	幅(1.6)	厚さ0.55	—	—	—	B3G-6 B3G-P1 縄文時代末期

第41表 遺構新旧対照表

新	旧	備考	新	旧	備考	新	旧	備考
—	SB16	欠番 S16南側部分になる	SB2 P20	C3G P17		SB4 P5	C5G P5	
—	SK5	欠番	SB2 P21	SB5 P2		欠番	SB5	
SB2 P16	SK10		SB2 P22	C3G P11		SB2 P21	SB5 P2	
SB2 P11	SK11		SB2 P23	B3G P10		SB2 P19	SB5 P4	
A3G P10	SK12		SB2 P24	B3G P58		SB2 P18	SB5 P5	
—	SK23	欠番	SB2 P24	B3G P34		SB6 P1	C5G P38	
SB1 P1	SB1 P6		SB8 P1	B3G P27		SB6 P2	C6G P18	
SB1 P2	SB1 P1		SB8 P2	SB2 P2		SB6 P3	C6G P15-33	
SB1 P3	SB1 P2		SB8 P3	SB2 P4		SB6 P4	C6G P25	
SB1 P4	SB1 P3		SB8 P4	SB2 P5		SB7 P1	C5G P26	
SB1 P5	SB1 P4		SB8 P5	SB2 P6		SB7 P2	C5G P34	
SB1 P6	SB1 P5		SB8 P6	SB2 P7		SB7 P3	C6G P23	
SB1 P7	SB1 P5		SB8 P7	B3G P38		SB7 P4	C6G P22	
SB1 P8	SB1 P8		SB8 P8	B3G P57		SA1 P1	C5G P17	
SB1 P9	SB1 P9		SB8 P9	B3G P44		SA1 P2	C5G P23	
SB2 P10	B3G P16		SB8 P10	B4G P6		SA1 P3	C5G P29	
SB2 P11	SK11		SK3 P3	C5G P40	ビット番号なし	SA1 P4	C5G P36	
SB2 P12	B3G P21-54		SK3 P4	SB3 P3		SA1 P5	C6G P34	
SB2 P13	B3G P22		SK3 P5	SB3 P4		SA1 P6	C6G P35	
SB2 P14	B3G P45		SK3 P6	SB3 P5		SA1 P7	C6G P33	
SB2 P15	B4G P5		SK3 P7	SB3 P6		SA2 P1	C5G P25	
SB2 P16	SK10		SK3 P8	SB3 P7		SA2 P2	C5G P32	
SB2 P17	C4G P9-10		SK3 P9	SB3 P8		SA2 P3	C5G P39	
SB2 P18	SB5 P5		SB4 P1	C5G P4		SA2 P4	C6G P32	
	C4G P8		SB4 P2	C5G P11				
	SB5 P4		SB4 P3	C5G P1				
SB2 P19	C4G P3-7		SB4 P4	C5G P8				

V 調査のまとめ

調査した遺構の時代別の内訳は、近世が井戸跡2基、中世は溝跡7条、奈良・平安時代が堅穴住居跡2軒、掘立柱建物跡7棟、溝跡4条で、他にピットが多数ある。

近世の遺構は、中世以降に堆積した土層が1m以上あり、近代の生活面と重なっている可能性が高く、井戸跡のみが遺構として捉えられた。

中世の遺構は溝跡だけであったが、青磁破片と獣骨が出土した。溝跡は調査区の西側に集中しており、SD1の東側には中世の遺構は存在しなかった。これらの溝跡は、遺跡の南西部に隣接する熊谷氏館跡と何らかの関連があると想定される。

奈良・平安時代の遺構は、大きく6期に分けられる。

1期は、遺物が少ないが出土した土師器からSJ3・4・6が該当し、7世紀末から8世紀初頭と考えられる。

2期は、SJ7・10・11・18が該当し、須恵器環の形態から8世紀前葉である。SJ11は、底径のやや小さいものを含んでおり、SJ10との重複関係から、この中でもやや新しいであろう。「楊井」の墨書(第26図1)は、北島遺跡でも1点出土しており、字体や墨書の位置などが類似している。

3期は、SJ5・8が該当し、8世紀中葉と考えられる。SJ22は遺物が少ないがこの時期と考えておきたい。SJ12も本期に含まれるが、SJ5との重複関係からやや古いと思われる。この時期までは、南比企産の須恵器が使用されるが、この時期以降、未野産の須恵器が変わっていく。次の4期との間には時間差がある。

4期は、SJ9・14・23が該当し9世紀前葉と考えられる。SB3もこの時期と考えておきたい。

5期は、SJ19・25が該当し、9世紀中葉と考えられる。SJ21は4期から5期の中で捉えられる。

6期は、SJ17・24・SB2・SK2・3・

4・6・7・9・13・14・16・21などが該当し、9世紀後葉～10世紀初頭に比定できる。四面庇付建物が作られ、遺物量が最も多くなる時期で、緑釉陶器、灰釉陶器が多量に出土した。SB2の周辺土層及び柱穴には、焼土や炭化物が多量に含まれ、この建物が火災に遭ったことを推定させる。緑釉陶器や灰釉陶器は、二次的な被熱によって釉が飛んでいるものが多い。SK9も同様の土層で、遺存率の高い遺物が多量に出土し、その状況から一括廃棄されたものである。SK21とSB2から出土した破片は接合し、遺構の同時性が高い。また、この時期の土層は埋没状況が全て同様の土層で、同一状況下で埋没したことを示している。このような状況から、SB2と周辺の土層には有機的な関連が想定され、これらの土層はSB2の火災後に焼け跡を整理するために掘られ、土器等が捨てられた後、埋め戻されたのではないかと考えられる。そして、SK9の出土土器には「上家」の墨書土器が4点含まれており、この建物或いは地区が「上家」と呼ばれていたことが想像される。

この時期の四面庇付の建物は、北島遺跡や調方木遺跡で調査されている。両遺跡とも緑釉陶器、灰釉陶器、墨書土器を多量に出土し、本遺跡を含めて、この地域には緑釉陶器、灰釉陶器の保有率の高い集落が集中していることになる。これらの集落がいずれも星川沿いの扇状地端部に立地していることは、相互の関係や性格を考える上で注視すべき要素である。

今回の調査は狭い範囲での調査であり、集落或いは遺跡の全体像は現段階では不透明である。周辺遺跡との関係や、郡域や郷の比定の問題など課題も多いが、今回の調査はこの地域が古代において物の流通が盛んな地域であったことを裏付ける意味で貴重な成果となった。今後、遺跡周辺の調査が進み、資料が増えることを期待する。